

間に暮行くらむ趣見えたり。さて、川の縁語もて、過ぎて早きとしもいはむを、流れて早か
轉義したり、二句は、けふといひ暮しての意なるを、初句のいひに譲りて、略けるなり。作
者は、流石に、漢學者の事とて、おなじ歳暮の感懐を賦するにも、歲月如流の句意を骨子とし
て、これに、潤飾敷演の皮肉を加へたり。詞流麗にして、聲調勁健なり。

歌奉れとおほせられし時によみて奉りける

きのつらゆき

行く年のをしくもあるかな増鏡見る影さへに暮れぬと思へば

(釋)○増鏡 眞澄鏡の略、よく清みて光明らかなる鏡をいふ。

一首の意は、とかく、暮れて行く年が、惜しい事ではあるよな、鏡で見る自分の影までが、年
と同じやうに、老い暮れたと思ふによつてサとなり。

(評)唐詩に、「霜鬢明朝又一年など云へる趣を詠めるか。明鏡の裡、形影自ら相憐んで、老の迫るを
嘆き、年の逝くを慨く。誰れも、思ひ當る、感懐なるべし。見る影さへに衰へぬといふべきを
轉義して、暮れぬといへるは、年の縁語を借りて、理りを合せたるものなり。

古今和歌集卷第七

賀歌

題をらす

よみ人をらす

わが君は千代に八千代にさゝれ石のいはほとなりて苔の蒸すまで

(釋)茲に、賀歌といへるは、皆、算賀の歌なり。算は年齡の謂にして、四十歳を初老として、十年

毎に、これを行ふ。原と、支那の風俗なりけるが、奈良時代には、既に、わが邦に行はれて、

東大寺要録に、僧良辨等、聖武天皇の四十の御齡を祝せし事見え、猶、二三の書にも、算賀の
事を載せたり。平安朝になりては、殆ど數ふるに違めらす。皆、長壽者の子弟等、自ら、親戚

故舊を會して、宴を張るなり。かゝれば、かの天皇の大御世の萬歳を祝する歌は、この部中に

は無しと知るべし。そのこれあるは、後撰集以後の事なり。○わが君は 君は、第二人称の代
名詞に用ゐたり。天子の謂にあらず。○八千代に 八千代にましませとあるべきを略けるな

り。八千代は、八千年の義なるが、茲は、只、概數を擧げたるまでなれば、數に拘はるべから
ず。○さゝれ石 細石なり。小をさといひ、打重ねては、さといふ。即ち、さやく、さ

らぐ、さゝ波の類なり。さて、又、ら、或は、れといふ接尾語を添へて、さゝら、さゝれ石など

いへり。それ一轉しては、さゝれとのみいひて、小石の事となるに至りぬ。○いはは石秀の義にて、大なる岩をいふ。○苦の蒸す 蒸すは生すなり。高皇産靈神の御名の産は、これに同じ。一首の意は、私の頼み奉る君は、千年も万年も、御繁島で、御出で遊ばされて下されませ。いや、それにては猶飽かず、いと小さき石の、いと大なる巖はとなつて、それに苦の生るまで、御出でなされませとなり。

(三四〇)

(評)それならば、或は飽足りなむか、の餘意あり。山厲河帯の語もある如く、巖石は、缺けて小石とこそなれ、小石の長じて巖石とならむ事、殆どあり得べからざる事實なれども、昔は、和漢を通じて、實に、まか思ひたりしを如何にせむ。時代思想を餘所にして、論すべきにあらねば、さる物として、この歌を見るに、さゝれ石の小と、いははの大とを對揚せしめて、その變化の時間、無窮なる趣を含め、それにも、猶いまだしときて、苦の蒸すまでと、今、一層の時間を持たせたる漸層法、この種の想を發展する、適當の語法なり。されば、二句も、千代に八千代にと、同調の言を折返して、漸層法を用ゐたるぞ、宜なるべき。然れども、聊か、詞足らざる憾あり。六帖、道濟十牀、新撰和歌、奥儀抄、顯本等には、千代にましませとあり。かからば、意義は完全すべけれど、調のうへ、いたく後れて、永遠なる意味と、概念とを表彰し、把持せしむる事、薄弱なり。詞を補ひて聞けば、かつく聞かれぬにもあらねば、われは、猶、本文の方を執せむとす。限りなき齡といはむを轉發して、千代に八千代にと、數量の語に易へたるも面白し。初句、わが君としもいへるは、八開まし我が大君、我妹子、あが佛などいふ類

にて、親みたる趣見えて、その行末の、久しからむ事を祈るも、宜なりけり。辭様も、構想も面白く、格調も高古莊重なれば、唯一の祝歌として、古來、詠吟誦せられたれども、その音節や、悲涼凄愴にして、陰鬱不快なるは、口惜し。蓋し、一首のうち、イ列音十、オ列音七ありて、その過半数は、商徴の哀音悲聲より成立ちたればならむ。洋々たる、暢諧快活の音節こそ、祝歌の性質には、協へるものなるを。

○

わたつみの濱のまさこを數へつゝ、君が千年のありかずにせむ

(釋) ○まさこ 眞砂子、或は、眞砂子の約とぞ。萬葉集には、まなごとも云へり。細き砂をいふ。まは例の美稱。○ありかす 數といふに同じ。ありに重き意はなし。添へて、熟語に云へるのみ。これある數とも、數取とも解ける説もあれど、妥當ならず。一首の意は、海の濱の砂の、限りも無い數を數へて、それを、君の御長壽で御出で遊ばす、數にせうと存じますとなり。

(評)萬葉集卷四に、

八百日ゆく濱のまなごあが戀にあにまさらじか沖つ島守

(三四一)

に、著想は類似したり。但、君が千年にせよ、あが戀にせよ、何にされ、無量數の譬喩に砂を用ゐる事は、佛教の影響なる事を、忘るべからず。さるは、佛經中に、

無數恒河沙

の語、數多散見して、當時の人士が、朝夕の勤行に、誦を成まじと覺ゆればなり。千年は窮りなき齡の意を轉義したるものなることは、上の歌に同じ。

○

まほの山さしでの磯にすむ千鳥君がみ代をばやちよとぞ鳴く

(釋)○まほの山さしでの磯　まほの山は、顯註に、能因が歌枕を引きて、甲斐國に在りと云へり。今、同國甲府より東北三里許、釜無川に沿ひて小邸あるあたりを、さし出といひ、それより二里許、北方にある山を鹽山シヅメと云へり。これ、まほの山さし出の磯なりとぞ。甲斐は、四方山にて、國中の水、皆、富士の西麓に集注し、鵜澤を経て、富士川となる。若し、この鵜澤の口に塞がりたらば、忽ち、一大湖を現せむとす。土俗の口碑に曰く、奈良時代に、行基菩薩、この鵜澤を開鑿して、水を駿河に切落まじにて、其の以前は湖水なりしと。されども、甲斐の湖といふ事、絶えて物にも見えざるに、鹽山とさし出との距離、餘に遠くて、いひ續け難し。假令、太古に於て湖なりしとするも、それを以て、後世の歌を釋せむ事は、無理なるをや。又、さ

し出の磯は、さし出たらむ磯なるべし。萬葉に、越出之堤といへる類にて、何處にても、いはるべき語と覺ゆ。契沖云ふ、平家物語に、「まほの山打越えて、能登の國小田中親王の塚の前に陣を取る。」又、「能登越中の境なる志保の山」と見えたる、その志保の山にて、さし出の磯もそのあたりならむと。眞淵曰く、延喜式に、能登國羽咋郡に、之乎神社あり。萬葉集に、赴參氣比大神宮一行海邊之時作歌とて、「之乎路可良多太古要久禮婆」とある之乎を、後に、まはと誤り、それより、さし出の磯とは、設けてよめるかといへる、兩説共從ふべきに似たり。○すむ千鳥　顯本、なく千鳥とあり。眞淵曰く、下にも、鳴くとあるは、その理を云ふにて、古歌のいひなしなり。後世、同語の重複を嫌むとて、さかしらにすむと改めしならむと。景樹も、これに従へり。伊勢集には、ある千鳥とあり。千鳥は、水禽にて、多く、河海の上に群りて鳴き、飛ぶに、廻旋して列を成す。鳴に類し、鶺鴒に似て小く、足四指にして、前三後一なり。種類多くして、その羽色にも相違あり。

一首の意は、まほの山さし出の磯に鳴く千鳥でさへ、貴方の御世をば、八ちよくとサ、鳴きますワイとなり。

(評)前にも云へる如く、賀部は、皆、祝壽の歌なれば、君が御代といひても、大御世の謂にはあらず。初二句、只在りにいひ續けたるものながら、汝のさし來る磯邊に、千鳥の鳴立つ景致、思ふべく、その千鳥の鳴聲の、ちよくと聞えたるより、彌の字を冠せしめて、八千代と鳴くと取成したる秀句なり。世といふ語を折返したるが、三句結句の鳴くの重疊と、相貫聯して、節

奏の諸ふを見る。先づ、古調中の手のある歌ならむ。

四句、顯本、君がみちよをとあり。定家の密勸にも、異論なし。六帖、伊勢集には、君が齡を
とあり、今本、君か御代をばは、崇徳院御本なる事、顯註に云へり。景樹が折衷して、君が千
代をばと改めたるは、私なり。

○

わがよはひ君が八千世にとりそへてと、めおきては思出にせよ

(釋)○よはひ 齡なり。○とりそへて 添へてなり。とりは添詞。○おきては 置いたならばの意、
春歌上「梅が香を袖に移してとめてば」とあるに同じ。○思出に 思ひ出し種になり。

一首の意は、自分のこの長命なる齡を、貴君に進せむと思へば、これからは、貴君の八千代の
齡のうへに、この自分の齡をも取添へて、御手許に留めて置いたならば、それを、幾千年も長
生なされた後に、自分の事を思ひ出す種にまて下されとなり。

(評)七八十の老人の、同年輩か、或は、年下の友人の年賀を祝ひて、贈りしなるべし。されば、我
が長壽を譲るにより、思ひ出にせよなど、打解けたる事もいはるるなり。餘に、趣向を構へ
過ぎて、俗惡なり。契沖が、君より臣下に賀を賜へるに、同じくは、この久しき齡を、君がも
とよりの八千代の上に取添へて、留め置きて、わが思ひ出にせむと詠めるか、せよとは、みづ
から下知するなりといひ、景樹が、といめおきてばを、とめたればと、過去に解せる、皆、

非なり。

顯本に、結句、おもひでにせむとあるは、わろし。

仁和の御時僧正遍照に七十の賀給ひける時の御歌

かくまつゝとにもかくにも長らへて君が八千代にあふ由もがな

(釋)仁和の御時云々 三代實錄に、「仁和元年十二月十八日戊辰、延僧正法印大和尚位遍照於仁壽
殿申曲宴、今年始滿七十、天皇慶賀、徹夜談賞、太政大臣等預席焉」とある、この時の事な
り。眞淵曰く、今本に、御歌とあり、古本、御の字なし、延五記にもなし、歌の體、必ず、御
製にあらず、遍照の詠めるならむと云へれども、御の字の有無はとにかく、遍照が、みづから詠
める歌の詞書の體にあらず。眞淵の説非なり。○かくまつゝ かくは、天皇と遍照との親交の
濃らざるを指す。宣長が、今度の賀宴を指すと云へるは、誤なり。○長らへて 生存しての意。
○もがな もは歎辭、がなは願望の助辭。

一首の意は、かう互に、親しく交らひくして、朕も肖かりて、どうまてなりとも、かうまて
なりとも、存命で居て、其許の八千歳の末にまで、何卒、逢ふ手立、あつてほしい事よとな
り。

(評)遍照を、必ず、千歳も長生するものと定めて、羨みて、及びもなき業ながら、その行末までも、
追従えたいといへるに、一方ならぬ、祝賀の大御心は見ゆゆり。抑も、光孝帝が、遍照を歸依

崇重を給へる事は、格別なりければ、大みづから、弟子の禮を執りて、宮中に賀宴を催させられ、御歌をも賜ひしなりけり。思ひ入りたる、眞摯の情は深げなれど、全首の聲響、イオ二列音多くして、何となく、萎靡衰颯せる風調なるは、實算こそ、遍照よりは、十五ほどの劣りにおはすれ、この後、三年を待たで、崩御あらせられしをもて思へば、その程は、御病容などに、御心地、よろづすがやかせ給はぬ頃の、御作なりけらし。

仁和の御門のみこにおはしましける時に、御をばの八十の賀に、あろかねを杖に作りけるを見て、かの御をばにかはりてよめる、

僧正遍照

千早ぶる神のきりけむつくからに千年の坂も越えぬへらなり

(釋)仁和の御門云々 光孝天皇が、未だ、時康親王にて居給ひし時に、御母贈皇太后藤原澤子(贈太の長女)の御姉妹、いづれかの八十歳の壽筵に、銀を壽杖に作りて献りたりけるを、遍照が拜見して、その姨に代りて詠めりとなり。猶案するに、この御をば、澤子の妹とすれば、藤原長良の室にて、照宣公基經の母なるべけれど、八十賀とあれば、年齢當らざるべく、依りて、澤子の姉なりし人と假定すべし。宣長は、をば、おほの假字なるべしと云へり。おほは、大母(おほは)の略にて、祖母をいふ。さては、光孝帝の御父仁明帝の御母なる、嵯峨帝の皇后橘嘉智子を申すことに當れども、果して、檀林皇后の八十賀ならむに、詞書の書體、かくはあるまじき理りな

れが、猶、いかやなるべし。〇きりけむ 杖は、多く、竹木を用ゐるが故に、杖に作るを、切ると云へり。〇つくからに 杖を衝くにつけてなり。〇坂も 坂さへもの意なり。景樹が、坂に榮ゆるを寄せたりと云へるは、牽強ならむ。

一首の意は、親王様より下されたるこの杖は、一通りの物とは見えぬ、大かた、神様の、御切りなされた杖であらう、されば、この杖を衝くにつけては、越え難い千年の坂さへも、越えられさうだワイとなり。

(評)杖といふ言を、實物に譲りて、廻護したり。杖は、坂路には、殊に、用ある物故に、在經(アトヘ)難き千年を、越え難き坂路に譬喩して、千年の坂も、この杖ならば、越えぬべらなりと讚稱して、神の切りけむとある、前提に應せしめたり。その神の爲業にして託せるは、拾遺集に、

あふ坂をけさこえくれば山人の千とせつけとてきれる杖なり

すめ神のみやまの杖に山人の千年をいのりきれる御杖ぞ

の、山人の所爲に託せると同じく、その結構の、人間を絶して、たゞならぬ由を、稱揚せむとてなり。かやうに、口を極めて、貴ひ物をしも取はやすは、即ち、その贈り主の厚意を感謝するに當る事にて、畢竟、かの射人先射馬の筆法なるべし。詩想豊婉にしも、例の狂痴の意をさへも寓したるは、花山僧正の特色。

二句、六帖、家集、顯本等に、神やきりけむとあり。註家多く、これに據れるに、眞淵、獨、本文を執したり。成るべく、治定したる方、狂痴の意を増して面白ければ、神のにもあるべく

覺ゆれど、調子下りて、聲韻不快なり。猶、神やと、花やかならむぞ、祝賀の歌には、ふさはしかるべき。

(三四八)

ほりかはのおほいまち君の四十の賀九條の家にてあける時によめる、
在原業平朝臣

櫻花ちりかひくもれおいらくの來むといふなる道まがふかに

(釋)ほりかはのおほいまち君云々 藤原基經公の第、京の二條堀河にありければ、世に、堀河の太政大臣と稱しき。この公の四十歳の壽筵を、別第の九條の家にて行はれける時、業平の詠めるにて、賀は、貞觀十七年の春の事なり。○ちりかひくもれ 散交ひて曇れといふこと。○おいらく 老ゆらくの轉、老ゆらくは、おゆるの延言なり。されど、茲は、老といはむに同じ名詞として用ゐらる。

一首の意は、老といふ奴めが、來うといふ沙汰のある道の、紛れて知れぬかのやうに、コリヤ櫻の花よ、澤山散合うて、そこらが、聞く曇るやうにきて呉れいとなり。

(評)さらば、老奴も、定めて踏迷うて、得來まい程に、の餘意あり。四十を、老の山口とする事は、元來、漢土の典故に據れるものなれば、來むといふなると、人言に取做したり。さて、今より、老の迫り來らむ事をいとほしみて、いかで進りて、一公の御齡の更けぬやうにきてあげたし、と希ふ餘り、折節の賀宴に、落花の繽紛たるを見て、常は、な散りそとあたらしむ物を、

今日ばかりは、曇るばかり散れと、命令したる狂痴の想、流石に、業平なり。老らくの擬人々きたをかしからずやは。

さだときのみこのをばのよそぢの賀を大井にてあける
日よめる
きのこれをか

龜のをの山のいはねをとめておつる瀧のゑら玉千代の數かも

(釋)さだときのみこのをば 貞辰親王は、清和天皇第七の皇子にて、母は藤原基經の女、佳珠子の女御なり。故にをばこの姉にて、これも、清和の女御なりける、賴子を指せるならむ。宣長が、祖母なるべしと云へるは、據なき斷見なり。大井は、山城國嵯峨の大堰の里なり。其處に、姨の家ありしか。○龜のをの山 龜の尾山、又、龜山ともいふ。山城國葛野郡にて、嵯峨の天龍寺の上にある。龜の藏六の形したる山なれば、名づく。尾は借字にて、岑の義なり。このあたりの山、横の尾、梅の尾の尾、亦同じ。字面に拘泥して、龜の尾を引ける形と説くは、穩しからず。前中書王の菟裘賦には、「吾將入龜緒之巖隈、歸菟裘而去來」と作り、自註に、龜緒便龜山也、猶如龜尾之讀故云、と見ゆ。○いはね 岩の根なり。根は、軽く、添辭として用ゐる時もあり。○とめて 尋ね求めてなり。○瀧のゑら玉 瀧の水の、岩に碎け散るが、玉の如く見ゆるを、直に、瀧の白玉と譬喩したり。○かも かなと同じき歎辭とするは粗し。かは疑辭、もは嘆辭にて、カマアと譯すべし。

(三四九)

一首の意は、あのめでたい龜の名に呼ぶ、龜の尾の山の岩を、傳うて流れ落つる、瀧の水の白玉の多い數は、御長壽で御出遊ばす、御命の千年の數であらうかとなり。

(評)龜鶴を長壽の物とする事は、もと、漢土におこれり。即ち鶴は貌姑射の山に住みて、仙人の伴侶とせられ、龜の經あがりし物とせる白龜、綠毛龜の類、神物として、太平の祥瑞と稱せられき。かゝれば、これに擬へて、言ばきはす事も、既に久しき習慣となりぬ。今、大井の里に開ける賀筵なれば、近邊なる、萬年も生くといふなる龜山を思ひ寄せ、巖も、動さなき常磐の物なれば、その龜山の、その岩根をと、取並べて、下旬に、千代の數といひ出でむ、觀樂とえたり。瀑布の飛沫、玉を跳らすその數は、げに數へ盡すべきにあらねば、その人の齡の數に擬へむに由あり。無窮の意を轉義して、千代と換へいふ事、例の辭様なり。意調、兩つながら、舒暢。

さだやすのみこの、きさいの宮の五十の賀^{ハレ}たてまつりける御屏風に、櫻の花のちるゑたに、人の花見るかたかけるをよめる、

藤原興風

いたづらに過ぐる月日はおもほえて花見てくらす春ぞ少なき

(釋)さだやすのみこ云々 貞保親王は、清和天皇第五の皇子なり。きさいの宮は、貞保親王の母后の事にて、二條后藤原高子なり。五十の賀奉りけるは、五十の御賀の事、行ひ申し上げしなり。

御屏風は、御賀宴の時に立つる、御屏風を新調するにて、總べて、賀の時には、老人にせよ、幼者にせよ、大切に於て、荒き風にも當てじの構へにて、屏風をもて、その座の背後を圍ふ習慣なりき。櫻の花の散る下に人の花見るは、その屏風の繪の狀にて、かたは、圖様の義なり。○いたづらに 徒に、むだになり。○おもほえて 思はれずしての約轉なり。

一首の意は、何の事もなしに過ぎて行く月日は、過ぐるとも思はれずして、うかく暮すが、このやうに、面白き花を見て暮す春はサ、きつう日數が少ないワイとなり。

(評)屏風の畫中の人の心になりて、花散りて春盡きなむとするを惜む情を詠めり。思はく通りにはならぬものにて、多からば宜からむと思ふ春は、少なしと打怍びたる、げに、誰れも同感なるべし。句題和歌、新勅選集に、大江千里、

年月にまさるものなしとおもへばや春しも常にすくなかるらむ
これは、「歳時春日少」といふ題にて詠める歌なり。この種の想は、當時、既に、類型多かり。されども、誰れも、思ひ寄る一定の思想を、尤も、適當なる言語を以て、いひ現し得たるなれば、金言、或は、諺などいふらむもの、實質をさへ具へて、千古、人口に膾炙せらるゝ所以なり。春を、花見て暮す、と形容せる、いかにも、長閑やかに娛しげなる趣見え、いと遠く、過行く心地すべく覺ゆ。

さて、屏風の歌は、その圖様に本づきて詠むは、例の事にて、賀の屏風なりとて、あながちに、祝賀の意にのみ、拘泥する事なし。されば、これをも、陽に、千世萬世などはいはざれども、

花見て暮すは、快樂の極にもあり、月日の長きを希ふなど、その由なきに非すと云へる説は、牽強なり。

三句、朗詠集に、おほけれどとあるは、率易にして、いとわろし。

もとやすのみこの七十の賀のうしろの屏風によみてか
さける
きのつらゆき

春くればやとにまづさく梅のはな君が千年のかざしとを見る

(釋)もとやすのみこ 本康親王にて、仁明天皇の第五の皇子なり。一品式部卿、八條宮と號す。延喜元年薨じ給ひき。うしろの屏風とは、賀筵に、親王の御座の後に建つる屏風をいふ。よみてかさけるは、貫之は、歌書兩道の名手なれば、仰を承けて、歌も書も、皆、みづから、事執りし由なり。○かさし 髪挿の義、今いふ簪は、この轉じたるなり。遊宴の折節に、冠の巾子の根に、時の花、或は、造花を挿すこと、奈良、平安時代を通じての、風俗になりしなり。○見る 思ふといはむに同じ。

一首の意は、春が來ると、この庭に、まづ一番に咲く梅の花を、君が千年までの、春の御髪挿ぞとサ、存じまするワイとなり。

(評)詞書には見えざれど、これも、人の家に、梅の花咲ける繪様ありける屏風にて、その畫中の人になりて、親王の御壽を賀きたるなるべし。千年といへるも、例の轉義にて、幾久しく榮え給

ふ意なり。花を髪挿すは、即ち樂しきさびにする事なれば、折に合ひたる見立なり。

○

素性法師

いにしへにありきあらずは知らねども千年のためし君に始めむ

(釋)○ありきあらずは ありき、あらずりきはといふべきを、下の過去のきの助動辭を、上に譲りて略けるなり。○ためし 迹形、手本なり。普通にい、例の字を書けども、よくは當らず。一首の意は、千年も生きたる人は、昔にあつたか、無かつたかは知らぬけれども、假令、今まで、さやうの人は無きにもせよ、千年生きるためしは、及ばすながら御祝ひ申す私が、君に始めませうと、存じまするワイとなり。

(評)上句、理路に著またるやうなれども、下句、一途に思ひ入りたる、狂熱の程見えてをか。二句の疊語、一正一反、聲調よろし。

これ、及び次の歌は、題畫の歌にはあらず。單に、祝壽の意を述べたるなり。上なる詞書に、「よみて書きける」とあれば、貫之と同じく、自ら書せしならむ。延喜六年二月十六日、召されて、饗芳舎に於て、御屏風を書し、同九年十月二日、又召されて、御前に於て、屏風を書し、左中將源定方を去て、酒及び祿を被けられし事、物に見えたらば、素性は、貫之にも劣らぬ、書道の名手なりけむ事、決し。
初句、六帖に、いにしへもとあるは、わろし。

○

ふして思ひおきて數ふる萬代は神ぞあるらむわが君のため

(釋) ○ふして思ひおきて數ふる 臥して萬代を思ひ、起きて萬代を數ふる意。○萬代 萬年なり。

○神ぞあるらむ 神こそ知食して、守り給はめの意。あるは、只知るのみに非ず。計らひ行ふをいふ。

一首の意は、吾が、君の御爲めに、寐ても起きても、御年の數を、何卒、萬年までもと、指折り數へて願ひまする事は、人の力にこそ及ばずとも、神がサ、この心を御承知下されて、願の通りに、御取計らひなさるゝ事であらう、と思ふワイとなり。

(評) 初二句、起臥に萬代を思ひ數ふる、といはむ程の事を、切離して、對句を成せり。臥して、起きてと云へるに、平素、不斷の意あり。景樹が曰く、本來、わが君の爲め、ふして思ひ、おきて數ふると續くべきを、調に任せて、わが君の爲めを、結句に置けるより、君の爲めに神ぞあるらむの意を、倒裝したる語勢となりて、君の爲めの詞、全く、神の方にのみ重く係りて、君の爲めに起臥願ふの意は、却て疎くなれり。それも、立離れたる心ならねば、さる方に、かくも調べおろせるなりといへる、さもと覺ゆ。

三句、家集に、よろづ代をとあり。

藤原三善が六十の賀によみける

在原 滋 春

鶴龜もちとせののちはあらなくにあかね心にまかせはてむ

この歌は、ある人、在原のときははるがともいふ。

(釋) 藤原三善 この人の傳考ふべからず。○あらなくに 知らぬにの意。

一首の意は、人の長生の祝言に、譬へていふ鶴も、龜も、共に長生するものとは聞及んでは居るが、それも、千年も經つたその後は、どうあるやら知らぬに、それ故、例など引く事は罷めて、貴公が、何時まで居ても飽足らず思ふ、自分の心のまゝに、君の御壽命を、任せて置きませうとなり。

(評) さては、億萬年もいままさむの餘意あり。上に、「千歳のためし君にはじめむ」といへると、同趣同型なり。拾遺集に、

萬代もなほこそあかね君がためおもふ心のかぎりなければ
貫之集に、

百とせといはふをわれは聞きながら思ふが爲めはあかすぞありける

とあるも、亦、同想ながら、些の狂熱を少く。この歌の優れる所以は、全く、茲にあり。音韻の配合も、比較的平平均なり。左註に就きて、契沖曰く、この歌、一首の上に、滋春、時春の異を傳へて、當時、二人とも亡き人にて、慥に記せる物もなければ、多分に就きて、滋春と載すれども、異説を捨てぬ心にて、註せるにやあらむと云へり。

よしみねのつねなりがよそぢの賀に、むすめにかはりて
よみ侍りける、
そせい法師

(三五六)

萬代をまつにぞ君をいはひつる千年の蔭にすまむとおもへハ

(釋)よしみねのつねなり 良岑經世の事なるべし。世を也と誤れるならむと、眞淵は云へり。三代實錄に、「貞觀十七年五月十九日庚子、從四位下行丹波守良岑朝臣經世卒、」とあり。その經世の四十賀に、娘に代りて、素性が詠めるなり。「よみ侍りける」はいかゞ。一本、よめるとあるに従ふべし。○まつにぞ 待つに、松をかけたなり。○いはひつる いはひは、もと、齋の義なりしを、此の頃は、既に、祝賀の意に用ゐたり。つるは、小過去の助動辭にて、鶴を寄せたり。○蔭 松の蔭に、父の庇蔭を寄せたり。

一首の意は、君が萬年の御壽命を待つなれば、そのまつといふ名の松に寄せてサ、御祝ひ申したワイ、さうして、その千年も在る松の蔭に、鶴の住むやうに、私も、君の千年のお蔭を蒙つて、共に長う居ませうと、存じますればサとなり。

(評)契沖が、この時、松に鶴の居たるを作りて、祝へるに合せて、詠まれけるなるべし。千年の蔭は、松に寄せて父をいひ、住まむと思へば、鶴に寄せて娘みづからの事をいふ、と云へるが如し。松と鶴とのいひかけ卑しけにて、尤も、俗悪の歌なり。素性の他作に類せず。上句、六帖に、萬代の松にぞ年をいのりつるとありて、貫之の歌とせり。眞淵は、貫之の歌さ

まにあらずといへり。猶案するに、經世の四十賀を、最も遅く、歿年近くに行ひしものと見てもその頃は、貫之は、やうく、十歳以下の童兒時代なれば、かゝる歌詠むべくもなし。こは、六帖の謬なるべし。

内侍のかみの、右大將藤原朝臣の四十の賀をける時に、四季の繪かけるうしろの屏風に、書きたりける歌。

春

春日野にわか菜摘みつ、萬代をいはふこゝろは神ぞゑるらむ

(釋)内侍のかみ云々 内侍のかみは尙侍にて、茲のは、贈太政大臣藤原高藤の二女滿子をいふ。

(拾遺集に、三條内侍とある人なり。)こののは、ガの意にて、尙侍が、右大將の爲めに、賀宴を催したるなり。右大將藤原朝臣は、高藤の三男定國の事にて、泉大將と稱し、尙侍の兄に當る。躬恒集に、「延喜五年二月十日、宣旨によりて奉れる、和泉大將四十賀のれう、屏風四帖、内よりはじめて、内侍督殿にたまふ歌、」と詞書ありて、次なる「山高み」の歌、「すみの江の」の歌共に出でたり。貫之集にも、「延喜五年二月いづみの大將四十賀屏風の歌、おはせ言にて是れを奉る、」とありて、次なる「えらゆきの」の歌出でたり。四季の繪かける屏風は、上に云へる躬恒集に、屏風四帖とあれば、春夏秋冬の繪を、一帖宛にかきて、それに、人々の歌書かしめ給へるにて、専ら、醍醐帝の思食にて、出來たる屏風なりしなり。さて、この四季の屏風の歌ども、普通本には、作者を

(三五七)

記さず。又、外は、夏、秋、冬と端書あるを、春のみ書かぬは、いつれも、脱落きたるものなるべし。眞淵曰く、此度の歌七首に、今は作者を記さぬにつきて、この上の歌素性なれば、次々皆、素性の歌なりと思へるは、誤なり。六帖、家集等に、各、作者見えたり。その上、藤原家隆卿自筆の此の部を見しに、各、名あり。さて、この歌は、素性なりと云へり。げにも従ふべく覺ゆれば、この端書には「春」の字を補ひ、以下の歌には、作者の名を、一々填めたり。

○まゐらむ 上の「ふして思ひ」の條に云へるが如し。
一首の意は、御賀の爲めに、かう、春日野で、若いといふ名の若菜を摘み／＼して、御壽命の萬年までもあらむ事を、お祝ひ申す心願の程に、御先祖の春日の御神がサ、御納受なされて、御取計ひなさるのであらうとなり。

(評)繪様は、若菜摘の所なるべし。されば、奈良時代より、若菜の名所として詠來れる、春日野を思ひ寄れるより、その野なる春日明神は、天兒屋命を祀りて、藤原氏の遠祖なれば、それをも撮合して、せめても、君が老の若ゆるやうにと、名におへる若菜を摘むこの心は、君が祖神をまゐり給はむと、書中の人になりて祝せるを、一ふしとす。上に、
ふしておもひ起きて數ふるよるづ代は神ぞまゐらむわが君のため
と、落想相同じ。いづれも、素性のなり。

四句、大和物語、新撰和歌、家集、六帖等に、いのる心はとあり。

躬恒

山たかみ雲るに見ゆるくくらはな心のゆきてをらぬ日ぞなき

(釋)○雲る 空なり。雲といふに拘るべからざる事は、上に云へり。○心のゆきて 萬葉集三「わが宿に花を咲きたるそを見れど心もゆかす云々」土佐日記に「幣には御心のゆかねば御舟も行かぬなり」など見えて、満足する事をいふ。それに、心の往くといふ意を寄せたり。○をらぬ 折らぬなり。

一首の意は、山が高い故に、空のあたりに見ゆる櫻の花を、自身が行かれぬが、心ばかりが、其處まで往つて、満足して、その櫻の枝を折らぬ日は少ないとなり。

(評)霞の上に表れたる山の頂に、櫻を畫けるなるべし。そのけしき、見るから面白くて、心慰むなり。それを心のゆくといふより、擬人の方に就きて、心の往くに取倣し、さて、常に、花の上に心の馳すれば、「春毎に心をまむる花の枝に」などいへる如く、「心の往きて占めぬ日ぞなき」といふべきを、花の縁語につきて、折らぬと轉義して、層一層に巧めるなり。

六帖、躬恒集、家隆本によりて、躬恒の名を補ひつ。

夏

友則

めづらしきこゑならなくに時鳥こゝらの年をあかずもある哉

(釋)○こゝら 許多の意なり。

一首の意は、何時の年も、同じ聲して鳴けば、何も珍しい聲では無いに、あの時鳥は、數多の

年々を、さてもく、聞他かすもある事となアとなり。
(評)理窟にして、感興に乏し。

六帖、友則集、家隆本によりて、友則の名を補ひつ。

秋

躬

恒

すみの江の松を秋風ふくからにこゑうちそふるおきつゑら波

(釋)〇すみの江 攝津國住吉郡、今の住吉神社のある所なり。古事記、仁徳天皇の條に、「又定墨江之津こと見え、萬葉集には、住吉、墨吉、墨之江、須美乃延など書きて、奈良時代までは、必ず、すみのえとのみいひしなり。この集中に、「住みよしとあまは告ぐとも云々」又、和名抄に、「攝津國住吉(須三與之)郡」など、既に見えれば、延喜の前後より、文字につきて、唱へ詠れるならむ。ふるくは、吉、愛通用して、皆、えと訓ましめしなり。〇ふくからに 秋部下「ふくからに秋の草木の」の條に云へり。〇うちそふる うちは添詞。〇おきつゑら波 澳の白浪なり。つは名詞を連結する助辭。

一首の意は、住の江の松を、秋風がどうくと吹くにつけて、どうくと聲を打添へる、沖の白浪なる事となり。

(評)住吉の地は、いたく、滄桑の變に遇ひたりき。さるは、住吉の社頭なる松原は、その松が根を洗うて、波の寄するやうに、古歌には、皆詠みたれど、今は、海岸を距る事、約二十餘町の東にあり。蓋し、北は木津川、南は大和川より押流せる土砂の、この海濱に堆積して、遂に、陸地となれるならむ。近頃の人の歌に、「住の江の沙干の濱を來て見れば松こそ岸のゑるしなりけれ」と詠めり。されば、その當時の實況を想像して、この歌の詩趣を辿らむとす。

和泉の灘より小津石津をかけて、長汀極浦相參差し、白砂青松相映じて、住吉の濱に到りて盡きぬ。海は、即ち、茅停の海、右に由良の險灘あり。淡路島を前に控へ、左に播磨諸州の山岳を望む。烟波淼茫として一望千里。この時に當りてや、天風吹落ちて、颯々として梢を拂へば、一帶の長松整整として、洪濤の湧くにも似たるに、うち合せて、寄せ來る沖つ白波、鳴高に、聲打添ふる光景、いふばかりなし。まかも、沖つ白波の立つは、即ち、松ふく秋風の玄業なれば、風の趣、一首の上にくぐりたりといふべく、翠松と白波との配合も、鮮かにて目覺まし。眞に、有聲の畫、否、畫境は、既に、渾脱して、神品に入れるものか。古來、餘情無き歌と稱せられ、眞淵は、所のさまに就きて面白きなり、かく、其の所のさまを思ひ得て、心はあるがまゝに詠むぞ、古歌なる、と評せり。かゝれば、後世、この風調を襲ひて、聲打添ふるの語を剽竊し、或は、この詩興を摸倣して詠めるが夥しきが中に、壬生忠見が、

秋風の關ふきこゆるたびごとに聲うち添ふる須磨の浦波
の作もあれど、最も勝れたるは、大納言經信の、

沖つ風ふきにけらしな住吉の松のまづ枝をあらふ白波

といへる歌ぞ、躬恒のに比して、契沖は、及ぶべからずといひ、眞淵は、いと劣らぬものといへ

り。十訓抄に、

(三六二)

かの卿、信經後に、俊頼朝臣信經の子を呼びていはれける、古今に入れる躬恒が歌に、住吉の松を秋風、此の任大臣の大纒せむ日、わが所詠の沖津風の歌、中門の内に入て、史生の纒に就きなむやと。俊頼云、この仰いか、彼の歌、全く劣るべからず、然して、古今の歌たるによりて、限有りて、先任大臣候はむに、御作は、一の大納言にて、尊者として、南階よりねり上りて、對座に居なむとこそ存じ候へと云ふ。さては、さもありなむや、いかいあるべきとて、感氣ありけり。又、自讃して云ふ、躬恒家集多かる中にも、松を秋風のたけ品は、年丈けたる胡人の、錦の帽子またるが、尺八琵琶を鳴し、紫檀の脇息をさへて、詩を案じ嘯きて、眺望きたる姿なり、此の人に對ひて、あひまらひつべきは、わが沖津風の歌こそあれといはれけり。

と見えて、經信自身も、俊頼も、甲乙なきやうにいはいれしが如し。袋草子には、經信の語を録する事、や、かはりて、

この歌の躬恒の七間四面の寢殿の南面に、御簾所々破れたる中に、何宮など申して御座しまさむに、參じて、中門の廊より入りて、寢殿の階の間に參りて、給言談事は、わが歌なり。

と見えたり。これは、兩者の間に、おのづから、軒輕ある趣にて、及ばざる事を、自覺せられしものに似たり。案するに、經信のは、松が枝に浪打かゝるを詩材としたるにて、規模、既に、

局小なるに、立つ波によりて沖津風を想像したるは、著想、や、理窟に根帯きたる嫌あり。躬恒の作の、雄渾瑰麗にして、壯重なる、一語、爽風の氣四邊を拂つて、衣襟の汐氣に蒸るを覺ゆるに劣る事遠し。又、景樹が、住吉は、岸打つ波の高き事、世に聞えたれば、沖つ浪の聲など、待つべきにあらず、實景にはあはざれど、さる屏風の繪様にのみ從ひて、詠めるがめでたきなり。經信のこそ、歌は劣れど、實景なれと云へるは、妄も亦甚し。いかなれば、住吉には、岸の波とより外は詠まぬやうに、窮屈に思ひ取りしが。大波の、沖の方より、小山の如くになりて、推し寄せ來らむが、岸にをれ反りて碎けたらむは、即ち、聲うち添ふる沖つ白波ならずや。若し、岸の白波などいはいむか。其の詩境、殊の外に狹まりて、單に、松と岸の波とのうへに局れる、詩情の表出に止まらむ。烟波千里の茅停の海の光景は、いかにして見るを得べき。思ふべし。但、第二句、松をば上に、秋風は下につきて、獨立せざるこそ、調のうへに於て、聊か口惜しけれ。こは、白壁の微瑕なるのみ。

六帖には、素性とあり。素性集にも出づ。思ふに、この集の最初の流布本には、既に、この前後の名は、皆、脱落してありしならむ。故に、上の歌に、素性の署名あるより、皆、素性の作として、六帖にも、何にも、采りしならむ。まかいふ故は、拾遺集に、躬恒のとして、再出せり。上にも嘗て云へるが如く、この集の歌の、後世の勳業集に再出したるは、必ず、本文に異同あるか、詞書。或は、作者に相違あるか、の場合にのみ限れる事なればなり。歌も、素性の風遣にのらむ。

(三七三)

忠岑

千鳥なく佐保の河霧立ちぬらし山の木の葉もいろまさり行く

(釋)○千鳥なく 千鳥の鳴くを、後世は、冬にのみ詠めど、古くは、秋、又は、春にも詠めり。○佐保 秋歌下、「佐保山の柞の紅葉」の條に云へり。○山の 佐保山のなり。

一首の意は、これまでにはや、千鳥の啼く佐保の川の霧が、ま々と立ッたらしいワイ、それと知られて、この佐保山の木の葉も、段々色が増ッて行くワイとなり。

(評)紅葉の露時雨に色付く如くいふは、この事ながら、霧にても滯るゝものなれば、一つの趣向なり。佐保の川原越しに、山の紅葉を畫ける圖樣なるべし。霧は、繪のうへになき想像ならむ。風調蒼古なり。

拾遺集、六帖、忠岑集、家隆本に従ひて、忠岑の名を補ひつ。さて、拾遺集にも、家集にも、結句、色かはり行くとあり。眞淵曰く、賀の歌なれば、色かはるといふ詞を忌みて、後に、かかしらして、色まさると換へたるにもあるべし、といへれども、この集のは、素より、まさるとありければこそ、拾遺集には、今、一説の方に據りて、再び、采録えたりしなれ。まさるよりは、かはるの方宜しきにや。下句、六帖に、ま木の梢も色付きにけりとあるは、深山の景色にて、茲にかなはずと、景樹の云へるが如し。

秋くれと色もかはらぬときは山よそのもみぢを風ぞかしける

(釋)○ときは山 夏部、秋部下に出でたり。○かしける かしは借しなり。

一首の意は、秋が来ても、木の葉の色も變らぬ常磐山では、時節柄、紅葉の無いもいかいと云ふやうに、餘所の山の紅葉を、風がサ、吹いて来て、常磐木の梢へ吹掛けて、此の常磐山へ借したワイとなり。

(評)山の名に籠りての趣向は、秋部下にも、

もみぢせぬ常磐の山はふく風の音にや秋をさく渡るらむ

などありて、平凡ながら、紅葉を風の借すといへる擬人、奇警ならむか。木立茂りたる青山のあたりに、紅葉を風の吹立てたらむ、繪様なるべし。

この歌、家隆本に署名なしとぞ。さては、前と同じく、忠岑の作か。

冬 貫之

志らゆきのふりしく時はみよし野の山下風にはなぞ散りける

(釋)○山下風 萬葉集には、これを、山のあらしと訓めり。されど、茲にては、山した風と訓むべきなり。もと、萬葉の訓み違へより起りて、一つの詞とはなれるものならし。

一首の意は、この三吉野の山へ、白い雪が頻に降る時には、山下の風で、麓に花がサ、意外に散ッたワイとなり。

(評)景樹、廣蔭等が、芳野は花の名所なれば、雪を花と見立てしなりといへるは、いかゞ。奈良時代より、この集の頃かけては、上にも云へる如く、吉野には、雨雪、或は、山水の勝をこそ詠みたれ、櫻の花を賞する事は、をさく聞えぬをや。こは、冬部に、數多見えし趣向と同じき、譬喩なる事は、萬葉集卷十に、

山高みふりくる雪をうめの花散りかも來ると思ひつるかも

とある、先軌をたづねて心得べし。但、歩々踏襲きて、作者の物とみて見るべき無し。

拾遺集、家隆本、貫之集に従ひて、貫之の名を補ひつ。三句、六帖に、あし引のとあり。

春宮のうまれ給へりける時にまゐりてよめる

典侍藤原よるかの朝臣

峰たかき春日の山にいづる日はくもる時なく照らすべらなり

(釋)春宮のうまれ給へりける時に、春宮は、醍醐天皇第二の皇子にて、保明親王と申し、御母は藤原基經の女中宮穩子なり。延喜三年降誕、同四年二月立太子ありしを、延長元年三月御病の爲めに、御齡二十一にて薨じ給ふ。文献彙と謚し奉る。○春日の山、大和國奈良にあり。其處に、藤原氏の祖神を祀れる由は、上の「春日野に若菜摘みつ」の條に云へり。

一首の意は、頂の高い春日の山に、さし出る日は、所柄、曇る時も無く、世の中を照らしさうな様子だワイ、と云へるは、その表面にて、實は、春日の神の御末の藤原氏の中でも、この上

もない、基經公の姫君の御腹に出来ましたる若宮様なれば、御行末、天子とお成り遊ばされて、何時までも、御仁徳の曇る時もなく、天下に御照臨遊ばしさうな様子で、御座りますワイの意なり。

(評)閑閑の高きを峰高きに、藤原氏出の皇子を春日の山にいづる日に擬へて、すべて、譬喩を以て、御末行を慶賀し奉れるが、巧なる事は、勿論、その詠調の、逞しく力ある事、巾纏の作に類せず。

古今和歌集卷第八

離別歌

題あらず

在原行平朝臣

立別れいなばの山の峰におふるまつとし聞かば今かへりこむ

(釋)○いなばの山 和名抄に、「因幡國津美郡稻羽」とある所の山にて、今も松のみ多かり。稻葉山とも書き、又、宇倍山といふ。山下に稻羽川流れて、國府村あり。これ、いにしへ、國府を置かれし地なり。文德實錄に、「齋衡二年正月從四位下在原朝臣行平爲「因幡守」とあれば、因幡國の稻羽山なること明けし。或説に、美濃國の稻葉山(今の岐阜)かと云へるは、據あき臆説なり。立別れて去ぬるの意に、稻羽をいひかけたり。將然の意もて、去あばとまでかけたるにはあらず。○まつとし 松に待つをかけたなり。しは強辭。○今 俗にいふチキニの意。

○一首の意は、自分は、貴殿達に立別れて、因幡の國へ往くが、その國の稻羽山に生えて居る松の名の如くに、貴方達が、私を待つこと聞くなれば、すぐに歸りて來うなり。

(評)作者が、因幡國に赴任の折の留別の作あらむ。これが、死別れあるにもあらず、待つとし聞かば直に逢ふべく立歸るべければと、旅行く人の、却りて、見送る人の別愁を慰めたる、情致掬す

べきものあり。況や、因幡國は、京より下るに六日、上るに十一日を費すべき公程ありき。さるるを、今歸り來むといへる、今の一語の、常理を没却したる狂想、詩味湧然として生ずるを覺ゆ。去ぬと歸るとを聞はせ、又、いひかけを一首のうちにも再用したるが如き、この作者の慣手段なり。すべて、親句の續きたるは、をかしからぬものなるを、四五句の續き、疎句に仕立てられたれば、見直されて宜しくなりぬ。但、萬葉集卷十三、

(三七〇)

門に居るをどめは内に至るともいたくし戀ひは今歸り來む

この藍本なるに似たり。まかも、修辭の点に於て、これは、一段の巧技を弄せり。

又、眞淵が、いなばの山は、萬葉集に、陸奥の小田郷より金を出ましを、「陸奥山に黄金花咲く」と詠める如く、廣くいひしこそよけれ、法美郡稻羽の郷の山とせむは、狭くて、古人の意に非ずといへるは、いかゞ。景樹は、廣きのみ何ぞ古人の意ならむと難じたり。蜂に生ふる松といへる瑣細の取做し、因幡の國の山といふが如き、漠然たる廣義の叙法を許さず。蓋し、不調和の滑稽に陥るべければなり。

よみ人あらず

すがるなく秋のはきはら朝たちて旅ゆく人をいつこか待たむ

(釋)〇すがる 和名本草に「蝸蛤一名土蜂、一名螺贏、一名細腰、和名佐曾利」とあるも同じ物にて、世に、似我蜂といふ土蜂なり。小野博は、似我蜂に就いて一説を立て、曰く、全身深黒色

に、腰甚細く絲の如き小蜂、夏日人家に飛來り、筆管中かどに入りて巢を造り、子を養ふが爲に、蛛を蝨し傷めて其の中に入れて、泥にて塗り塞ぐ、管内にて鳴く聲、似我々々云ふに似たり、又、青蜂といふ一種の小蜂も、似我の聲あり、いづれならむといへり。舊説、及び、顯注密勘等に、鹿の事とせしは、下に、萩原といへる故の臆説あり。〇はきはら 萩の多く咲ける野をいふ。

〇一首の意は、このやうに、螺贏の鳴く秋の萩原を、朝立つて旅へ行く貴方を、さてまア、何時と thinking か、お歸りを待たうぞ、あゝ、何時とも知れぬ、待遠い事であらうとなり。

(評)送る人、送らるゝ人、そも如何なる關係あるにか。祖帳、既に別を叙して、猶、袂を分つに忍びず。送りて、郊外、螺贏鳴く萩原に到る。その纏綿の情致思ふべし。朝の一語、管内、其の旅行く時を点出したるに止まらず、秋氣清爽として、露白く花紅なる萩原に朝影を受けて、さる蟲ども集くらむ、面白き景氣を想像せしむ。蓋し、かく、極力周圍の光景を詳叙したるは、別離の狀を強く印象せしめて、再會期遙なる、歎嗟の意を侷くるものなり。情景兼ね到れる妙作。

眞淵が、古事記に、鳴をナスと訓めるに據りて、初句の鳴を借字として、すがるなすと改めて曰く、螺贏の子は、一度巢を立ちては又歸り來らぬ由、その如く、別れ行きては歸の知られぬ人あれば、何時とか待たむと歎きたるなりと解けるは、牽強なり。況や、螺贏の子云々も、本據の定かならぬ臆説あるをや。宣長か、初句を萩原の序詞と見たるは、粗なり。

(三七二)

下句、六帖に、旅行く人のをしまるゝかなとあるは、無念なり。

(三七二)

かぎりなき雲居のよそに別るともひとを心におくらさむやは

(釋)○雲居 例の空のことなり。○ひとを 對手の人を指す。

一首の意は、限もなく遠き、雲よりわたらの國に、今から別れて私に行くとも、常住、貴方の事を心に置いて、跡になご後れさせて置かうか、イヤ、何處までも、心には連れ立つて行くツとなり。

(評)東の間も忘るまじき交情を、婉曲に叙べたり。その構想の尖巧なるは、格調の高からざる所以からむ。雲居のよそは遠方の轉義なり。大和物語に、暹羅の詠とまたるは、全然、信すべからざる小説なれど、口吻はげに相似て、その下作に倣すべし。

結句、舊本に、をくらさむやはとあるに據りて、眞淵が、心に隈なく守りて小暗さむやはの意なりと解けるは、牽強にして理たゝず。を文字の假名違なることは、勿論なり。顯注に引ける大和物語に、をくらさめやとあるも、當時の謬に従へる假名遣にて、聞え難し。又、四句、大和物語一本に、人に心をどあり。これもいかゞ。類從本大和物語は、四五句とも、本行のと同じ。

小野のちふるが、みちのくのすけにまかりける時に、は、の

よめる、

たらちねの親のまもりと相添ふる心ばかりはせきなきぐめそ

(釋)小野のちふる云々 小野千古が、陸奥介に任せられて赴任しける時に、その母の詠めるなり。介は國守の次官。○たらちねの 親といはむ枕詞なり。奈良の頃までは、母といふ語の枕詞としてのみ用ゐられ、タラチシノ、タラシチノとも轉じいへり。足の義にて、母の慈愛を讃したる詞なるべし。○親のまもりと のは俗言のガの意。とはどしての意。○相添ふる 相は、互になごいふ意の語なれど、この用法は接頭語にして、何の意義もなく、只下の動詞を強めたるに止まること、猶、相願ふ、相變るの相と同じ。○せきなきぐめそ 堰き止むるなの意。關をかけたなり。

一首の意は、附き添ひて諸共に行くことは慥はずとも、この母が、子の爲の守にと思つて、添へて遣るこの心だけは、往來を止むる關といふ名の如く、堰き止めて下さるなどなり。

(評)東路より陸奥までの間には、逢坂の關を始めとして、不破、鈴鹿、清見、足柄、白川、勿來等の諸關あり。行人を誰何して、通書文を無き人は、押止めて通さざりけむ。されば、この親心ばかりはと、愁訴せるなり。眞摯なる熱愛を歌ひたるから、よく人の同情を惹きて、一再の朗誦を吝まざらしむ。

さだときのみこの家にて、ふちはらのきよふが、近江のすけ

(三七三)

にまかりける時に、うまのはなむけしける夜よめる、

きのこしさだ

(三七四)

けふ別れあすはあふみこ思へごも夜やふけぬらむ袖の露けき

(釋) さだときのみ云々 貞辰親王の家にて、藤原清生が、近江介となりて赴任せむとする、その立振舞したる夜に詠めるとなり。うまのはなむけは、いにしへ、旅行く人の、乗れる馬の鼻面をとりて、其の行く方へ向けて、祝ひ言して立たせ遣るが本にて、轉じては、送別の宴を開くをいふとも、驛路の端詰の略なりとも、旅立つ人の馬の鼻へ向けて物を贈りしより起るともいふ。こゝは送別の宴あり。今は略して、はなむけとのみいひをらひて、饗別のこととす。○あすはあふみ 明日は逢ふ身といへるに、國の名の近江をたち入れたる。

一首の意は、貴方の赴任せらるる近江の國は、京の隣の程近き處故、今日は別れても明日はすぐに逢はるゝ、この身ぞとは思へごも、さすがに、別といへば名残が惜まれて、猶豫するうちにはや、夜が甚く更けたのであらうか、これこの通り、袖が露ほいことよとなり。

(評) いやゝ、これは露にはあらで、別の悲しさに溢れたる、涙奪るはの餘意あり、さばかり、交通不便の時代あるすら、僅々一日のうちには、往來せらるゝ隣國あれば、別離とはいへ、涙を落して驛ぐ程の事にもあらぬを、袖の露けきとまで誇張したるが、面白し。四句は、これが爲に假設したる前提なれば、實に、夜の更けたるにもあらざるべけれど、おのづから、名残惜しさを

こしへまかりける人によみてつかはしける

かへる山ありこは聞けご春霞たちわかれば戀しかるべし

(釋) ○かへる山 延喜式神名帳に、越前國敦賀郡に、加比留神社、又鹿蒜、田口、神社あり。和名抄にも、鹿蒜郷あり。其處なる山を加比留山といひけむを、轉じては、かへる山とも、いひならへるあるべし。眞淵が、歌の寄せにて、かへる山と轉じいへるありといへるは、いかゞ。名詞を私にいひ改めて、聞ゆべしやは。○春霞 たちといはむ序詞あり。

一首の意は、北國には、追付け、無事にてお歸りかざる、かへる山といふ頼もしき名の山があるとは聞きはずれど、それでも、この節の春の霞の立つやうに、立別れて往かしやつたからば、定めて戀しうありさうなワイとあり。

(評) 未だ出立せざる以前に、別後の情をあらまして、其の人の許に詠みて贈れるあり。春霞は山の縁にて、時節の景物なるを、立別れの序詞に用ゐたり。故に、契沖が、春霞と共に立別れてと

(三七五)

いひ、宣長が、あの霞の立ちてゐる方へ立別れてといへる、共に非あり。想ふに、その人は、外官をぞにて赴任せるか。さては、一定の任期を終へなば、必ず歸り來べければ、其處なる山の名に寄せて、歸ることありといへるからむ。聞けごの一語、足未だ、他郷の土を踏まざる、都人士の口吻。

(三七六)

人のうまのはなむけにてよめる　　きのつらゆき

をしむから戀しきものを白雲のたちなむのちは何ごこちせむ

(釋)うまのはなむけにてよめる。 饑の席上にて詠めるの意。○をしむから からはよりの意の助辭

○白雲の たちどいはむ序。

一首の意は、別を惜むよりはや、未だ出立せぬ人の、かうも戀しいものを、それをまゐ、空の果に見ゆる白雲のやうに、立ちて遠くへ往かるであらうその後には、ごのやうなる心持がせうぞとあり。

(評)離苦は豫想してだに耐ふべからず。况や、現實ならむ曉は何心地と、不定の疑問を用ゐたるに、測るべからざる、多大の愁恨を寄せたり。

三四の句、六帖に、春霞たちわかれなばとあるは、前の紀利貞の歌を譲り混じたるものからむ。家集は、四句のみ六帖と同じ。

ともたちの人の國へまかりけるによめる

在原三げはる

別れては程をへだつご思へばやかつ見かからにかねて戀しき

(釋)人の國 他國なり。わが生國からぬをはいへるには、伊勢物語に「この男、人の國より夜毎に來つ、笛をいと面白く吹きて」とあり。外國の意として、唐國を指せるは、殆ど、枚擧に違

あらず。「人のみかど」亦この儔なり。さて、この集の端詞の書例を思ふに、御國の内ならば、この上下に見ゆる如く、越の國、あづまの國など書くべければ、こゝは、外國の意に用ゐたる

か。友達の、遣唐使、あるは、その下司などに撰ばれて、渡唐せむとする別に詠めるにや。但、こも、おしあての説あり。拘はるべからず。○程 道程あり。時間の意に用ゐるは俗意あり。

一首の意は、一旦別れてからは、久しう逢はれぬ、遠い道の程を隔つる事と思へばかして、片方には顔を見て居ながら、案じ置きがせられて、今から最う戀しう思はるるワイとあり。

(評)叙法くたくし。乃父業平朝臣に詠ませたましかば、かくはわらざらまし。

あづまの方へまかれりける人によみてつかはしける

いかこのあつゆき

おもへども身をし分けねば目に見えぬ心を君にたくへてぞやる

(釋)あづま、日本武尊の、東の國を平げ給ふ時、御妻橘姫の、上總の海に沈み給へるを歎きて、確

(三七七)

の坂にて、東を顧みて、吾妻者也と宣ひしを本にて、後々は、相坂の關より東の國を、あづまの國といひ、その行々の道をあづま踏といへり。こゝは、其の方のいづれの國にてもあるべし。一首の意は、何程思へども、身を二つに分けられぬに依りて、お供は協はぬかはりに、目には見えぬ私の心を、貴君に添はせてサ、はるく遣りますワイとなり。

(三七八)

(評)公務などに支へられて、諸共に出立ち難きより、さりさて、身をし分けねばと、わが苦心の一方からざる由をいひ送れるあり。詞書のやうを見るに、同伴はさておき、見送りにだに行かざるさまなれば、或は、それらの怠慢を模稜すべく、目に見えぬ心を引出でたるか。さては、三句、軽く見過すべからざるに似たり。上の「人を心におくらさむやはと、其の意表裏したり。韓偓の詩に、

身情長在暗相隨。生魄隨君々豈知。

に比すれば、巧拙天壤の差あり。又、伊勢物語、業平の詠に、

おもへども身をしわけねば目がれせぬ雪の積るぞわが心なる

二三の句、全く符合せり。されど、主想の殊なるうへに、彼れは、例の詞足らずなるを、これは、隈なくいひどほれり。

あふ坂にて人を別れける時によめる なにはのよろづを

あふさかの關しまさしき物ならばあかず別る、君をこゝろよ

(釋)あふ坂にて云々。あふ坂は相坂、逢坂、合坂と書く。山城近江の國境の山にて、近江國滋賀郡に屬せり。關を置かれたる事に就ては、日本記略、延暦十四年八月己卯に、「廢近江國相坂刻云々。」文德實錄に、「天安元年四月庚寅始置近江相坂大石龍華等三處之關云々、相坂是古昔之舊關也云々。」と見えたり。○人を別れ 眞淵曰く、この集に、人の旅行に別るゝには、人をといひ、わが行くには、人にといへり。然れども、万葉集には、そのけぢめなきも見ゆめり。或説に、人を別るといふは、正格なり。にの音は、似る、煮る、膠おき、渾べて、密着の義を持てるければ、人に逢ふとこそいへ、人に別るといはれぬ言なりと。これ然るべく覺ゆれども、言語は生命を有する活物あり。今に於ては、あふがちに泥むべからず。

一首の意は、關は人を止むる所なるが、この逢坂の關がサ、果して正しい物ならば、幾多に氣強う別れて行く、この人をせき止めてくれよとなり。

(評)わが引止めたく思ふ人の、何の誰何をも蒙らず、見すく越行くが恨めしきより、汝、逢坂の關よ、この遊子の行をどめて、關の關たる實を示せと誂へたる、構想や、面白し。契沖の、あふ坂の名には心を着くべからずといへるは、よし。眞淵、宣長等の、逢坂は逢ふの意義を兼ねたるやうに解きたるは、拘泥の見にして、早く、詩味の一半を没却するものなり。

題あらず

よみ人あらず

からころもたつ日は聞かじ朝露のおきてし行けばけぬべき物を

(三七九)

氷この歌は、ある人つかさを給はりて、新しきめにつき、年へて住みける人をすて、たゞ明日も立つとばかり、いへりける時に、ともかうもいはで、詠みてつかはしけり、

(釋) ○からごも 唐衣あり。唐は、韓紅の韓と同じく、美稱として添へたる語。さて、唐衣哉つごいふより、立つにいひかけたる枕詞なり。○朝露のおきてし 朝露のは序にて、のはの如くの意。露の置くに、人を打置く意を兼けたり。○行けば 木下幸文云ふ、行かばなりけむを、もと、行はと書きたるより、行けばと訓み誤れるなるべしと云へり。本文のまゝにても、聞えぬにはあらねど、行かばの、更に、妥當なるには及かず。依りて、幸文の考に従ふ。

一首の意は、御出立の日をば、何時といふことは、私は、もう聞きはすまいと存じます。何故なれば、私を捨て、朝露の置くやうに、跡に置いてお出なされば、私の身は、その朝露の消るやうに、消えてままひさうに存せられますものをと云なり。

(評) 然るもあは、見捨て、行かむは、餘り無情の仕打なるべしとて、思ひ直ることもやと、一縷の望を万一に繋げる、可憐の情態、同情に堪へず。夕露としもいはで、朝露といへるは、朝立つが、旅行く常慣なればなり。この三四の續き、貫之が、

長き夜を思ひあかして朝露のおきてしければ袖ぞひぢぬる

と同巧なり。又、死ぬべきの意を露の縁に就きて、轉義して消ぬべきといへり。

左註は、大やう、この歌の來由を悉せるが如きも、上來の例に據れば、これも、後人の所爲からむされども、眞淵は、誰といふ男誰といふ女、何の司何の書におりといふべき事なるを、こは

なくて、かく浮きたる事のみ書くは、用なき事なり、と難じたるは偏せり。其の實は確かならざることも、世に逼くいひはやして、捨て難きものあらむをや。

ひたちへまかりける時、藤原のきみごしに詠みてつかはしける、
籠

朝なけに見べききみごし憑まねば思ひたちぬる草まくらなり

(釋) 藤原のきみごし 公利と書く。本朝文粹、三善清行が異見封事中に、備中介になれりし由見えたる人あり。○朝なけに 朝は朝にの轉語。けは來經の約語あれば、けには常にの意。連ねて、毎日の意とすべし。○思ひたち 思ひ断ちに、思ひ立ちをかけたなり。○見べき 見るべきなり。○草まくら 菰、菅の類は更に、何にまれ、すべて、草もて造れる枕をいへるにて、旅といはむ枕詞に用ゐらる。古の行旅には、驛舎の設かりしをもて、草引結びて枕せし故、草枕する旅といふ意の續きなり。一説に、草枕把ぬの意を旅にかけたりといへり。さて、こゝは、草枕を直に旅の意に轉じ用ゐたり。猶、足引のは山、玉銚のは道といはむ枕詞あるを、後には直に、足引を山、玉銚を道の意に用ゐたる例あるが如し。一首の意は、とても、毎日逢はれさうなる貴方様とはサ、憑まれぬ故、断念めて、思ひ立ちましたる、今度の旅で御座りませぬなり。

(評) もしやに惹かされて、人の無情を怨みつゝある人、失望の極、世間の消息を絶ちたる住所を求

とめむて出立つ。さるも猶、去るに臨みて、戀々の情躊躇の態なきこと能はず。思ひたちぬる草枕、眞に、斷腸の語なり。結末、殊に、力量あり。

さて、さみとしに人の名の公利、おもひたちぬるにさして行く國の名の常陸、草まくらに我が名の内藏を詠み入れたり。抑も、この作者の名は、龍アナ、龍ックシム、又、製カサヌを、異本まち／＼なり。清輔奥儀抄には、ツツクと訓めり。龍に従へるなるべし。齋藤彦麿の説に、この女の夫が兄か、内藏寮の頭助允などの官の時に、内裡へ参りたる女にて、呼名を内藏といひしが、草書にて書きたる二字を一字と見謬りて、上の三字の如くには、寫しひがめしならむ、と云へり。極めて、適解と覺ゆれば、これに據りて、結句に、我が名の内藏を詠み入れたるものと定む。煩しきばかり、名詞を断ち入れたれど、更に、斧鑿の痕なきは、巧手と稱すべし。

紀のむねさだが、あづまへまかりける時に、人の家にとりて、あかつき出立つとて、まかりまうしおければ、女の詠みて出せりける。
よみ人おらず

えぞあらぬ今こゝろみよ命あらばわれや忘るゝ人やとはぬと

(釋) 紀のむねさだが云々。むねさだ、如何なる字を填つべきか、明らかならず。まかりまうしは龍中と書く。暇乞なり。さて、人の家より旅に出立つこと、方違への爲に宿れるなるべし。中昔

の頃は、天一神といふ神の、天を周りあるくが、其の方に向ひて行交ひすれば、凶しきことありとて、必ず行くべきことある折には、一先づ他に宿りて、方を違へて行く習慣なりき。こゝは、素より、相識れりける女の許に宿れるなり。○えぞしらぬ。知り得ぬの意。○今こゝろみよ。今は俗言のオツ、ケに當る。こゝろみよは試して見よなり。○命あらば。我が命のあらばなり。○人や。人は、こゝにては、女より男をさしていへるなり。

一首の意は、何方が頼しいか頼しく無いかは、ソレヤ、今は分明りませぬ、私は、貴方にお別れ申してからが、生きて居る空はないが、万一にも、命あつて生きて居るから、長い間に、私が、忘れるか、貴方が音信れても下さらぬか、二つ一つのところを、追付け、試して御覽じませよとあり。

(評) 雲山万里の遠きを隔て、長き年月を亘りたらむ曉は、移ひ易き女心は、如何に、覺束からむおぞ、男のいへるを承けて、論より証據、今こゝろみよ一の冷語を下して、ぞか宜ふ夫子自身こそ危きものなれの意を寓したり。日頃、疎々しき振舞おどありける彼れ、慙死せざらむやは。命あらば、我が思ひに堪へて焦れ死ぬべきをあらまして、男の薄情ある反映とまたり。含蓄あり。曲折あり。只氣格の高からざるを憾とす。

従はば、本文のまゝにても、難なかるべし。

(三八四)

あひありて侍りける人のあづまの方へまかりけるをおく
るこて
ふかやぶ

雲居にもかよふ心のおくれねばわかるこ人に見ゆばかりなり

(釋)あひしりて 多く男女の中にいへり。上の二首も、男女の間の別離なれば、これも、その條ならむ。○人に 狹義に解すべし。對手を指す。

一首の意は、雲のあるあたり程遠き所へ、貴方が往かれても、私の心は、何時も、貴方の居る方へ通うて、跡に後れては居ねば、詰り、この身だけが、今別れて跡に残るこ、貴方に見らるゝばかりぞこあり。

(評)上に、「かぎりなき雲のよその別るとも云々と詠めると、表裏したり。

二句、六帖に、深き心のこあり。

友のあづまへまかりける時によめる

よしみねのひでをか

白雲のこなたかあたに立別れこゝろをぬさとくたく旅かな

(釋)○白雲の 白雲の如くの意。こなたかなたにの句を隔て、三句の立別れの立ちへかゝる序詞なり。

り。下に、「秋霧のどもに立出でて別れなば」とあるも、秋霧のは、立ちにのみかゝりて、こもにといふ詞にはかゝらざるを見よ。然るを、白雲は此方彼方へ漂へる物なれば、遠き旅路の状を擬へたりといへる舊説は、穿鑿に過ぎたり。○ぬさとくたく ぬさの如く碎くの意。ぬさは神に捧ぐる布帛あるが、こゝは、旅行く時、道の神に手向の料として袋に入れたる、五色絹の切幣にして、細かに切碎きたる物なれば、幣の如く碎くといへり。

一首の意は、大空の白雲の立つといふやうに、貴方は遠き東へ、私はこの都にと、あちこちに立別れて、道の神に手向くるこの幣のやうに、心を千々に碎いて悲しまるゝ、貴方の御旅立てあることよとあり。

(評)行く人は、時の社頭に頼きて、行旅の平安を祈り、送る人は、油然として白雲の生ずる、天の一方を望みて、袂を別つに忍びす。眼前の光景、詩材多々あるべしと雖も、これを殊に、この白雲と、幣とを借り來りて、斷腸の情を叙べたる所以あるべき。同一の譬喩法を疊用したれど、煩冗の感を與へず。

みちのくにへまかりける人によみてつかはしける

つらゆき

白雲の八重にかさなるをちにても思はむ人にこゝろへだつな

(釋)みちのくにへ みちのくは陸の奥の略されば、國の字を添ふる時は、みちのくの國といはでは

(三八五)

協はず。上ある「常陸へまかりける」の備あれば、陸奥へあるべし。さらば、に文字は衍か。八重に 八は多量多数の意の相換なり。七重に次ぐ八重の意には非ず。〇をち 俗言のアチマに當る。萬葉集に、彼此をヲチコチと訓めり。遠の字を充つるも、この意なり。

一首の意は、今お出になる、白雲の幾重にも重りたる彼地にても、貴方を思はう程の人には、必ず、心を隔て給ふな、仮令、かの雲は隔て、あらうともとなり。

(評)その思はむ人といふは、外ならぬ手前の事なりと、落着せしむるいひ倣し、巧といふべし。句、限なき遠き趣見之たり。雲の縁にて隔つゝとおける、例の手づまなり。

人を別れける時によめる

わかれてふことは色にもあらなくに心に志みて侘しかるらむ

(釋)人を別れ 彼の助辞の用法、上に説きたり。〇志みて 染みてと同語。

一首の意は、別といふことは、色にてもありもせぬに、何故に、このやうに、心に沁みたくとなつて、仕方も無うつらいのであらうぞとなり。

(評)色は物に染み着く物なるを本に踏まへて、すべて、細くからびたる仕立、これも一体と知るべし。上句は、心にしみてといはむ前提なり。三四の句間に、何故にの語を補ひて聞くべき格なり。

初句、六帖に、わかるてふとあり。本文の、名詞法に用ゐたる方優れり。

あひまれりける人の、越の國にまかりて、年へて、京にまうてきて、又、かへりける時によめる、 凡河内躬恒

かへる山何そはありてあるかひは來てもごまらぬ名にこそありけれ

(釋)〇何そはありて 何そは何それはの義。この語、古來釋き得たる説あり。この何は、俗言の「何大シタ事デモ無イ、」何驚クニ及バヌ、などの何にて、末に、必ず否定の語か、反駁の詞かを現はすべき格なり。故にこゝは、何それは、在つて在甲斐の無いの意に解すべし。下の戀二「命やは何そは露のあだ物を云々の歌をも参照して、心得べし。

一首の意は、越の國のかへる山、彼地へ下られたる貴方の、再び、都に立歸る名ぞと、これまでは頼もしく思うて居りしに、何それは、在つて在甲斐の無いので、其の在る甲斐といふは、反對に、久し振に來たる貴方の、京には留まらずに、又、彼地へ歸るといふ名でサ、あつたワイとなり。

(評)山の名のかへるは、此方にはあらで、彼方へ歸る意なる事を、始めて合点したりと巧めり。來てもごまらぬといふをかへる山にかけて、詞を略きたる、ありの語の三疊の、まかも耳立たずして、二三の句のうつりあひ、却りて、調子の、殊に滑らかなる、作者の技巧を見るに足る。されど、山の名に絶れる縁語の仕立、弄舌の妙こそあれ、氣味に至りては、則ち索然たるが如し。

六帖に、作者を、市原のおほきみとあるは、誤なるべし。

(三八八)

ここの國へまかりける人によみてつかはしける

よそにのみ戀ひや渡らむ白山のゆき見るべくもあらぬ我身は

(釋)○白山のゆき見る 白山の雪に、行きをかけたる序とすべし。雪を見るに、行きて見るをかけたりとする説は非なり。白山は加賀國能美郡にあり。今は音請してハクサンといふ。越前にも同名のがあれど、打任せて、雪など詠むべき高山にあらず。越前、加賀、能登、越中、越後のあたりは、すべて、古への越の地にして、京畿より越路に入りて、先づ目に着く高山は、雪を戴ける白山あり。故に越の白山の名、世に高まれり。白山の名も、雪に由りたるものとおぼし。

一首の意は、今からは、餘所にはかり戀しう思うて、月日を送ることであらうか、とても、雪深い白山のある越路へ往つて、御目に懸かられさうにも思はれぬ、私の身なればサとなり。

(評)公務に支へられて、心に任せぬ身なれば、ゆき見るべくもあらぬとは、いへるなるべし。名所を序詞に用ゐて、一ふしごまたり。

おとは山のほとりにて人を別るこてよめる

つらゆき

音羽山木高くあきてほこぎす君がわかれを惜むべらなり

(釋)○音羽山 既出。○木高く 梢高くの意。小高くと心得るはわろし。

一首の意は、この音羽山の梢高く鳴いて、時鳥が、あれわの通り、貴方の別を惜しう思うやうな様子であるとなり。

(評)わが泣きて人の別を惜むより、時鳥の鳴くを、さる心に推想したり。まかも、心無き鳥獸すらも愁ひ歎くは、則ち、別れ行く人の重きを成す所以、客を借りて主を形する筆法なり。詩にも杜牧之、

蠟淚有心還惜別。替人垂淚到天明。

は、詩材こそ殊あれ、同想の同叙と見ゆるも、あながち、彼れを模倣せしにはあらず。偶合あるべし。况や、これは、いたく簡淨なるに、彼は、煩瑣の嫌あり。木高くは、山の端の梢あたりに鳴く景色あるが、おのづから、鳴音の高く聞えたる趣も響き合ひ、鳴音の高きに、別を惜む心の一方からぬ態も見ゆめり。さるを、音羽山の名に、聲の意ありとする説は拘れり。細心の作あれども、一往自然の如くにして蘊蓄あり。又、唐僧無悶の詩に、

杜鵑不願離人意。更向落花枝上啼。

同一の詩境、同一の詩材にして、有情無情の取倣し、比較して、其の好處を曉れ。

藤原ののちかげが、から物のつかひに、なが月のつごもりが

(三八九)

たにまかりけるにうへのをのこども酒たうびけるついで
によめる、
藤原のかねもち

(三九〇)

もろ共になきてこゝめよきりくす秋の別は惜くやはあらぬ

(釋)藤原のちかけか云々 後蔭が、唐物の使に任せられて、九月の晦方に、西國へ罷り立ちける時に、殿上人達、その饌別の酒を酌みける序に詠みけるの意。から物の使は、唐國渤海國等の商船の、筑紫に着きたる時、その積荷を檢めて、珍奇の貨物は、都に奉りおごする爲に、遣はさる、使あり。武家の世となりては、唐物奉行といへり。晦方は月の下旬あり。たうびは賜びなり。この本文は、うへのをのこどもを主としたる書きざまなれば、自他差へり。たうべどあるべくや。たうべは賜はりなり。飲食することを、俗言にタべといふは、即ちこれと同じ。○もろ共に 我と共にあり。これを秋の別と人の別との二つをいへりとする説は、甚だ、その謂れなし。

一首の意は、蜚よ、共々に泣いてとめて呉れよ、今、この秋の暮れ行く別は、惜しうは無いことか、せうして惜しいことであるとなり。

(評)壺前裁のあたりに、唧々と鳴き出でたる蟲の聲を借ひ來りて、秋の暮れなむとするを惜めるは表面の意にして、實は、秋行く人の別を惜める暗喩なり。別涙の催すに堪へず、汝も手傳ひて泣き止めよと、はかき蟲の聲をも頼み力とする、纏綿の情緒、感無くはあらず。

平もとのり

秋霧のともに立出でて別れなばはれぬおもひに戀ひや渡らむ

(釋)○秋霧の 下の立出でての立ちに係る。霧は立つ物なればなり。但中間に、おもひの副詞あるが爲に、こゝは、秋霧と共にの意に譯しておくべし。○はれぬおもひ 胸の開くことなき物なり。

一首の霧は、秋霧の立つと共に、貴方が立出でて、お別れなされて去まうたならば、私は今から、あの霧のやうに、晴れぬ心の物思に、何時も懐かしう思つて、月日を過すことであらうかとなり。

(評)霧の縁語を以て修飾したり。さて、これは、上と同時の歌にして、殿上の夜宴を覺しければ、夜霧の立渡れるを見て詠めるか。又思ふに、この歌、彫琢を旨としたれば、或は、おもひに日をいひかけ、霧に曇りて日の晴れぬを、胸の晴れぬに擬へたりともいふべし。さては、霧は實在せるにはあらで、修飾の爲に取入れたるもの、如し。いづれか。

源のさねがつくしへゆあみむとてまかりける時に山崎に
て別をしみける所にてよめる、
あ ろ め

いのちたに心になふものあらは何かわかれの悲しからまし

(三九一)

(釋)源のさね云々 源實は、官右近衛少將に至りし人、ゆあみは湯浴にて、筑紫に、よき温泉ありける故、湯治に行きしなり。山崎は山城河内攝津三國の堺、淀川の北岸なり。京より西國に通ずる咽喉の地にして、延喜時代には、京に上下する船着きなりき。土佐日記にも、この見ゆ。○心にかあふ 思の儘になるをいふ。

一首の意は、貴方を御留め申すことは慥はずとも、せめて、自分の命なりとも、心任せにあつて、御歸りまで生存へらるゝものならば、何のお別れが悲しからうぞ、悲しうも無いとあり。(評)心に慥ふ命ならねば、やはり、別の悲しきには定まりたる趣あり。筑紫ばかりの湯治の別に、命をかけたことは、餘り、悲傷に過ぎたる嫌あれど、八束鬚胸前に垂る益荒雄すらも、上に見ゆる如く、唐物の使を送るとしては、「鳴きてとめよ」晴れぬ思に戀や渡らむ、あど詠みあへる時代なれば、女の情はましてなり。剩へ、聊か、誇張を加へたらむには、こればかりの事、何かはあらむ。杜甫が所謂、生別常惻々、焦れ死にして、人の歸り來む日を待得むことの覺束なきを悲めるなり。景樹が、生得、か弱き人ありけむをいへるは、頑に思ひ取れる穿鑿とやいふべき。血性の發するところ、辞旨悽惋に、沈痛に、直に、人の肺腑を刺して、一聲一涙、一字一珠。

又云ふ、作者は江口の遊女なり。源實は廷臣なり。まかも、深く相馴れ昵みける交情なりけらし。後の者なれど、大江匡房の遊女記は、よくこの間の消息を説明せり。抄録す。

自山城國與渡津浮巨川、西行一日、謂之河陽、江南北、邑々處々、分流向河内國、謂之江口、

到攝津國、有神崎蟹島等地、比門連戶、人家無幾、借女成群、棹扁舟、看檢船、以薦枕席、上自卿相下及黎庶、莫不接牀、施慈愛、又爲妻妾、歿身被寵、雖賢人君子不免。此行、長保年中、東三條院參、而住吉社天王寺、此時禪定大相國被寵、小觀音、長元年中、上東門院又有御行、此時宇治大相國被賞、中君、延久年中、後三條院同幸、此寺社、狛犬燈等之類、並舟而來、人謂神仙、近代之勝事也、相傳曰、雲客風人、爲賞遊女、自京洛河陽之時、愛江口人、刺史以下自西國入江之輩、愛神崎云々。

上下淫蕩の風、以て見るべし。既に、宇多法皇巡幸の途次、この作者、并に、大江洲が女をりける遊女等に、調を賜ひしことありき。

結句、六帖、金玉集等に、悲しかるべきとあるは、風調、や、劣りざまあり。

山崎より神なひの森まで、おくりの人に人々まかりて、歸りがてにして、別をしみけるによめる。みなもこのさね

人やりの道ならなくに大方はいきうしこいひていざ歸りなむ

(釋)山崎より云々 神なひの森は、秋部に見えたる、大和國のとは別にて、山崎の南、山邊にかへりて、向日明神といふがあり、その後方なる、今、かうなひの森といふ所なりといへり。歸りがては歸りにくき意なり。○人やりの道 人の遣る道なり。我が心もて行くにあらぬ道といふ。○大方は 大抵はの意。○いきうし 往きつらしの意。いきは往きの古言。○いざ 率ふのい

ついでに、誘ひ出す意の發語なり。

一首の意は、今度の旅は心がらにて、何も、人に遣られて行く道中にはあらぬにより、折角止めて下さる、御志を、振切つて行くもいかうなれば、大抵は、往くが大儀と、かこつけ言うて、さあ、歸つてまはらうとなり。イトサセシ旅ヲナイ我ニク行ク旅アリ大儀トナラナラウセム行キテ

(評)次の詞書を併せ見るに、前のご同時の歌なり。然らば、湯治行きの私の旅にして、公務などに關れる、人々の道ならぬこと、いふまでもなし。既に、山崎にて袂別の情を叙したるを、猶、神なひの森まで慕ひ來れる人々の志、一方ならむやは。いざ歸りかむはこの芳情に酬ひて、離愁を緩和せむ爲の挨拶なり。まこと、歸るにあらぬことは、上に、行平朝臣の、「今歸り來むと詠めるに同じ。

いまはこれより歸りねごさねがいひけるをりによめる

藤原のかねもち

慕はれてきにし心の身にしあれば歸るさまには道も志られず

(釋)いまは云々 上の詞書を承けたる書きさまあり。猶別れかねて、何處までも送り行かむけしきなるより、もう是れからお歸りなされと、實がいへるなり。○きにし、身にし、上のしも、下のしも強辭。○歸るさま 俗言の歸リシナといふが如し。一首の意は、此處まで來れるは、貴方のお跡が慕はれて、自然引かれて來たる心故の身でサハ

るから貴方を置いて、今歸れど仰せられても、歸りしなには、道もわかりませぬとなり (評)應對の語、おのづから、かゝらざるべからざるも、上句、説明に過ぎて味ひなし。上三首のち、これ、最も劣れり。

藤原のこれをか、武藏の介にまかりける時に、おくりて、逢坂を越ゆとてよみける、

つらゆき

かつ越えて別れも行くか逢坂は人だのめある名にこそありけれ

(釋)○かつ越えて云々 惜みて引止むる片へには、坂を越えて別れ行く意を、かつといへり。千秋の、逢坂越えながら且別れ行くの意に釋きたるは、杜撰あり。且は越えてに係りて、別れには係らず。行くかのかは歎辭。○人だのめ 人に憑ましむる義なるが、轉じて、人に憑もしげに思はせて頼みにならぬ意に用ゐる。一首の意は、逢坂は人に逢ふといふ名なるに、今、別を惜みて居るそばから、この坂を越えて、別れてまわお行きなさることよ、これでは、逢坂といふ名は、人憑めなる、あてにならぬ名でサあつたワイとなり。

(評)上に、躬恒が「歸る山何そはありて云々と詠めるに似たり。万葉調を陳腐と御けし、延喜の歌仙等、更に、一生面を開かむとしたる餘弊は、語言の窠套に陥りて、計らず、後世の俑を作りぬ。拾遺集に、「物へまかりける送り關山までま侍るとて、

別れゆくけふはまぎひぬ逢坂は歸りこむ日の名にこそありけれ
これも貫之の作なり。

(三九六)

おほえのちふるが越へまかりけるうまのはなむけによめ
藤原かねすけの朝臣

君が行くこしの白山あらねともゆきのまに／＼跡はたづねむ

(釋)おほへのちふる 大江千古なり。參議音人の子。仕へて、從四位上伊豫權守式部權大輔に至りぬ。この時は北陸地方の介、椽などの官にて、赴任せむとせし折なるべし。○ゆきの 雪に、行きをかけたなり。

一首の意は、貴方の行かるる、北國の白山あたりは、私の不案内の道あれども、雪の深き處を聞けば、貴方の踏んで行かれたる、その雪の足跡のまに／＼に、お跡を尋ねて私も參らうとあり。

(評)白山は、聲調のうへより、しらねども、の語を喚び起し、縁語のうへより、ゆきのまに／＼の句をいひ出でむ爲に置ける、修飾なり。人に立後れては、都に一人ある心地せぬ由にて、後より尋ね行かむといへり。離情の切あるは素よりなれど、猶、誇張の言なるべし。これ則ち、歌となり、詩となる所以なり。實に、尋ね行かむとあらますならば、これ只言のみ。僧父の言のみ。

人の花山にまうできてゆふさりつかた、歸りなむこしける時

によめる

僧正 遍照

夕暮のまがきは山と見えななむ、よるは越えじと宿りとりへく

(釋)花山 春部下に出でたり。山城國山科の元慶寺なり。ゆふさりつかたは夕方あり。○まがき 間垣の義とも、馬垣の義ともいふ。和名抄に「和名未加岐 云未世以柴作之、言疎離也」とあり。○見えななむ 過去の助働辞のなむと重りたるなり。

一首の意は、夕暮の闇紛れの、この庭の籬は、さうぞ、山と見えて貰ひたい、夜は山は越えられまいと思つて、あの歸らうとする人の、今宵は此處に、宿をとるやうにサとなり。

(評)上句を下句にて解釋したる叙法なり。さる大寺の夕間暮、築地や垣やの隈々、打黒みてほのかなる物蔭より聯想して、山と見えぬべく求む。破天荒の空想、詩膽斗の如し。これぞ、遍照の擅場にして、當時の歌仙の、遙に及ばざる点なるべき。誠少あしと評せられたるも、これらの風體に就いてにやありけむ。

三句、顯昭本、山と見えぬかかあるはわろし。

山にのぼりて、歸りまうで来て、人々わかれけるついでによめる。
幽仙法師

わかれをば山の櫻にまかせてむごめむごめじは花のまに／＼

(三九七)

(釋)山にのぼりて云々 山は比叡山あり。王朝時代には、比叡山の延暦寺を山、三井の園城寺を寺とのみいひ慣へり。眞淵いふ、「歸りまうで来てといひながら、歌に山の櫻とよめるは、幽仙の住める坊は、西坂本などにありけるが、其處まで歸りまうで来て、人々と別るゝあるべしといへり。これは、幽仙の、慈覺に就きて、未だ、修業中、山にありし頃の事とすべし。又思ふに、天台座主記に、第九長意和尚の項に、幽仙律師を隸して、「仁和寺根本師、彼寺別當建立人也。」と見え、又、

昌泰二年十二月十四日官符任別當。口傳云、幽仙元慈覺弟子、後任仁和寺別當云々。依本習一申三任延暦寺別當云々。

と見えたり。されば、本來眞言宗の僧にて、仁和寺別當なるが、さる所縁に依りて、姑く延暦寺別當に任じたるなれば、折々、山に上りて、その職務を執りしものならむには、人々とおさしく下り来て、別るゝ時も、山の主人方の位置に立ちて、別を惜しみしものにもあるべし。

一首の意は、さてお別れ申すは、甚だ、残念ではあるが、愚僧が、いろ／＼申しても、お止まりはなさるまいによつて、この上は、別れぎはを、この山の櫻に打任せてまはうワイ、貴方達を止めうとも、止めまいと、それは、花の心任せとなり。

(評)よもや、心なく、花を見捨て、歸られはすまじの餘意あり。歸る歸らぬは人々の御心のまゝといふべきを、花を主にしていひはてたる、婉曲なり。わが引止めたくする目的を達せむが爲に、

個々の胸裡に伏在せる、一片の風流心に訴へて、花に辜負する罪の、容易ならざるべきを暗示す。況や、この人々、風流を以て自任する風雅男ならむには、止まらざるを得ざるならむ。作者の狡猾手段、妙といふべし。六帖に、二句、峰のさくら、結句、春のまに／＼とあり。結句殊にわろし。

うりん院のみこの、舍利會に、山にのぼりて歸りけるに、櫻の花のもとにてよめる。 僧正へんぜう

山風は、さくららふきまき乱れなむ花のまぎれにたちこまるべく

(釋)うりん院のみこ云々 雲林院のことは、春部下に出でたり。仁明天皇の皇子常康親王の所有なりけるが、出家の後、遍照に付屬して、花山の元慶寺の別院とま給へるより、雲林院の親王と申し、舍利會は佛骨供養の法會なり。親王の、比叡山の舍利會に參詣し給へる歸りに、御送の爲に、お供申したる遍照、及び、幽仙等の、櫻の蔭にて詠めるなり。○山風に云々 山風に吹まきといふは、自他差へり。吹捲かれといはでは慥はす。吹捲きをもとのまゝにせば、初句の助辭と三句の自他とを直して「山風は櫻吹捲き亂らなむ」といふべし。○花のまぎれ 散る花の紛れなり。

一首の意は、山風は、この櫻の花を吹捲いて、散り乱らして貰ひたいワイ、花の散乱るゝに紛れて、歸る道が知れぬと云うて、君がお止まりなさるやうにサとなり。

(四〇〇)

(評)落花兩三片、緇素の衣を撲つて、互に別れ難てなる光景想ふべし。常は、勿散りそと希へる花を、今日は、道まがふまで散れといへるに、別を惜む情の、甚しさは見ゆゆり。この妙處は、既に、賀部、業平の歌、

櫻花ちりかひくもれ老らくの來むといふなる道まがふかに

の條に説明せり。詩材も構想も、兩者相同じ。但、遍照のは貞觀八年、業平のは貞觀十七年の作なれば、是より彼は出でたるか。業平朝臣は、有數の歌仙、あへて、人の歌を拘ふものにならじ。暗合か。

結句、家集に、君とまるべくとあり。優れるが如し。

幽仙法師

ことならば君とまるべく句はなむ歸すは花のうきにやはあらぬ

(釋)○ことならば かくとならばの意、春部下にも見えたり。殊あらば、如ならば、なほ釋ける説は、誤れり。○君 雲林院の親王をなす。

一首の意は、櫻の花よ、とてもこのやうに咲匂ふ程ならば、君の殘多く思召してお留りなるとるやうに、咲匂うて貰ひたいワイ、お歸し申すは、花よ、其方の爲に、憂いことではないか、文さに憂いことであるぞよとなり。

(評)この法師、上には、「別をば山の櫻に任せてむと詠み、これは又、人、一步を進めて、別をむ

る責任は、素より、花の上にあるものとして、歸すは汝の不面目にあらずやと詰責せり。これ、草を打てば蛇動く底の筆法にして、暗に歸り給ふは、花に面目を失はしむる所以なれば、必ず止まり給ふべきやうに諷示したり。寄託の興、味ふべきものあり。

仁和のみかど、みここにおはしましける時に、ふるの瀧御らん
じにおはしまして、かへり給ひけるによめる。

兼藝法師

あかずして別る、涙瀧にそふ水まさるとやあもは見ゆらむ

(釋)仁和のみかど云々 秋部上の「里はあれて云々の歌の條を見るべし。○瀧にそふ 瀧の水に添はるとなり。○しも 川下なり。

一首の意は、殘多くて御別れ申す、愚僧のこの涙が、瀧に添うて流れるワイ、これでは、水が増ると、川下にては見ゆることであらうかととなり。

(評)この法師、抄物に、大和國城上郡の人とあれば、親王の、布留の瀧見の御案内に出立てるか。もしは、石上の良因院などの住持にやあらむ。涙の流水に和する構想は、詩にいと多かり。

一合相思涙。臨江瀧素秋。碧波如會意。却與向西流。

湖中有妾相思淚。流到樓前更不流。

の類なり。さて、涙の多きを水瀧の増るとまで誇張したる、白髮三千丈の李諫仙をも、後に、

(四〇一)

瞳若たらしむるに足る。かくて、別恨の深さも見ゆめり。

(四〇二)

かむなりのつばにめしたりける日、おほみきなどたうべて、
雨のいたう降りければ、夕さりまで侍りて、まかりでて侍り
ける折に、さかづきをこりて、

つらゆき

秋萩の花をば雨にぬらせごも君をばましてをしとこそ思へ

(釋)かむなりのつば云々 かむなりのつばは襲芳舎なり。この事は、秋部上「かくばかりをしと思ふ
夜をの歌の條に委しく辨せり。おほみきは、大御酒なり。下されの酒をいふ。さかづきをこりて
は、杯を持ちてあり。

一首の意は、あの前栽の萩の花を、この雨に濡らすは、惜しいものではあるが、それよりも、
お別れ申す貴方をば、猶の事、惜しいとサ思ひますとなり。

(評)眞淵いふ、この歌は、兼覽王に杯をさすて歌へるなり。伊勢物語にも、「狩して天の川に至
るといふころを詠みて、杯はさせ」とあり。源氏物語にも、源氏の御許へ、今上も院も出で
まして、れのく、御歌をこなへて、御杯をさへせ給ふことあり。歌を唱へて杯をさすが、古へ
のみやびなり、奥儀抄にも、其の由見ゆといへり。げにさもあるべし。抑も、貫之、躬恒等は、
この集撰著の爲に、雷鳴の聲に召されしこと、見ゆれば、これも、その折の事にやありけむ。

兼覽王は、その撰集の事おどにつきて、今日しも、始めて出合ひたるが、後も、まば人々逢ふ
べきからぬ、珍客の事にもあり、彼は王氏にして、清要の官にもある人なれば、杯を執りて、先づ
薦めたりけらし。折柄の秋雨は、壺庭の萩の上に飛きて、散らまくをしき光景は、奈良時代の
歌人の、一再ならず、繰返して歌ひしが如し。乃ち取合せて、それにもまして、惜しとこそ思
へど、重きをこの人に歸したり。これらの配合、やゝをかきとくも見ゆれど、理をいひ過
して、餘韻に乏し。景樹が、をしを愛賞の意に釋き做したるは、上句を餘所にしての見にして、
疎漏あり。

ごよめりけるかへし

兼覽王

をしむらむ人の心を知らぬまに秋のまぐれご身ぞふりにける

(釋)ごよめりけるかへし 前の歌を受けて、まかくと貫之の讀みける、その返歌の意。○時雨と
時雨の如くの意。和名抄に「驟雨小雨也」とあり。秋冬の交の小雨を時雨といへり。冬にのみ限
るは、後世のことあり。○ふり 時雨の降りといふに、身の舊りをかけたり。身の舊るは、老
ひ行くをいふ。

一首の意は、そのやうに、別に臨んで、私を惜んで下さる貴方の御志を、今日までも存せざり
しその間に、私の身はず、この秋の時雨の降ると云ふやうに、舊くなつてままひましたワイと
なり。

(四〇三)

(四〇四)

(評)傾蓋の遅きを悔める意、顯然たり。さるを、景樹が、若からましかば、未遠く交り語らむを、知己に逢ひて、餘齡少なきを悔めるなりとまでいへるは、非なり。身ぞふりにけるは、既に、老境に臨める人の口吻と聞ゆるもの、さばかりの類齡にはあらじ。そもく、作者は、惟喬親王の長子なり。親王は貞觀十五年に、廿六にて薨逝ありければ、其の十七八の頃の御子と見ても、この集撰著の延喜の四五年には、僅に、四十一二なり。されど、四十を初老とすなる、漢土風の習慣のまゝに詠み做せるのみ。必ず、景樹の説に従は、大抵、同年配と見ゆる、貫之、躬恒の前に置きて、我れ一人老い朽ちたるやうにいへるに當りて、穩やかならず。又、景樹は調高しと評せるも、いさばかりにはあらじ。秋の時雨の譬喩も、後人に、まばく模倣せられて、折角の一ふしも、陳腐に聞做さるるぞくちをしき。

かねみのおほきみにはじめて物語して別れける時によめる

別るれど嬉しくもあるか今宵よりあひ見ぬ先に何を戀ひまし

(釋)かねみのおほきみ云々上のと、同じ時の歌なるべし。兼覽王は、躬恒のみならず、貫之とも初對面なるべきことは、「をしむらむ人の心をしらぬ間と詠める趣をもて知らる。○あるかは歎辭。○あひ見ぬ あひは逢ひなり。和の意にはあらず。

一首の意は、悲しい筈の御別を致せど、それとても、嬉しうもあることよ、何故といふに、

御目にかゝりましたればこそ、御別れ申すなれ、今夜より未だお目にかゝらぬ先には、何を戀しう思ひませうぞとなり。

(評)先づ、嬌語を放ちて、さて、其の然る所以を説明す。素より、別れぬに増したる事はなけれど、到底望み得らるゝことならねば、第二義を以て、姑く、満足したる趣なり。悲觀に執着したる人の、まひて、自ら、懋籍したる詞なり。笑の中に涙あるを認めよ。これを、離合集散を一つにしたる、洞達の見と思ひ取らむは、大なる謬ならむ。猶、春歌下、「残りあく散るぞめてたさの歌評を参照すべし。今宵よりの句は、あひ見ぬを隔て、先に係る。

題あらず

よみ人あらず

あかずして別るゝ袖のあらたまは君が形見とつゝみてぞ行く

(釋)一首の意は、殘多く思うて別るゝ袖の涙は、白玉のやうに見ゆるが、この白玉は、貴方の爲に出來たるもの故、貴方のお形見と存じて、袖に包んでサ行くツとなり。

(評)泣きつゝ別れ行く人の作なり。ねのが涙を、人の形見と取做したるを一ふしとす。さて、涙を白玉と暗喩して、玉は鄭重に、物に包みなごすれば、大事にするの意を轉義して、つゝみてこいへり。又、上に、袖の白玉とあるに譲りて、袖に包みてといふべきを略きたり。人目をかねて涙を抑ふる趣の、下にはの見ゆるもをかし。

(四〇五)

かぎりなく思ふ涙にそぼちぬる袖はかわかじ逢はむ日までに

(釋)〇そぼち 濡れ透る意。そぼ瀦る、そぼ降るなどのそぼも、同語あり。

一首の意は、この別を、限も無う悲しう思うて泣く涙に、濡れ透りたるこの袖は、なかく乾きはすまいワイ、又逢はう其の日まではサとあり。

(評)無窮の離愁に沈まむことをあらませるあり。萬葉集卷十二に、

白妙のわが紐の緒のたえぬ間に戀結せむ逢はむ日までに

國遠みたりには逢はず夢にだに我に見えこそ逢はむ日までに

朝霞たなびく山を越えていなば我は戀ひむな逢はむ日までに

などあると、同調の古歌なり。逢はむ日までに、逢はむ日まではの意と同じきことは、萬葉

の語例を見て知るべし。

○

かきくらししことはふらなむ春雨に濡衣させて君をこゞめむ

(釋)〇かきくらし かきは接頭語、くらしは暗くする意。奈良時代には、搔霧しといへり。〇こゞ

は 上ある、ことならばのこと、同語同意。〇濡衣ヌレキさせて 奈良時代には、濡れたる衣の意

にのみ用ゐたるが、この頃は、無實、冤名の意にも轉じたり。こゞはその意なり。

一首の意は、この春雨よ、とても降る程のことならば、いつこの事、空も搔暗まして、強う降つ

て貰ひたいワイ、然らば、往かれぬやうに雨が濡らすからと、雨に無實をいひかけて、別れて往く貴方をお留め申さうとなり。

(評)希望の詩的なるがをかし。霏々たる細雨の夕、門に臨みて人の歸るを送る、况致想ひ遣らる。

初句、顯昭本にかきくづしとありて、人のいたく物言ふをも、かきくづしてこそ申せと注せ

り。僻言なるべし。

○

あひて行く人をこゞめむ櫻花いづれを道とまごふまで散れ

(釋)〇あひて 強ひてなり。

一首の意は、何程止めても止まらずに、無理やりに歸つて行く人を、止めうと思ふワイ、櫻の

花よ、あの人が、をれを道とも迷うて之行かぬ位に、散つて呉れよとなり。

(評)上なる。

櫻花ちりかひくもれ老らくの來むといふある道まがふかに(賀)

山風にさくらふきまき乱れあむ花のまぎれに立止まるべく(別)

と同一の構想。まかも、老らくの歌は、加ふるに、奇想を以てしたれば、殊に優れたり。猗委

しくは、上二首の條に云へるを見よ。

志賀の山越えにて、いし井のもとにて、物いひける人の別れ

けるをりによめる、

つらゆき

(四〇八)

むすぶ手のあづくに濁る山の井のあかでも人に別れぬるかな

(釋)志賀の山こえて云々 いし井は石井なり。岩ある處に清水の湛へてあるをいふ。石の字、古くは、いふ訓めり。物言ひける人とは、男ごちにいふ詞にあらねば、この人は女なるべし。○まづく 涓滴なり。○山の井の 山の井の如くの意。山の井は、山清水を堰き溜めたる井なり。詞書の、石井と同じき物。○あかで 飽かでない。梵語に、水を阿伽といふより、山の井の阿伽に、飽かでをかけたなりといふ説は、穿鑿あり。

一首の意は、山の井は淺くて、掬ひ上ぐる手から落つる滴の爲に、忽に濁る故、思うやうに飲み足らぬ、残多い物であるが、丁度その如く、残多いにまわ、貴方に別れてまうことよとなり。

(評)三句までは、あかでといはむ序あり。山越の石の井のもと、涓々として流る、清水の、涼しげに好もしきより、我も人も立寄りて、幾掬ひしける間に、互に、一言二言詞かはし初めしが、忽に、東西と別れしにて、逢ふも別るゝも、極めて、苟且ある物から、いたく惜まるゝ山に詠み做せるが、趣向なり。眼前の景趣を借り來りて、序の材料に用ゐたり。萬葉集十一、泊瀬川速見早瀬をむすびあけて飽かずや妹ごこひし君はもの類型なるが、彼れは、修辭、やゝ粗朴の嫌あり。六帖に、

むすぶ手の岩間をせばみ奥山の石垣清水飽かずもあるかな

は、殊に酷似したれど、猶、雫に濁る山の井の、形容の妙を悉せるに及ばざること遠し。掬ひあぐる手の股より雫の滴り落つるに、透き徹りたる水底の砂の攪乱されて、忽に濁り果てたる、淺く涼しき山の井の狀、見るが如し。俊成卿の風體抄に曰く、

この歌、むすぶ手のおけるより、雫に濁る山の井のご云ひて、飽かでもといへる、大方すべて、詞毎のつゞき、妾心限りなく侍るあり。歌の本體は、只この歌あるべし。云々。

拾遺集に、再び、この歌を擧げて、次に「三條内侍、方違へに渡りて歸るあした、雫に濁るばかりの歌は、今は之讀まじと侍りければ、車に乗らむとしける程に、」と詞書して、貫之、

家ながら別るゝ時は山の井の濁りしよりもわびしかりけり

この詞を見れば、俊成卿以前、作者現存の當時に於て、既に、噴々の好評ありしこと知られぬべし。但、風體抄に、歌の本體のやうにこれをいへるは、過褒の甚しきものにて、從ふべからず。又、拾遺集この歌の詞書に、「女の、山の井に手洗ひむすびて飲むを見て、こゝろは、歌の上には適はざるが如し。

道にあへりける人の車に物をいひつきて、別れける所にて
よめる、
こもの

またの帯の道はかた／＼別ることもゆきめぐりても逢はむこそ思ふ

(四〇九)

(四一〇)

(釋)道にあへりける云々 人の車は、女車あるべし。いひつきては、言ひ寄り着く意なり。つぎと濁りて、人して、その車に物を云ひ繼ぐ意とする釋は當らず。○またの帶の 眞淵いふ、裝束の下の着たる物の紐をいふ、いにしへ、帶と紐と通はしていへりと。契沖が、下の帶は、道の枕詞なり、伊弉諾尊日向穩原にして、御菟し給ふ時、帶を投げ給ひしかば、長道磐神となる、これ道の神あり、よりにて、帶の道とは續けたりといへるは、非なり、帶の道といひて、まか聞えむやは。下のといふ語も、さては、無用ならむ。○かたぐ 片々あり。○ゆきめぐり 行巡りなり。

一首の意は、下の帶をするに、はじめは、端の方が、兩方へ別るれども、廻して結ぶ時は、又出合ふものであるが、その通りに、今往く道は、かう右と左へ別れて往くとも、又そのうちに、是非とも、出合はうと思ふツイとなり。

(評)詩にも歌にも、衣帯に託して、思慕の情を寓すること多かり。まかして、この譬喩ばかり、恰當なるは妙かるべし。又、またの帶をしも取出でたるは、故あることにや。もとよりの懸想人などかりけむ。万集集卷十一、

玉の緒のくゝり寄せつゝ末つひにゆきは別れず同じ緒にあらむの類想なるに似たり。

古今和歌集卷第九

羈旅歌

もろこしにて月を見てよみける

安倍仲麻呂

天の原ふりさけ見ればかすがなる三笠の山にいでし月かも

この歌は、昔、なかまろを、もろこしに物ならはしにつかはしたりけるに、あまたの年をへて、え歸りまうでござりけるを、この國よりつかひまかりいたりけるに、たぐひてまうでまむむとて出でたりけるに、めいしうといふところの海べにて、かの國の人、うまのはなむけしけり。よるになりて、月のいと面白くさし出でたけけるを見てよめる、となむ語りつたふる。

(釋)羈旅歌 タビノウタと訓む。年月を亘るも、只、一夜二夜にても、他泊するを、すべて、旅といへりき。○もろこし 漢土なり。○天の原 天は天空なり。原は廣き所をさしていふ語、海原野原など、同義に用ゐらる。○ふりさけ 萬葉集に、振放見者と書けり。又、振仰而をフリサケテとも訓めり。ふりは接頭語、さけは、放、又は離の義にて、頭をば、その見むとする物に振のけて見るをいふ。これ、遠き物を見る時の態度なり。○かすがなる三笠の山 春日に在る三笠山の意。春日は大和國添上郡にある郷の名。もと、糟垣の義より出づとぞ。三笠山は、御

(四一一)

笠、御蓋とも書く。今は、春日神社の鎮座まします山をいへり。貝原益軒は、この山の西方なる、今いふ春日山の異名ならむといへり。○かも かは疑辭、もは嘆辭。

一首の意は、大空を遙に見渡せば、東の日本の方に、月が今さし昇るが、あの月は、以前、わが、故郷の奈良に居りし時、春日の三笠山に出たる月かまあとなり。

(評)春日なる三笠の山と續けて、月を取合せて詠むことは、奈良時代の歌に、例多かり。蓋し、三笠山は奈良の都の東方に位したればなり。作者は勿論、奈良の都人なれば、幼時より三笠山の月は見慣れて、深く腦底に印象せしならむ。故に、他國他郷に月を見ては、直に、三笠山を聯想して、宵々毎に待出でし時代を廻想し、人を憶ひ、郷土を懐ひ、本國を念ふ。いかに、晴れ渡りたる夜の月なりけむ。かもの用法、極めて輕くて、殆ど、嘆辭に近し。故郷に見たりし同じ月か否かまで、疑問したるには非じ。これが故郷にて見たりし月かマアと驚嘆したるに、わが、思ひの外の異郷に月を見ることを悲傷したる意、隱然たり。又、見ればとあるを、出でし月かとも承けたりとのみ見ては、上下、意離離せり。こは、二句の下に照應すべき詞あるを略けるなり、即ち、天の原振放け見れば、月こそはさし昇れ、その月は、春日なる三笠の月に出でし月かも、と詞を補ひて、始めて、完全の意義をなす。これ、この歌の簡淨なる所以ならむ。風調高邁にして、工を須るざれども、蘊合の妙あり。感憤窮極、神韻、縹渺として、體格雄渾なり。猶いはむ。作者仲磨呂が、元正天皇靈龜二年、唐に多治比縣守に従ひて、留學生として入唐せしは、十六歳の時なりき。舊唐書に、

其偏使仲磨、奉中國之風、因留不去、改姓名爲朝衡、仕歷左補闕、儀王友衡、留七十年、好書籍、放歸郷、逗留不去、云々、

そのいかに、唐土の文化に眩惑して、父母の國を忘れ果てたるかを思ふべし。抑も、朝廷の留學生を遣はされしは、何の爲ぞ。彼が長を取り、わが短を補はむの思召からずや。莫大の給費、巨多の賜暇、以て、その學業を成就せしめしに、忘恩背信の渠れば、大使の歸國に伴はず、唐の位に居、唐の粟を食ひ、唐の衣を着、唐の天子に仕へて、無上の光榮を博せりと思へりしよ。あはれ、この得意の満面の渠れ、渠れも亦人なり。たま／＼、失意あり、憂苦あり、病苦あり、名利の迷雲忽ち晴れて、本性の月明らかならむ時、獨坐無聊の時、豈に、懷土望郷の念の生るなからむや。法顯三藏天竺に行きて、途に漢の扇を見ては悲み、病に臥しては漢の食を希ひしこといふに非ずや。越鳥は南枝に巢ひ、胡馬は北風に嘶くとあるにあらずや。頭陀すら然り。鳥獸すら然り。さては、長安一片の月に郷思動くこと万里、端なく、この一篇の佳作を貽し來りしか。かくて、これらの動機は、三十五六年間も逗留せし渠れをして、遣唐使藤原清河と共に、歸國の旅装を整ふるに至らしめしか。まかも、玄宗の使命を帯びたりき。詩に曰く、

舍命將辭國。非才忝侍臣。天中戀明主。海外憶慈親。伏奏違金闕。駢騶去玉津。蓬萊郷路遠。若木故園鄰。西望懷恩日。東歸感義辰。平生一寶劔。留贈結交人。

口調は、全然、唐の歸化人なり。この時、王維、包佶、趙驩等の送行の詩あり。又、慕義名空在。輸忠孝不全。報恩無有日。歸國定何年。

(四一四)

と作れるもあり。海外憶慈親といひ、孝不全といへるなど、やゝ殊勝らしげなれど、其の歸國は、只、おのれが私の親故のやうに聞做されて、わが大君の御爲、國の爲なごいふ真心は、露ばかりも見えず。想ふに、わが大君は、渠れが不臣を惡み給ひて、歸りまゐるこすは、その親ごもを罪なはむなど、仰せ下されしにもやあら。流石に、さし當りて、親殺しの名を負はむも心苦しくて、濫り／＼出立ちしにもやあらむ。されば、海上風に遭ひて安南に漂泊し、再び、上都に還着したりしは、寧ろ、その幸とせしところなるやも測られず。仕へて、左散騎常侍安南都護より、光祿大夫兼御史中丞北海郡開國公に至り、寶龜元年唐の五年七十餘にして、唐に死し、潞州大都督を贈られき。蜀葵の、日に向ふに羞づること太し。安澄泊夙くこの説あり。

初句、撰者貫之の土佐日記に、青海原とあり。眞淵の、二様の傳へありしかといへるは、非なり。日記のは、土佐よりの歸途、海上にての事なれば、青海原ならではつき／＼しからず、且は、女の筆に托したるものなれば、まぎけなく聞僻めしやうに、わざと書き改めもまたりしなるべし。其の証は、續日本紀承和三年の條に、遣唐使に托して、仲麻呂に贈位せられし位記の文に、唯有「接天之章」長傳「擲地之響」とあり。接は、文選の注に、猶蓋也とあり。蓋は笠のことなれば、即ち、天の原三笠の山をかすめいへる詞なり。近藤芳樹、亦、この事をいへり。左註は、土佐日記をよりに依りて、後人の書加へたるものなるべし。若し、これに據れば、仲麻呂、清河に伴ひて歸り來らむとしたる時、明州の海濱にての留別の作あり。明州は、唐書地理志に、明州屬江南道開元廿六年以三境有之然らは、部立も、上の離別の部に取むべきをや。又、歌の趣も、悲的の感情を

叙べたるものにて、送別の宴席に、酒など飲みて、面白く見たる月を詠めるものに非ず。思ふべし。

おきの國に流されける時に、船にのりて出立つこと、京なる人のもごにつかはしける。小野たかむらの朝臣

わたの原やそしまかけてこぎ出ぬこ人には告げよあまの釣舟

(釋)おきの國に云々 篁の、隱岐に流されし事のおこりは、淳和帝の承和四年、遣唐副使を以て出發せむとする時、大使藤原常嗣、其の乗船の壞れたるにより、篁の船を奪はむとし、朝に請ひて許されぬ。篁恚りて、遂に、病と稱して行かず。西道謠を作りて、遣唐の事を刺る。嵯峨上皇見て大に怒らせ給ひ、罪を論せしめて、死一等を減じて庶人となし、隱岐に流し遣はしつ。途上、謫行吟七十韻を作り、當時の稱誦するところとなれり。後、數年を経て召還され、遂に、本位に復せられき。帝の、其の文才を愛せしめ給ひし故とぞ。船に乗りて出立つは、浪速の津より舟出せしあるべし。山崎よりにはあらじ。さるは、歌に八十島かけてとあり。隱岐に行く航路は、瀬戸内海を漕ぎ通りて、北の海にめぐり出づるなり。内海には島嶼無數あり。浪速の津より明石の門を過ぐれば、即ち、内海なるを思へ。○わたの原 わたは海あり。原は例の廣きといふ語。○やそしまかけて 八十島かけてあり。かけては兼けての意。○人には 人はわが家人を指せるなり。

(四一五)

一首の意は、果ても知らぬ大海を、行先限りもあく、數多ある島々をかけ、隱岐の方へ、今、出船して去まうたといふ事を、故郷の家人には、どうぞ知らせてくれい、幸ひ、其處に居る海人の釣船よとなり。

(四一六)

(評)勅勘を蒙れる日蔭の身あれば、公然と、京ある誰れ彼れに音信せむ事、うの憚あきにあらじ。されば、他人はともかくも、せめて思ふ人ばかりには告げよの意なるべし。人にはのはの辞に心をつくべし。單に、人にといへるとは異なるをや。あまの釣舟は、釣舟の海士とあるべきあるを、倒装したるにて、爲に、諧調となれり。さて、かくまでに思はるゝ人は、そも誰れなりけむ。遣唐の時の上表に、「自分家貧親老、身亦尪弱、當汲水採薪、致匹夫之孝耳」といへり。父岑守は前に没したれば、その母親ならむか。捨て難き人をまで振捨て、万里流謫の身となり、わづかに、一片の漁舟に託して、その熱情を寄せむとす。感哀窮りなくや。

渡口郵船風定出。波頭謫處日晴看。

同時の詩なり。併せて、其の状況を見るに足る。又、釣舟は、消息なき取傳ふべき物ならぬことは、もとよりなれども、それらの分別を失ひて、告げよと希へるが、感情の高潮に達したる狂想にして、面白し。後世、平康頼が、

さつま瀉沖の小島に我はありと親には告げよ八重の沙風

と詠めるは、即ち、これを粉本に采れるなり。數多くといふことを八十と相換したるもよし。

四句と五句との應接、やゝ、詩の轉結の落しに彷彿したるところあり。果然、作者は詩人なり。

題あらす

よみ人あらす

みやこいでてけふみかの原いづみかは川風寒しころもかせ山

(釋)〇けふみかの原いづみ川 今日三日といふに、麩の原をかけたたり。契沖は、今日見るといふに、麩をかけたたりといへり。眞淵宣長等も、これに従へり。よに、さる拙き辭様あらむや。見るを海松に、見つを御津に寄する類の巧もあるものを。従ふべからず。麩の原は、山城國相樂郡にあり。山城名勝志に、「在木津渡東一里半許、郷内廣、今有九村」と見ゆ。和銅年中離宮を置かれ、聖武帝の天平中、始めて、恭仁宮を造られき。泉川は木津川の上流なるべし。されば、麩の原の泉川といふべきを、語調にまかせて、のの辭を省けること、後並志賀の浦、石川片瀨などの例に同じ。〇ころもかせ山 衣借せといふに、鹿香山をかけたたり。この山は、名勝志に「在木津里東一里半許、山西南半里許有鹿香山、瓶原隔木津川南也」とあり。一首の意は、都を立いでてから、今日は三日目、この麩の原の泉川に來たるが、コレヤ川風が寒いワイ、自分に衣を一つ借せよ、川向ひに見ゆる、あの鹿香山よとなり。

(釋)平安遷都後遠からぬ頃の人の作か。都は平安の京ならむ。都を立出でて、旅路に三日ばかり費して、麩の原には來りしならむ。乃ち、三日に麩の原をかけたたり。既に、万葉集に、三日原と

(四一七)

も書ければ、さもあるべき取做しなり。景樹は、初二句を蕪といはむ枕として曰く、旅する人は、都出でて今日幾日と數ふるが常なる、其の詞を借りて、蕪を三日四日の三日にかけたるありといへり。例の新説にはあれど、まか軽く見做すべき、初二句の意調ならむや。下句への照應も、事實なればこそ、面白くも聞ゆれ。都を出でて、未だ程も無き旅ながら、早くも、川風の寒さの、身に入むを覺ゆるまゝに、はかなき山の名に寄せても、衣を借せと詠へたる擬人、面白し。想ふに、暖き母が手、或は、妹が手を離れて旅立ちたる、懷子の詠めるならむ。眞淵の打聽に、顯本に、初句、家を出でてとある由をいへり。今の普通の顯本には見えす。さる異本もありしあるべし。

(四一八)

ほのくさあかしの浦のあさ霧に島隠れゆく舟をしぞおもふ

この歌は、ある人のいはく、かきのもとの人まろがなり。或戸野野堂ノ歌クトイハレハクニガ
(釋)○ほのくさと 仄ヒカにの意。俗言のホンノリに當る。○あかしの浦 ほのほのと明しといふに、明石の浦をかけたなり。明石は、和名抄に、播磨國明石郡明石郷とあり。○島隠れゆく 萬葉集には、島に隠れ行くと、島陰を行くとの兩意に用ゐらる。この解は、前の意に従ひつ。島は、明石の浦の眞向ひある、淡路島をさせり。宣長は、島隠れは、海を隔てたる所の、隠れて見えぬをいふ、必しも、島には限らずといへり。さては、雲隠れ、葉隠れ、木隠れ、深山隠れを、何と

かいはむ。更に、據なき臆説なり。○舟をしぞおもふ 舟をぞ懐ふといふに、しの強辭を挾めるなり。惜しの義にはあらず。

一首の意は、ホンノリと明けて來る、明石の浦の朝霧に漕出して、向ひの島崎に隠れて見えすなり行く舟をサ、哀と思ふとなり。

(評)明石の阜頭に立ちて、海上を眺望しての作なるべし。さては、羈旅の部に收め難きに似たり。下の白山、二見の浦の歌の如く、詞書にてもあらばともかく、これはさもなければ、いかかど傾く者あらむ。されど、よく思へ、須磨明石といひ列ねて、其の勝景を弄女は、後の事なるを。奈良時代、及び、その前後に於ける明石は、實用的船舶の錨地として、著名なりしことを。瀬戸内海の水東に走りて、茅渚灣に連絡せむとする時、淡路島に迫られて、海上二里餘の明石の迫門を形作り。潮流の干満に従ひて、水勢の變化甚しく急なれば、渺乎たる木葉舟は、風待ち、沙待ち、是非に、恰好の錨地を得ざるべからず。この要求を充たせるは、即ち、明石の浦あり。難波の津よりして西せむとし、瀬戸内海よりして東せむとする船舶は、必ず、此處に船がかりしたりき。されば、阜頭に燈明臺を設けて、其の往來を安全ならしめたりき。萬葉集に、「燈火のあかしの浦云々と詠める、即ち是なり。萬葉の註者、皆、燈火のを枕詞とのみ見たるは、往時の状況を察せざる疎漏といふべし。」(この燈臺、今も存し、和船の出入の便利なせり)かれば、明石とだに歌へば、すべて、行旅の作と聞做されたりしものぞ。況や、これは舟をしぞおもふと、哀に打詠めたる、さまたに、遊子羈客の吟なるをや。又、四句、島隠れを行くの意に従ふ時は、五音二音の組成とな

(四一九)

りて、語調いたく促迫し、一首の調を乱すが故に、捨てて采らす。五句、しの辭を挿みて、字餘としたるが、大に、力量ありて、この種の體製の結束を成すに、適するを覺ゆ。奈良時代の調よりは、和びたるどころあれど、悠遠にして、聲調蒼涼なり。されど、公任の九品和歌に、上品の上に擧げて、詞妙にして餘に心さへあるなりといへるは、人麻呂の作と思へるよりの諛評ならむ。

況や、公任、この歌をば三年まで案じて、始めて、心得られしとある、顯注の説、或は、一首十體ありといへる、一時軒隨筆の説など、皆、耳を尊びて目を卑めたる、鑿説のみ。左註は、全然非なり。眞淵いふ、風調、既に、人麿のにあらず。剩へ、撰者貫之も、人麻呂のとせざることは、後に、又、勅に依りて撰び出でたる、新撰和歌の序文に、「拙始自弘仁至于延長一詞人之作」と書きて、この「ほのく」の歌をも收めたり。然らば、嵯峨帝の弘仁にさしつぎて、天長、承和の頃の人の歌とせしこと明けしと云いへるは、確論なり。又、舊本今昔物語卷廿四、小野篁被流隱岐國一時讀和歌語の條に、上に見えたる、「わたの原八十島かけて云々の歌を擧げて、次に、

明石ト云フ所ニ行キテ、其夜宿テ、九月許リノ事ナリケレバ、明ボノニ不被寐テ詠メ居タルニ、船ノ島隠レヌルヲ見テ、哀ト思ヒテ如此ナム。

ホノトトアカシノ浦ノ云々

トゾ詠ミテ泣キケル。コレハ、篁ガ返リテ語ルヲ聞キテ、言傳ヘタルトナリ。

とあり。これに據りて、眞淵は、直に、篁の作とせり。この二首、果して、同時の詠ならむに

は、この集にも、八十島の歌に引續けて擧ぐべき筈ならずや、又、一は篁の名を露はし、一はよみ人老らずと記すべきならむや。早まれりといふべし。

あづまの方へ、友とする人、ひとりふたりいざなひていきけり。三河國八橋といふところにいたれりけるに、その川のほとりに、かきつばたいさおもしろく咲けりけるを見て、木の蔭におり居て、かきつばたさいふいつもじを、匂のかしらにするて、旅のころをよまむとて詠める。

在原業平朝臣

から衣きつゝなれにしつ。ましあればはるくきぬる旅をしぞ思ふ

(釋)あづまの方へ云々 あづまは吾孀なり。東國をいふ。廣き意にては、京の東、逢坂の關より彼方を、すて、あづまと云へりき。八橋は、行囊抄、名所記、方角抄等に據れば、碧海郡池鯉鮒宿の東なる里村の續きに、舊趾とて在り。確なることはきり難し。伊勢物語に、「水のくも手に流れ別れて、橋八つわたせるによりてなむ、八橋といひける。」とあり。かきつばたは、燕子花、杜若と書く。和名抄に、馬蘭を加木豆波太と訓めるは謬れり。さて、この詞書の書きさま、極

めて拙し。この集の端書は、皆短きを旨とせるに、業平のに限りて詞長し。伊勢物語は、眞言
虚言打交せたるものにて、いづれをそれと信すべき筋の物ならぬを、頑に、業平の自記なり、
實録なりと信じたる者の、物語に據りて、猥に、この詞書を書入れ、或は、書改めなどもせし
あらむか。○から衣きつ、あれといはむ序なり。から衣は、もと、韓國の衣の義より出でて、
唐國の、すべて物のめでたきより、からを美稱として、たゞ、衣といふと同意に用ゐ、さて、
衣は着襲らす物故、人に馴染む意をかけたなり。○つまし 妻しあり。衣の襪を寄せたり。しは
強辭。旅をしのしも、同じ辭。○はるくきぬる 遙々來ぬるなり。
一首の意は、都に甚く狎れ馴染みたる、衣の襪といふ名の妻がサあれば、別れてはるくど來
たる、この旅をサ、心細う悲しう思ふとあり。

(評)初二句のいひなし、萬葉集に、「唐衣きならの里と詠めるに似たり。なれ、つま、はるくな
ど、衣の縁語を点綴し、まかも、かきつばたの五文字を、一字づつ、句の頭に置きたる細工、手練
の極なり。三句の字餘りある、よく上來の語勢に對抗し得て、腰折の難を免れたり。結句の字
餘りに就ては、上の「ほのく」この歌の條に、既に論へるが如し。氣強く振切りて京を出來し
もの、長き旅の空には、流石の丈夫心も鈍りて、端なく、家人を思ひ出でて、轉た、戀戀の情
に堪へざる趣見ゆ。伊勢物語に、「皆人乾飯の上に涙落してはとびにけり。」とあるは、さも
やと思はる。

むさしの國とあもつふさの國との中にあるすみだ川のほ

ごりにいたりて、みやこの、いさ戀しう覺えければ、あはし川
のほごりにおり居て、思ひやれば、かぎりなく遠くもきにけ
るかなと、思ひわびてながめをるに、わたしもり、はや船に乗
れ、日もくれぬ、こいひければ、舟に乗りて渡らむとするに、み
な人物わびしくて、京に思ふ人なくしもあらず。さるをりに
あろき鳥のはしと足とあかき、川のほごりに遊びけり。京に
は見えぬ鳥なりければ、みな人見知らず。渡し守に、これは何
鳥ぞと、とひければ、これあむみやこ鳥、といひけるをき、て
よめる。

名にしおはゞいさ言さはむ都鳥わが思ふ人はありやなしやこ

(釋)むさしの國云々 この詞も、伊勢物語の抄録にして、いよく拙し。武藏と下總との間に
すみだ川とあるは、今の武藏の隅田川あるべし。さて、隅田川の名の起りは、川の東ある葛飾
郡に、隅田の里あるが故にて、この葛飾郡は、この集の時代は、下總に屬して、川を挟みて、
武藏と對へりしからむ。壽永建保の間は、武藏に屬し、永祿の頃は、復、下總に屬し、貞享元
祿の頃よりは、また今の如く、武藏に屬したり。猶委しくは、高田與清の棟梁集を参照すべし。

みやこ鳥は、伊勢物語に、「白き鳥の嘴と足と赤き、鴨の大きなる、水のうへに遊びつゝ、魚を食ふ。」とあり。山岡明阿が説に、都鳥は諸説ありと雖も、鴨なる事疑ふし、鴨に大小二種あり、大鴨を、關東の方言に、濱猫といふ、その聲の似たればならむ、小なるは、鳩ほざありて、其の聲細くひきし、墨田川などに來るは、この小鴨なりといへり。この鳥、嘴も赤く、腹も白く、背は鼠色なり。されど、ふと打見ては、白くのみ見ゆるがうへに、舞ひ立ちなどえたらひには、兩翼の下まで現はれて、いよ／＼白く見ゆ。細川幽齋をはじめ、季吟、契沖、眞淵、與清等、皆、この説あり。猶、梅亭鞠鳩の都鳥考を参照すべし。小野蘭山の本草啓蒙に、都鳥のミヤは聲によりておほせ、コドリはよぶこ鳥、みさこ鳥をこの小鳥に同じく、大鳥に對しての稱ありとあり。○名にしおはゞ、名に負ひ持つならばの意。しは例の強辭。○言とはむ、物言はむの意。大坂の詞に、語問志磐根木根立と見え、萬葉集にも、言とはぬ木すらかぞ、多く詠めりて、口を利くことをいふ。尋ね問ふ意に用ゐるは、後世の轉訛あり。○ありやかしや、やは疑辭。事無くて在りや否やの意。生死の事と見むは、や、早かるべし。

一首の意は、都といふ名を負うて居るをば、定めて、京の事をよく知り居るであらう程に、ざれ話して見やう、都鳥よ、私が思ふ都の人は、今、無事で居るか、如何かとサとあり。
 (評)言とはむは、物言はむの意されども、それも、ありやかしやと物言ふなれば、おのづから、尋ね問ふ意には落つめり。只、語に分寸あるのみ。都鳥といへばとて、京の事知るべきにはあらぬを、狂熱の餘り、愚に反りて、物言はむとする穢氣痴態、いと／＼哀深く、ありやなしやと、一正

一反、其の兩端を叩ける、同韻の折返されたる、姿致節奏、兩つながら面白く、千古、人口に膾炙せられたるも、決して、偶然に非ず。

題あらす

よみ人あらす

北へ行く雁ぞ鳴くある連れてこし數は足らでぞ歸るべらなる

この歌は、ある人、男女もろともに、人の國へまかりけり。をどこ、まかりいたりてすなはち、身まかりにければ、女ひとり、京へかへりける道に、歸る雁の鳴さけるをきいてよめる、とむいふ。

(釋)○北へ行く雁 春の歸雁なり。北は其の歸る方角にて、即ち、雁の故郷なり。

一首の意は、北の方へ去ぬる雁がサ、あれ鳴くことよ、故郷へ歸るは嬉しかりさうなるものを、おのやうに鳴くは、故郷から連れ立ちて來りし、雌雄か、親子兄弟かは知らぬが、死失せて、來りし時とは、數が足らずなつてサ、歸るさうな様子であるワイとあり。

(評)伉儷を失ひし人などの、歸家途上の作ならむ。たま／＼、北歸の過雁を聞く。境遇、既に、相似たり。即ち、同情して、おなじ不幸に泣くなるべく、推察したり。秋部の歌に「長きおもひは我ぞまされる、」わが如物や悲しがるらむなど、虫の音を詠めると、その規を同じくす。又、雁は列を成して飛ぶが故に、數は足らでといひて、そのうちのあつたものの、死に失せたるを思はせたる、婉曲なり。連れてこしの一句、四五句の、數の足らで歸るの對映にして、悼亡の情、

いよく、強く表出せらる。

左註は、大和物語などを取合せて物したるか。されども、大方の事情は、まかぞありけむ。この意を以てこの歌を釋かむに、更に、差はじ。又、季吟が、哀傷部に見えたる、在原滋春が、甲斐國に下りける時のなりといへるは、妄あり。土佐日記にも「くだりし時の人の數足らねば、古歌に、數はたらぞ歸るべらなるといふことを思ひいでて、」とありて、古歌とのみいへり。滋春は、撰者貫之と同時の人なり。實に、滋春の作ならむには、いかで、詠者不詳の歌とはすべからず。

あづまの方より京へまうでくこてよめる

お　　こ

山かくす春のかすみぞうらめしきいづれ都のさかひあるらむ

(釋) まうでく　參出來の音便なり。

一首の意は、もう、京の山が見ゆる筈を、隠して見せぬ、あの春の霞がサ、怨めしいワイ、あも、早く往きたく思ふ都の境は、何處あたりであらうぞとなり。

(評) 意地悪き霞よと怨めるに、婦人の情致、現はれてをかし。又、田舎よりはじめて上り來らむ人の、かくまで怨むべきにあらねば、もとよりの都人の、歸り來る折に詠めらむことまゐるし。韓愈が潮州に往くこと、「雲橫秦嶺家何在」と作れるも、往返の別こそあれ、意は同じなり。作

者の父壬生益成は、仁和四年遠江介に任せられき。若しは、秩滿みて歸京の途次、伴はれたりし作者の詠めりしか。

二句、六帖に、霞を春はどあり。かくては、怨めしく思ふは、春にのみ限れるやうに聞えて、穩やかならず。

こしの國へまかりける時あら山を見てよめる
み　つ　ね

さえはつる時しなれば越路ある白山の名は雪にぞありける

(釋) ○越路　北越地方の總稱。三越路ともいふ。三は美稱なり。

一首の意は、雪の消え果て、ままうと云ふ時がサ無いから、越路にある、白山といふ山の名のおこりは、雪からでサあつたワイとあり。

(評) 集中の歌層なるが如し。

あづまへまかりける時道にてよめる　つ　ら　ゆ　き

糸による物あらくにわかれ路の心ほそくもおもほゆるかな

(釋) ○糸による　糸は纏るあり。

一首の意は、糸に纏る物は皆細いが、自分の心はそれでも無いに、家を別れて遠く行く旅の道

は、一通りならず、心細くまあ思はるゝことよとなり。
(評)心細くの語縁より、糸を聯想し來りて、糸による物にもあらぬわが心がと、其の細り弱りて師無く覺ゆるを、怪しみ嘆けるあり。徒然草に、

糸による物ならなくにといへるは、古今集の中の歌屑とかやいひ傳へたれど、今の世の人の詠みぬべき事柄とは見えず。その世の歌は、委詞、この類ひのみ多し。この歌に限りて、かくいひ立てられたるも、知り難し。

げに、必ず、歌屑といはば、集中、これより劣れるが數多あるめり。兼好が、知り難しといへるは、さる事なり。初二句、惑ひ易し。中村知至が、糸に纏る物とは、纏り合せある糸といふにて、其の糸を一方にわくれば、二筋となりて細く別るゝ故に、細く縁語をつらねて、歌とせらるるべしといへるは、鑿説なり。宣長が、別れ路は、糸に纏る物ならなくにの意に釋けるは、いよく、非なり。さて、歌のさまは、離別の部に入るべくも見ゆれば、詞書をもて、殊更に、旅行の途次に詠める由を註せり。さるを、心得かねて、拾遺集に、別部に再び收めたるは、謬なり。

二句、源氏物語總角の巻に、「物とはなしにと、貫之が、この世ながらの別をだに、心細き筋に引掛けゝむを云々、」とあり。

かひの國へまかりける時道にてよめる

み つ ね

夜をさむみおくはつ霜をはらひつゝ草の枕にあまたたびねぬ

(釋)○はつ霜 秋零る霜をいふ。○あまたたび 數多度なり。

一首の意は、道中筋、この頃は、夜がサ寒い故に、降る初霜を拂ひくして、其の霜のおく草を枕に、幾度もく寐たワイとあり。

(評)作者が、甲斐權少目に赴任の時の作か。補任は、寛平六年二月廿八日なれども、その年の秋の末になりて、旅装を整へしにもやあらむ。京よりの公程は十三日、草の枕は數多たびといふべし。實境實詩、たえて、輕浮の氣無し。眞淵いはく、隠れたる所なくて、續け柄面白くあはれなりと。

結句、新撰和歌に、寐むとあるはわろし。

たちまの國のゆへまかりける時に、ふたみの浦といふ所に
とまりて、夕さりののきれいひたうへけるに、ともにありける
人々、歌よみけるついでによめる、 藤原兼輔

夕つく夜おぼつかなきを玉くしげふたみの浦はあけてこそ見ぬ

(釋)たちまの國云々 但馬國の湯は、おもふに、古より著名なる、城崎の温泉なるへし。ふたみの

浦は、契沖の説に、伊勢の海にもあれど、これは播磨にて、今、土俗ウタミと呼べる所なりと。上田秋成いふ、今、但馬國にも、二見と呼へる所あり、城崎の湯のある邊なり、兼輔の、こゝにて詠まれしと、かの里人はいへど、所のさまを見るに、然るべからず、この歌によりて附會したるものぞ、彼處へ行かむには、難波より舟に乗りて、播磨路を経つゝ、高砂のあたりより舟を上りて、北の方、山路分入る道あり、いにしへは、その道をや行きけむ、然れば、播磨なるぞ、道の行手なる、といへり。夕さりのかれいひは、夕飯の意にて、かれいひは。乾飯と書く。即ち、糲カシなり。古へは、行旅に、必ず、糲を携へ持ちて、所々にて、水に浸して食ひしなり。ともには俱にの意。伴従にはあらず。○夕つく夜 秋部下に註せり。田の入りて夜に成行く頃をいふ。○玉くしげ 玉は美稱、くしげは櫛シなり。化粧道具を容るゝ筈にて、蓋、身、懸子あり。こゝは、ふたみと掛けたり。

一首の意は、夕暮の閑い頃は、分明には見えぬものを、それを無理に見やうより、玉櫛シの蓋や實ミやといふ名の、この二見の浦は、櫛シの蓋を開けてといふやうに、夜が明けてからず、とくと見やうと思ふとなり。

(評)詞書に、ついでに、とある、心をつくべきにや。俱にある人達、皆、この浦の景色に見耽りて、歌詠みかはしなごしたらむには、やがて、夜も更けぬべきさまなり。されば、明日になりてこそと、警告の歌詠めるにて、乃ち、事のついでなるものなり。地名に據りたる縁語の鎖り、先づ、狂歌の趣あり。かやうの體は、平安の京に至りて發達したるものにて、この頃は、猶珍し

かりしこと、見ゆ。二句の下、意解の如くに詞を補はざれば、をの助辭に打合ふべき詞なし。

新撰和歌には、三句、玉手宮、四句、ふたみの浦をさあり。

これたかのみこのこもに、狩にまかりける時に、あまの川といふ所の、川のほとりにおりゐて、酒をさのみけるついでに、みこのいひけらく、狩して天の川原にいたる、といふ心をよみて、さかづきはさせ、といひければよめる。

ありはらの業平朝臣

かりくらし棚機つめに宿からむ天の川原にわれは來にけり

(釋)これたかのみこ云々 これも、伊勢物語によりて書加へたる、後人のまわさるべし。落筆唐突にして、他の例に協はず。伊勢物語、惟喬親王、交野の櫻狩の段に、「御供なる人、酒を持たせて、野より出來たり。この酒をのみてむとて、よき所を求め行くに、天の川といふ所にいたるをぬ。親王に、右馬の頭大みさ參る。親王宣ひけるは、交野を狩りて天の川のほとりにいたるを題にて、盃はさせ、と宣ひければ、詠みて奉りける。」とありて、この歌を擧げたり。天の川は、古註に、交野にありと云へり。○かりくらし 狩して日を暮らしての意。句の下、ての助辭省かれたり。狩は鷹狩なり。勢語を釋く者、その本文に泥みて、櫻狩としたるもあれど、いかゞ。櫻狩を打任せて、只、狩とのみいへる例なし。○棚機つめ、天の川原、秋部上に釋き

たり。

(四三三)

一首の意は、いつその事、今日一日を此處に狩し暮して、棚機様に今宵の宿を借らうぞ、その譯は、歩きまはつて、丁度幸ひ、棚機の居る天の川の川原に、思ひかけず來たワイとなり。

(評)棚機に宿借らむの、唐突にして奇矯なるに、人の耳を敬てしめ、さて、この天の川をかの天の川に混同して、天上の天の川原に來にけりと、斷じたり。作者の、人を翻弄すること、甚しといふべし。この技倆、業平にして始めてあり。諸家の企及すべきどころにあらず。景樹は、下に漢の張鷟が、槎にのりて漢を窮めし、故事を思へりとせり。初句を、古來の多くの註者、四句の上に冠せて、狩暮して天の川原に來にけりの意に釋けるは、疎漏なり。

みここの歌をかへすくよみつ、返しゆせずありにければ、ごもに侍りてよめる、きのありつね

ひととせに一たび來ます君まてば宿かす人もあらじこそ思ふ

(釋)みこ云々 伊勢物語には、前の歌を擧げて「と聞えければ、この歌をかへすく誦し給ひて、返しえし給はず。紀のありつね、御供につかうまつれり。それが返し、」とあり。○ます 座すにて、こは敬語。

一首の意は、否々、天の川にては、一年に一度づつ御出なさるゝ、彦星の君を待つことなれば、他の者が宿を借らうと云うても、借す人も、容易にあるまいとサ思ふとなり。

(評)彦星といひ顯さずして、一年に一度來ます君と、婉曲にいひ倣し、織女星のことを、宿かす人も、大らかに云へるぞ、含蓄ありて面白き。業平の歌の、宿借りて寐て行かむといへるを承けて、棚機は操正しく思ひ入りて、彦星の君を待てば、天の川原には、宿の借し手もあらじと、もごさたり。景樹は、彦星を惟喬親王に擬へたりといへり。されど、親王は、既に、天の川原に來て居給へるに、更に、待てばといはむこと、慥はずやあらむ。年若き親王の思ひ上り給へる容體、天が下の好き者業平が、大御酒奉らむとするを抑へて、酒の好下物としての歌を所望し給へる、取敢ず、棚機と寐て行かむの、例の本性を見はしたるたはれ言、素より、歌詠み給へる親王の、返しすべく誦め給へど、業平の歌の出榮えたるに臆れ給へるにや、えせずなりぬる、座に侍りたる有常の、黙しかねて、呻き出でたるなど、其の當座の状況、思ひ遣るに、いとをかしうなむ。

朱雀院の奈良におはしましける時に手向山にてよめる

すがはらの朝臣

このたびはぬさもとりあへず手向山紅葉の錦神のまに

(釋)朱雀院云々 朱雀院は宇多上皇を申す。この事、委しく秋部上に註せり。手向山は、大和國奈良大字雜司にあり。楓樹多し。古へ、奈良人の旅立つ時、奈良坂より此處にかゝりて、道祖神に手向けえたりけむ。さてなむ、手向の名を、この山はおひけるならし。今ある手向神社は、

(四三三)

祭神を殊にしたる、嚴めしき御社なり。古へは、さる物々しきがありしにはあらず。○このたび 度の意に旅をかけたなり。○ぬさもとりあへず とるは、何にまれ、その事を取まかなふ意なり。あへずは、秋部下「千早ふる神の忌垣に云々の歌の條にいへり。万葉集には、不堪をアヘズと訓みたり。○神のまに〜 神の御心任せにの意。まに〜は儘に〜の略にて、隨意の義。

一首の意は、何時はともあれ、此度の旅は、秋の時分なれば、道の神に御手向け申す幣も、見すばらしくて、捧ぐるに堪へぬワイ、されば、この手向山の見事なる紅葉の錦を幣として、神の御心任せに、御受納あれかしと云ふ。

(評)宇多上皇のこの御幸は、昌泰元年十月の事にして、貞敏親王、及び、この作者道真を従へ、途に、道真の高市郡の山莊に宿りて、遂に、吉野の宮瀧に至り、龍田山を経て河内に入り、住吉社に詣で給ひき。奈良を過らせ給ひしは、十月中の事と覺ゆれば、紅葉は手向に眞盛なりけむ。即ち、この紅葉を、幣の料なる錦に譬喩して、かばかり立派なる、幾村となき錦は、神の御心任せにし給へば、我が敷ならぬ幣の如き、捧ぐるまでもなしと、幣を對照の具に用ゐて、紅葉のめでたきを歌へり。このたびは、としも理れるに、これまで、まば〜、手向を越えし事知られたり。思ふに、高市の山莊への往返にやありけむ。万葉集に、

いなだきにさすめる玉は二つなしこなた彼方も君がまに〜(卷三)

春風の音にし出なばありさりと今ならずとも君がまにまに〜(卷四)

玉きはる吾が山のべに立つ霧立ちとも居とも君がまに〜(卷十)

たらちねの母に知らえずわが持てる心はよし君がまに〜(卷十一)

の儀、猶いと多かり。作者、この風體を學びて、や、平安調の皮肉を添へたり。

初二句、諸説あり。或は、院の御供なれば、私の幣は取あへすの意といひ、或は、院の御供にて、多忙の爲に、都を出でし時、幣も取持ちあへすの意ともいへり。景樹曰く、私の幣はこるに堪へずとならば、君が爲の幣をば、いよ〜とらるべきなり、打任せて、此度はとらすといふべけむや、又、院は微行を好ませ給ふと雖も、大和攝津河内の遠方を巡幸し給ふらむは、流石に、揺り満ちたる御しつらひなりけむ、況や、右大將ばかりの人の、御供に仕へ奉り給ふなるをや、卑賤の子の、周章しく、取る物も取敢ず騒ぎ立つと伴しからむや、これ、とりあへずといふ詞を、急遽蒼卒の意と思ひ泥めるよりの僻言なるべしと。この駁論よろし。

素性法師

手向にはつゝりの袖もきるべきに紅葉にあける神やかへさむ

(釋)つゝりの袖 僧服にて、納衣の事なり。人の捨て、顧みざる、糞掃に均しき物を拾ひ集め、これを綴りて衣となせばいふ。篇を衣に従ひて、袷衣とも書く。袷装の異名なり。天竺には、袷装の外に衣なし。日本、支那の寒國は、特別に、下に衣裳を着るなり。○あける 飽きてあるの約言。

一首の意は、この手向山の神への手向には、出家の身も、この袷衣アサギの袖をも切刻みて、幣ヒにして、手向くる筈なるに、あの錦のやうなる見事の紅葉をば、幣ヒと受けて、思ふ存分見て御座る神なれば、袷衣の袖の小切などは入らぬと云うて、御返しなさるゝ事であらうかと云なり。

(評)それ故に、手向くることを躊躇して、さし扣へて居るの餘意あり。志は松の葉、切りてはならぬ袖をも切るべしといへるが、既にをかきしに、紅葉に飽ける神やかへさむの意外の落想、更に、一段の詩趣を生ず。又、ついで、袖とあるに對へて、おのづから、神の飽き給へる紅葉は、錦の如くなるべきこと、思ひ知らる。畢竟、上のもこれ、手向の神を取合せて、紅葉のめでたき限りを形容したるにて、面白きは、神やかへさむ緋の袖、格調の高きは、神のまにくなる紅葉の錦なり。

古今和歌集卷第十

物名

うぐひす

藤原敏行朝臣

心から花の志づくにそぼちつ、うぐひすとのみ鳥の鳴くらむ

(釋)物名 モノ、ナと訓む。奥儀抄に、「隠題歌カクレイダ 古今集并拾遺集の物名部といふは、これにや。近代の人、これを稱「隠題」也。伴歌は、爲「題物の名を歌の表に置きて、他の心を述ぶる也。」と見え、八雲御抄には、「物名、これは隠題也。物の名を隠して詠む歌なり。古今などには、隠す物をやがて題にて、多くは、その心を詠めり。」と見えたる如く、其の組織の種類より云はば、隠す物をやがて題にせると、物の名を歌の表に置きて、他の心を述ぶるとの別あり。さて、この體製、萬葉集に見えず。平安朝になりて、國歌の復興に連れて、創制せられたる、一新體ならむ。詩に、離合詩と名づくる一體あり。文體明辨附録に、「按離合詩有四體云々。其三、離一字偏旁於一句之首尾、而首尾相續爲一字。其四、不離偏旁、但以二物二字離於一句之首尾、而首尾相續爲一物云々。」と見えて、唐の陸龜蒙が詩、

松間料

子山園靜憐^ニ幽木^ニ公幹詞清詠^ニ華門^ニ月上風微瀟洒甚^ニ斗膠何惜置^ニ盈樽^ニ。

の如きは、その一例なり。國朝詩人、また、字訓詩の體あり。本朝文粹に、清原真友が詩、
禾[△]失[△]會[△]知[△]秩[△]。中[△]心[△]豈[△]忘[△]忠[△]。里[△]魚[△]穿[△]浪[△]鯉[△]。江[△]鳥[△]度[△]峽[△]鴻[△]。火[△]盡[△]仍[△]爲[△]燈[△]。山[△]高[△]自[△]作[△]嵩[△]。色[△]絲[△]辭[△]
不[△]絶[△]。凡[△]虫[△]泣[△]寒[△]風[△]。

の類なり。是等の遊戲文字は、専ら、詩にのみ行はれたるを、復興期の歌人等、欽羨の餘り、
更に、物名の一體を創製して、わが誇耀せしものならむ。以上、岡井慎吾の説に據る。○心
からからはよりの意。○うぐひす、憂く干すの意。これに、名詞の爲を隠せり。

一首の意は、おのが心から、花の雫に濡れくして、それを人の知りたる事のやうに、何故に、
つらう乾かぬこばかり、あのやうに、鳥が鳴くのであらうとなり。

(評)歌の意も、鶯を詠めり。憂く干すは、鳥の鳴く所以を理れるにて、うぐひすと鳴くにはあらず。
そを心得誤りて、大江匡房が、

いかなれば春くるからにうぐひすのおのれが名をば人につぐらむ
を初めて、うぐひすを鳴き聲として詠める歌後世に多し。

ほこゝぎす

くべきほこぎすきぬれや待佗びてなくある聲の人をこよむる

(釋)くべきほこぎすきぬれやぬれやはぬればにやの意。時鳥を隠せり。○こよむる、舞動せし

むる意。

一首の意は、郭公が待つ雌の、來る筈の時分が過ぎたかして、それを待らづらがつて鳴立つる
聲が、郭公が鳴くくと、人をフヤくさするのであらうとなり。

(評)郭公のうへの戀を詠じて、下には、おのれが戀を思へるならむ。

うつせみ

在原滋春

浪のうつせみれば玉ぞ乱れけるひろはば袖にはかなからむや

(釋)○浪のうつせみれば浪の打つ瀬見ればなり。空蟬を隠せり。うつせみは、奈良の頃は、現し
身を轉じてまかも云ひたれど、この集の頃は、蟬は蛻殻となる物なれば、今鳴き居るをも、空
蟬と云ふと心得て、たゞ、蟬の事とせしなり。○はかなからむややは嘆辭、疑問にあらず。
一首の意は、浪の打つ川の瀬を見れば、見事の玉がサ、亂れて散るツイ、まかし、あの玉は、
袖に拾ひ入れうなら、はかなくあらうよとなり。

(評)歌は水珠を詠めり。四句、袖に拾はばを倒置したり。

かへし

壬生忠岑

袂よりはなれて玉を包まめやこれなむそれとうつせみむかし

(釋)○袂よりはなれて袂より外にてと云ふ程の意。○包まめや包まむやはなり。○それとそれ

(四四〇)

なるどのなるの省かれたるなり。○うつせみむ 移せ見むなり。空蟬を隠せり。
一首の意は、貴方は、袖に拾ははかなからむと仰せらるゝが、袖を除けて外に、玉を何に包
まうか、包む物は無いソイ、やはり、袖の上に、これがサそれであると、取移して見せよ、私
が見やうわさとなり。

(評) 汝は移せ、我は見むとあるべきを、單句を重疊して、簡淨にいひ做したり。この語法、後世の
戯曲文に、多く襲用せらる。

うめ

よみ人あらず

あなうめに常あるべくも見えぬ哉戀しあるべき香は匂ひつゝ

(釋) ○あなうめに常なる あなうにて切り、めに常なるを讀むべし。あなは感歎の發語、うは憂し
の意、めに常なるは、目に何時も觸るゝをいふ。梅を隠せり。

一首の意は、梅の花は、あゝ憂いワイ、すぐ散つてまきうて、目に常住見られさうにも見えぬ
ことよ、その癖、後にて戀しかりさうな香は、匂ひくしてサとなり。

(評) べくの語重複したり。

かにはさくら

つらゆき

かづけごも浪のなかにはさくらられて風ふくごこに浮き沈む玉

(釋) かにはさくら 和名鈔に、「樺木皮、可_レ以爲_レ矩者也、和名加波、又、加仁波、源氏物語に、「外の花
は八重さく花櫻盛過ぎて、かばさくらは開け、藤は遅く色づきなどはすめるを、」とある樺櫻、

これなり。宣長は、和名鈔に「櫻桃、一名朱櫻、和名波々加、一云、瀬波佐久良」とある、瀬の上
に加の字脱ちたるにて、加瀬波櫻なりといへど、樺櫻は花白し。朱櫻とはいふべからず。小野
博いふ、樺木は、葉は桑葉に似て尖れり、四月に白色の細花開く、樹皮白くして黒斑あり、横
理ありて櫻皮と同じ、物など纏き綴するに用ゐるといへり。○かづけごも 潜けごもあり。
○なかにはさくられて 中にては探られずしてなり。樺櫻を隠せり。

一首の意は、海の底に潜りて取らうとすれども、浪の中にては探り當てられずして、風の吹く
度毎に、浮いたり沈んだりする、玉であることよとなり。

(評) 滄海に珠を撈る趣を思ひて、波の白玉を詠めり。

すもゝのはな

今いくか春しなればうぐひすもものはながめて思ふへらなり

(釋) すもゝ 李なり。酸桃の義。○うぐひすもものはながめて 李花を隠せり。

一首の意は、今幾日あるぞ、もはや、幾日も春がサ無ければ、鶯も、自分と同じやうに、辛氣
さうに、物思をする様子であるワイとなり。

(評) 春部上に「鳴とむる花しなれば云々」と詠めると、着想も叙法もおなじ。作者も同じ人なり。

(四四一)

景樹は、ながめて物はどほ、誰れもいふべきを、倒置したるが、調のいみじくめでたきに、それはた、物名となれる、奇なりといへり。

からも、のはな

ふかやぶ

あふからもものはなほこそ悲しけれ別れむ事をかねて思へば

(釋)からも、杏なり。韓桃、辛桃の兩義あり。○あふからもものはなほ 杏花を隠せり。

一首の意は、逢へば嬉しい筈を、逢ふにつけて、やはり、物悲しいワイ、逢へば又別れう事のあるを、豫て思ふからサとなり。

(評)離別部の「別るれど嬉しくもあるか云々と、その意反對なり。但、これは平叙。

たちはな

をの、あげかけ

足引の山たちはなれ行く雲のやどり定めぬ世にこそありけれ

(釋)○たちはなれ 柄を隠せり。○行く雲の のはの如くの意。

一首の意は、山を立離れて行く雲の、宿り所の定まらぬやうに、行末の止まり所の、定め知られぬ世の中でサあつたワイとなり。

(評)人生を行雲流水に擬へて嘆ずるは、漢土の文字に、昔より數多見えたること。只、叙法の流暢なるを味ふべし。秋成曰く、この題は、山たちはななどありしを、後に、山の字を寫し洩さ、

かごいへり。山たちはなは、今の菘柑子といふ物なり。

をかたまの木

こものり

み吉野の吉野の瀧にかび出づる沫をかたまのきゆと見つらむ

(釋)をかたまの木 契沖は、如何なる木とも知られずといへり。眞淵は、岡玉の木なり、櫛の木にて、その實玉の如し、古へ、玉を貴べる習慣より、まことの玉ならねども、聞きは緒に貫きて、

身にも帯びたるが故に、かゝる實あるをば、玉の木といへり、その岡にあるをいふといへり。下に、山柿を並べたるによれば、岡の玉の木ならむも知るべからずと雖も、玉の木の義語難し。或は曰く、招魂の木の轉ならむ、神の御魂を招ぎ遷す木の意にて、櫛なるべしと。○沫をか

たまのきゆ たまは玉なり。をかたまの木を隠せり。

一首の意は、吉野川の瀧津瀬に、浮び出ては消ゆる水の沫を、玉が出て又消ゆると、人が見たであらうかとなり。

(評)うかび出づると、消ゆとを掛合せて、沫には消ゆ、玉には浮び出づるの詞を省きたり。

やまがきの木

よみ人あらず

秋は來ぬ今やまがきのきりぎりすよなく鳴かむ風の寒さに

(釋)やまがき 和名鈔に「鹿心柿、柿小而長也、和名夜末加岐」とあり。千秋云ふ、世に、信濃柿

とも、吉野柿ともいふ、材に黒柿といふも、これなりと。○今やまがきの 山柿を隠せり。
一首の意は、秋は早來たワイ、この風の寒さに、籬のきりくすが、今のまに、夜なく鳴く
事であらうかとなり。

(評)風調の優れたる、彫琢技巧の作に似ず。

あふひ かつら

かくばかりあふひの稀になる人をいかゞつらしと思はざるべき

(釋)あふひは葵なり。平安の京になりて、加茂の神事に、この草を用ゐる。かつらは桂なり。こ
れも、加茂の神事に用ゐる桂にて、和名鈔に「楓一名構、和名乎加豆良」とあり。又「桂一名
椴、和名女加豆良」とあり。古事記にも、萬葉集にも、楓をカツラと訓めり。この楓は、今、紅
葉を愛ではやす、楸樹にはあらず。具原篤信いふ、其の葉白楊に似て、兩々相對ふ、加茂祭に
用ふる、かつらは是なりと。西宮抄に、「四月祭時、近以桂爲挿頭」と見ゆ。葵と桂とを合せて、
諸蕪といふとぞ。葵は豎くこともあるによりて、このを一つに、葵鬘の義と思ひ誤るべから
ず。○あふひ 逢ふ日なり。葵を隠せり。○いかがつらし 桂を隠せり。
一首の意は、これ程、逢ひ見る日の稀になる人を、どうしてまあ、つらい事と思はずに居られ
とぞ、辛い事と思ふワイとなり。

人目故のちにあふひのはるけくはわがつらきにや思ひなされむ

(釋)○あふひ、わがつらき、葵と桂とを隠せり。

一首の意は、人を謀る故に、これから後に、若し、逢ふことが間遠うになるならば、その譯は
知らずに、自分がつらい仕打をすることのやうに、思ひ做されうかとなり。

(評)逢ふ日に葵を寄すること、後來の歌に夥し。奈良時代には、たえて無かりしことなり。かの頃
には、阿保比といへりき。

くたに

僧正遍照

散りぬればのちはあくたになる花を思知らずもまごふ蝶かな

(釋)くたに 童蒙抄に、苦丹と書く、澤山にある草なりといひ、榮雅抄には、葛の類といへるは、
源氏物語寄木の卷などに見えたる。くたにと混ぜしならむ。今は、處女の卷に「花橘、撫子、さ
うび、くたに、なごやうの花のくさく」を植ゑて、と見えたる、くたにて、異名分類抄の、
苦膽(龍膽ノ一名、道遠院説)と云へる、又前田夏蔭説の、嘉祐本草に、酸漿一名苦耽とあれば、酸漿な
りと云へる、俱に、韻の假名差へり。膽も耽も、タムなり。タニにあらず。眞淵の續萬葉論に、
木丹の木の音を上略して、くたにと云へるあるべし、字書に、木丹梔子花也とありて、即ち、
くちなしなり。五月花咲きて、殊に、子の黄色にて、糸など染めて、女など翫ぶ物故に、源氏
にも、夏の方に書ける歟、牡丹の類にて、芍薬かともいふ説は、夏物なれば叶へども、芍薬

(四四五)

(四四六)

にくたにの名あること、未だ知らずと論へり。契沖は、苦丹と書きて、牡丹の類と云へり。想ふに、芍薬の根は薬に用ゐ、花は牡丹に似たれば、或は、苦丹の名を負せしか。○あくたに芥になり。苦丹を隠せり。

一首の意は、散つてままへば、後は、芥になる、何の事も無き花なるものを、それを之合點せず、あのやうに迷ふ蝶であることよごあり。

(評)例の色即是空の観想あらむ。歌主の歌風より推すれば、歌の趣は、くたにを隠せるのみならず、其の物のうへをも詠めりと見ゆ。以下の三首も、亦然るが如し。結句、六帖に、まごふけふかなとあり。誤なるべし。

さうび

つらゆき

我はけさうひにぞ見つる花の色をあだなる物といふべかりけり

(釋)さうび、和名抄に、「薔薇、陶隱居注云營實、和名無波良乃美」とあり。さて、薔薇を音にも讀み、又、うばら、むばら、いばらと訓じたり。「高駘が、「一架薔薇滿院香、白居易が、「階底薔薇入夏開の句の趣を案するに、其の枝は長く生ひ延びて、墙などのやうになる物ならむ。この種の薔薇、今もあり。○けさうひに、今朝初になり。うひは初冠などの初にて、始めてなり。さうびを隠せり。

一首の意は、自分は、薔薇の花を今朝初めてサ見たワイ、この花の色は、人のいふ如き面白い

物では無くて、仇なる物ぞ、といふべきであつたワイとなり。

(評)人の愛で翫びて、面白き花と云雖すに對へて、我は仇なる物と、覺悟したりとなり。宜長の、人の、仇なる物と云へるを、今思ひ當れる趣に釋けるは誤れり。想ふに、此の薔薇は、常の野茨にあらねば、漢土より舶來の當坐なにて、いと珍しかりしにやありけむ。

をみなへし

とものり

あら露を玉にぬくこやさ、がにの花にも葉にも糸をみなへし

(釋)○玉にぬくこやさ、玉にして貫くとてかの意。○さ、がに、蜘蛛を云ふ。もと、蜘蛛の枕詞なり。小蟹の義といひ、笹原に住む蟹の意ともいひ、鹿持雅澄は、笹の根は入組みたる物故、笹が根の組むといふを、蜘蛛にいひかけたりと云へり○糸をみなへし、糸を皆綜しにて、綜は延ぶる意、女郎花を隠せり。

一首の意は、白露を玉にして繫くと云うてか、蜘蛛が、この露の置く、女郎花の花にも葉にも、糸を皆引張りたりとなり。

(評)秋部上「秋の野におく白露は玉なれや云々と同想。

朝露をわけそばちつ、花見むと今ぞ野山をみあへありぬる

(四四七)

(釋)〇野山をみなへえりぬる 野山を悉く經知りたりの意、女郎花を隠せり。
一首の意は、女郎花の花を見やうと思つて、朝露を分けて濡れくして、今はサ、野山といふ野
山を、悉く歩行いて知つたワイとなり。

新撰萬葉に、初二句、露草にぬれそほちつ、下句、去らぬ山をみなへしりにさどあり。

朱雀院のをみなへしあはせの時に、をみあへしこいふいつ
もじを、かしらにおきてよめる、 つらゆき

をぐら山みねたちあらしなく鹿のへにけむ秋をゑる人ぞなき

(釋)朱雀院のをみなしあはせ 秋部上に註せり。宇多帝讓位の翌年、朱雀院の御所にて、皇后と澁
はせ給ひしなり。〇をぐら山 秋部下に註せり。

一首の意は、小倉山の峰を立馴して鳴く鹿の、これまで經て來たであらう秋の數を、知る人が
ナ無いワイとなり。

(評)これは折句なり。業平の、かきつばたの五字をおきて、「唐衣きつなれにし云々と、詠めると
同じ。然るに、これは、物名に入れり。思ふに、彼れは、題詠の歌にあらねば、その重き意に
就きて、羈旅に収めたるか。

拾遺集に再出したるは、下句、へにける秋をゑる人のなきどあり。

さちかうのはさ

とものり

あさちかうのはなりにつけり白露のおける草葉も色かはり行く

(釋)さちかう 桔梗の字音あり。和名抄に、「和名阿里乃比布木」とあり。卑しげにもあり、詞も長け
れば、字音にいひからせるにやあらむ。〇あさちかうのはなりにつけり 秋近く野は成りにけり
の意、近うと音便に云へるは、物名の歌なる故にて、止むを得ぬ變例ならむ。桔梗の花を隠せり。
一首の意は、野の景色を見れば、夏も深うなつて、物悲しい秋の時節が、思ひかけす近うなつた
ワイ、そのゑるしには、この野の露の置いてある草の葉も、おひく、色が變つて行くワイとあり。

(評)上句は晩夏、下句は仲秋の頃のさまにて、一致せず。されば、雅嘉は、上句を助けて、秋の物
悲しき頂上の時節の近づきたる意とし、景樹は、下句を助けて、萩の下葉などは、五月の末よ
り色付き黄ばみて散りもすべければ、と云へれど、打任せては、さは聞ゆべくもなし。

ををに

よみ人あらず

ふりはへていざ故里の花見むここしをにほひぞ移ろひにける

(釋)ををに 和名「紫苑一名紫苑、和名能之、俗云之乎通」とあり。今、シランと云ふ。〇こし
をにほひぞ 來しを匂ぞなり。匂は花の色澤を云へり。紫苑を隠せり。

一首の意は、ドレヤ、故里の花を見やうと思つて、わざわざ來たるものを、殘念にも、もう、
花の色澤が變つて去らうたワイとなり。

りうたむのはな

友のり

わが宿の花ふみまどくとりうたむのはあければや此處にしもくる
(釋)りうたむ 和名抄に「龍膽、和名衣夜美久佐、一云迦加奈、味甚苦、故以膽爲名也、」とあり。

今、リンダウと云ふ。眞淵は、唐音の轉かと云へり。○ふみまどく 踏み拉ぐこと。○とりうたむのはなければや 鳥打たむ野は無ければにやあり。龍膽の花を隠せり。

一首の意は、自分の庭の大事の花を踏みにじる、あの鳥を打たうワイ、あれは、住む野が無い
かして、どかく此處にサ来る、迷惑などなり。

(評)丸子を飛ばして小鳥を弾つこと、唐代の詩にまばく見ゆ。こゝも、其の趣ならむ。杖などに
て打たむとするにはあらず。

二句、六帖、友則集に、ふみちらす、結句、友則集に、こゝにしも鳴くとあり。
をばな よみ人あらず

ありと見て頼むぞ難きうつせみの世をばなしとや思ひなしてむ

(釋)をばな 尾花なり。薄の穂に出でたるが、獸の尾に似たればとぞ。眞淵が、女郎花に對へて、
男花といへるならむとて、万葉集廿に「秋野には今こそ行かめもの、ふのをどをみかの花の
匂ひ見に」の歌を引けるは、いかゞ。をどをみかは、花の名にあらず。たゞ、男女を花に譬
喩したるなり。或は、麻花なりともいへり。その狀、一穂の葶の亂れたるに似たればならむ。
○うつせみの 世といはむ枕詞。○世をばなし 尾花を隠せり。

一首の意は、すべて、物は有りと思つても、はかなくて、頼みには成難いワイ、この世の中を
ば、いつそ無いものと、了簡を着けて見やうかとあり。

(評)例の一切空の無常法門なり。

けにぞし

やたべの名實

うちつけにこしとや花の色を見むおく白露の染むるばかりを

(釋)けにぞし 和名抄に「牽牛子、和名阿佐加保、」とあり。今の朝顔あり。但、漢土にては、花を
牽牛花といひ、實を藥用にする時、牽牛子と呼べり。牛の字音便にて、午の音と一つになれる
ならむ。○うちつけにこし 打付けに濃しあり。打付けは唐突の意、牽牛子を隠せり。

一首の意は、牽牛子の花を見て、誰れもさし當りては、濃い色ぞと見やうを、何あれは、本來、
置く露が染めたるまでの、はかない事であるものをサとなり。

(評)牽牛花をよめり。

二條の後の、春宮のみやすむ所と申しける時に、めぐにけつ

り花させりけるを、よませたまひける、 文屋 康 秀

花の木にあらざらめどもさきにけりふりにしこのみなる時もが
(釋)二條の後云々 二條后、并に、東宮の御息所の事は、春部上に註せり。めぐにけつり花のめぐ

(四五二)

は、蓍と馬道との二説あり。蓍にも、或は、蓍萩ならむ、或は、玉簪俗に簪草と呼べる物ならむと云へり。いづれも、其莖に削花をさして造れる由あり。又、馬道は、和名鈔に「俗音 馬多宇、向堂之道、」とありて、殿中の真中の板敷をいへり。そこに、削花をさしたりとなり。削花は木を削り掛けたる造花なり。延喜式に「金銅花瓶二口、菊削花二枚」と見え、其の他のをも考へ合するに、佛事に多く用ゐたる事と覺し。こは削り木と同じ物にて、蜻蛉日記に「紙屋紙に書かせて、立文にて、削り木に附けたり、」とあり。この文は、源高明公の北の方の、尼になるを吊はむとて贈れるなれば、猶、佛事に縁ある物の証とすべし。又思ふに、馬道の説諸ヶ難か。後世、削り掛けといふ物を門にさせど、そは粥杖の移りたるにて、別あり。況や、歌も、花のなき木に花の咲ける由をいひたれば、蓍に削花さしたる物なる事決し。○あらざらめども、蓍を隠せり。○このみ、此身に木の實をかけたなり。

一首の意は、蓍に附けたる削花を見れば、花の咲く木でも無からうけれども、花が意外に咲いたワイ、されば、年古りたる木にも、實の結る時もあるつてほしい、即ち、年寄りましたる私の此の身も、何卒、成り出づる時節もあつて欲しいと存じますとなり。

(評)上句は、俗に、煎豆に花が咲くと云へると同想にて、春部上の「春の日の光にあたる云々と、同一の情願なり。歌も同調。

あ の ぶ ぐ さ

さ の と し さ だ

山高みつねにあらしのふくさは句ひもあへず花ぞちりける

物

名

(釋)あ の ぶ ぐ さ 和名鈔若類の中に「垣衣一名烏莖、和名之乃布久佐、」とあり。軒窓ごもいひ、蓍或は舊樹の皮、枝間等に生じて垂る。土石の間にもあり。葉は一根に叢生して、背に互對せる金星あり。今、軒端に釣りなごする、葱とは別なり。○あらしのふくさは、忍草を隠せり。

一首の意は、近くの山が高く、常々嵐の吹く里は、花がサ、咲匂うて居る間もなく、散つたワイとなり。

二句、六帖に、峰にあらしのとあり。

や ま し

平 あ つ ゆ き

郭公峰の雲にやまじりにしありとは聞けど見るよしもなき

(釋)や ま し 山にある羊蹄菜か。和名鈔に「葦和名之布久佐、一云之、羊蹄菜也、」とあり。同抄に、

又、知母をヤマシと訓めり。○雲にやまじりにし 山羊蹄を隠せり。

一首の意は、郭公は、峯の雲の中に、飛んで混つてまきまかしたらぬ、鳴聲によりて、居ることは聞くけれども、形は見るやうも無いとなり。

か ら は き

よ み 人 ち ら ず

うつせみのからはきごこにこゝむれご魂の行方を見ぬぞ悲しき

(釋)か ら は き 萩花集説に、草萩に對したる木萩の名とせり。思ふに、幹萩の義ならむ。眞淵が、

(四五三)

一種枝の細く、花の色深きを、唐撫子の類にて、唐萩と呼べる歟といへるは、據なし。又、千秋が、からをぎの誤として、清暑堂の御神樂の時に、人長の持つ枯萩ならむかといへるは、妄なり。歌の詞も調はざるをや。○うつせみ 空蟬なり。現し身の意をかけたなり。○からはきごさに 骸は木毎に棺毎をかけたなり。棺は古く、キこいへり。幹萩を隠せり。
一首の意は、蟬の蛻殻は、木毎に留めてあれども、その身は何處にか飛んで、往き方が知れぬ、其の如く、人間も死ぬれば、骸は棺毎に留めてあれども、魂ひの行方の見えぬがサ、悲しソいとなり。

かはなぐさ

ふかやぶ

うばたまの夢に何かはあぐさまむうつにだにも飽かぬ心を

(釋)かはなぐさ 和名鈔水菜類に「水苔一名河苔、和名加波奈」とあり。これは河藻なり。景樹は、既に、川菜といへるに、草の字を添へむこといかゞ、甘菜草、水菜草といふ事なし、と云へり。○うばたまの 夢といはむ枕詞。うばたまは、奈良の頃はぬばたまといへり。和名鈔に「射干一名烏扇、和名加良須安布木」とある、烏扇の實にて、其の色黒し。野にある物故、野眞玉の義あらむとも、野羽玉の義あらむともいへど、定かならず。色黒き物故に、黒と續け、轉りて、夜と續け、更に轉りて、夢と續けたなり。○何かはなぐさまむ 川菜草を隠せり。一首の意は、戀しい人を夢に見たりとて、何で、心が慰まうぞ、慰むことでは無い、現在見て

さへも、まだ飽き足らぬやうに思ふ、心であるものをサとなり。

さがりこけ

たかむこのとしはる

花の色はたゞ一さかりこけれどもかへすくぞ露は染めける

(釋)さがりこけ 蕨の種類にて、枝の末は青白き毛の如し。深山の古木などに這ひかへりて垂る。和名鈔に「羅、比加介、女羅也」とある、これなり。○一さかりこけれども さがり苦を隠せり。一首の意は、花の色は、ホンノ、一盛りだけ濃いけれども、これまでに、染め返しく、何遍も、露がサ染めたワイとなり。

にがたけ

あげはる

命とて露をたのむにかたければ物わびしらに鳴く野への虫

(釋)にがたけ 苦茸か。眞淵は、和名鈔に「長間箏、箏青最晩生、味大苦也」とある物なるべし。今は女竹とも、まのめ竹ともいふなりといへり。されども、この前後、苔、蕨などの間に序でたれば、茸とする方宜しくや。次のも、皮茸を隠せり。○わびしらに 佗しの語に、形容の意味のらの尾辞を添へたる副詞。

一首の意は、わが命として、露を頼みにしても、はかなく、頼みになり難い故に、何やら、難儀さうに鳴く、野邊の虫であることよとなり。

(評)結句、この頃に珍しき語調なり。

(四五六)

かはたけ

かげのりの王

さよふけてなかはたけ行く久方の月ふきかへせ秋のやま風

(釋)かはたけ 皮葺あり。今、こま葺と轉じて呼ぶ。眞淵は、和名鈔に「苦竹、加波多計、本朝式用」河竹二字」とあるに據りて、苦竹としたり。○なかはたけ行く 皮葺を隠せり。

一首の意は、夜が更けて、もう、空の半分はとも開けて行くあの月を、もとの東の方へ吹戻してくれい、秋の山風よとなり。

(評)月吹返せの狂想、面白し。體格豪宕にして雄渾なるも、おのづから、万葉調と殊なる處ありて、新古今時代の豪傑等が希ひし、風調の祖をなせり。

わらび

眞せい法師

けぶり立ちもゆとも見ぬぬ草の葉をたれかわらびさ名づけそめけむ

(釋)わらび 蕨なり。○たれかわらび 蕨火なり。蕨を隠せり。

一首の意は、蕨を焚く火ならば、烟が立つて燃ゆる筈なるに、烟が立つて燃ゆるとも見えぬ、草の葉なるものを、誰れが、わらびと云ふ名を、附け初めたのであらうかとなり。

(評)契沖は、物名の詠みさまにあらず、この部に入るべきならずといへり。上に、折句の歌をも收

めたる程あれば、大やうに見るべし。

さゝまつ びは ばせをば

紀のめのと

いさゝめに時まつまにぞひはへぬる心ばせをば人に見えつゝ

(釋)さゝは、和名鈔に「篠、和名之乃、一云佐々、俗用ニ小竹二字、細々竹也」とあり。まつは松、びはは枇杷なり。ばせをばは、和名鈔に「芭蕉、和名發勢乎波」とあり。蕭韻の字は、ヲの假名に櫻かし用ゐたる例、數多あり。○いさゝめに 假初にの意、篠を隠せり。○時まつ 松を隠せり。○ひは 日はなり。枇杷を隠せり。○心ばせをば 心ばせは意思あり。芭蕉を隠せり。一首の意は、つい逢ふ時を待つ間に、ひとく日數は経つたワイ、逢ひ度しといふ心持をば、先の人に、とくと見られくしてサとなり。

(評)覺束なく思ひて、日を経ぬる間に、度々、我より音信れなごまたるを云へるなるべし。

なし なつめ くるみ

兵衛

あちぎなし歎きなつめそうき事にあひくるみをば捨てぬ物から

(釋)なしは梨、ちつめは棗、くるみは胡桃なり。○あちぎなし 無益なり。味氣無し義ぞ。梨を隠せり。○歎きなつめら 嘆き詰むる勿の意、棗を隠せり。○あひくるみ 遭ひ来る身なり。

胡桃を隠せり。

(四五七)

一首の心は、あゝ無益の事よ、そのやうに、一箇に嘆くなよ、いろ／＼さま／＼の憂い事に遭うて来る、おのが身を捨てもせず居ながらサとなり。

(四五八)

(評)契沖云ふ、三代實録に、「仁和三年二月信濃國例貢、梨子、大棗、吳桃子、雉腊、別貢云々」これをもて思ふに、此の貢物をもて來たる時、これ詠めど、仰言などのありて、詠めるにやまいへり。

からこささいふ所にて春の立ちける日よめる

安倍清行朝臣

浪の音けさからこさに聞ゆるははるのあらべや改まるらむ

(釋)からこさ 備前國韓琴の浦なるべし。○けさからこさに 今朝より殊になり。韓琴を隠せり。一首の意は、波の音が、立春の今朝から變つて、長閑に聞ゆるは、この唐琴の浦の調子も、春の調子に改まるのであらうかとなり。

(評)樂家の説に、春は双調、夏は黄鐘、土用は一越、秋は平調、冬は盤涉調なりとぞ。されば、春の調子の改まるといへり。地名のからこさを、樂器の韓琴に取倣して、浦の立春の景氣を歌へり。韓琴は新羅琴をいへるか。又、日本琴に對して、舶來せる箏などの類を、すべて云へるか。

いかゞささ

かねみのおほさき

かぢにあたる浪の雫を春あればいかゞささ散る花こ見ざらむ

(釋)いかゞささ 蜻蛉日記に、「石山に参りて、舟にて歸るとて、いかゞ崎、山吹の崎などいふ所を、芦の中より漕ぎ行く」とあり。これに據れば、近江の打出の濱より、勢田、田上あたりまでの内に、ありしあるべし。枕草子にも、「崎は辛崎、いかゞ崎」とあり。○かぢ 舟を遣るべき棹、梶、棹、すべて、古くは、かぢといひき。○いかゞささ 散る 如何が咲散るなり。いかゞ崎を隠せり。

一首の意は、舟の楫に當つて散る波の雫を、今は春なれば、何で散る花と見なからうぞ、散る花とは、たしかに見るとあり。

(評)咲散るの咲きは、熟語として、軽く添へるまであり。口氣、人に答へたるもの、如し。返歌ならむ。下の二首、これも、題に就きて、水邊の光景を詠めり。

からささ

あほのつねみ

かのかたにいつからささに渡りけむ浪路は跡も残らざりけり

(釋)からささ 近江國滋賀郡にあり。○かのかた 彼の方と、彼の瀉との兩説あり。○いつからささに 何時より先になり。辛崎を隠せり。

一首の意は、あの先の方の辛崎に舟があるが、何時からあのやうに、自分より前に渡つたのであらう、渡れば跡のある筈なるに、波の路には、これといふ、渡つた跡も残らずにあつたワイ

(四五九)

となり。

○

伊

勢

(四六〇)

波のはなおきからさきて散りくめり水の春とは風やなるらむ

(釋) ○おきからさきて 沖より咲きてなり。これも、辛崎を隠せり。

一首の意は、波の寄するが花と見ゆるが、この波の花は、沖から咲きて、磯へさして散つて來ると見えたワイ、水の春には風がなつて、このやうに、波の花を咲かせたり、散らせたりするのであらうかとなり。

(評) 四時の變化なき水を捉へて、春をいひ秋をいふ。この種の着想、奈良時代には、いまだ發達せ

ざりき。秋部下、是則が、

もみち葉の流れざりせば立田川水の秋をばたれか知らまし。

と詠めるなど、共に、後世の尖巧派の基を開けり。

かみやがは

つらゆき

うば玉のわが黒かみやかはるらむかゞみのかげにふれる白雪

(釋) かみやがは 山城國の北野と、平野との間を流る川にて、古へ、紙漉き場のありしところ、拾芥抄に「紙屋院、圖書別所、在野宮東云々、圖書寮は書寫を司る故に、紙漉く所をも兼管

したるなり。○うば玉の わがを隔て、黒へかゝる枕詞。○黒かみやかはるらむ 紙屋川を隠せり。

一首の意は、これは、自分の黒髪が、白髪に變つたのであらうか、自分が對ひ見る、この鏡へ映つた影に、眞白に降つて居る雪を見ればサとなり。

(評) 李白が「不知明鏡裏、何處得秋霜」と、その興味を同じくし、張九齡が「誰知明鏡裏、形影自相憐」と、その感慨をひとしくせり。三句、かほりぬらむと、過去にいはでは、時の打合いかゝと傾かる。拾遺集に、二三の句を、わが黒髪に年暮れてと直したるは、こゝに見るところありしにや。

拾遺集に再出したるは、詞書をも「師走の晦日がたに、年の老いぬることを歎きて、」と直したるは、非あり。この集撰者の頃の貫之は、未だ、鏡裏を白丁する程の年配にあらず。題詠と知るべし。

よごがは

あしひきの山べにをれば白雲のいかにせよとかはる、時なき

(釋) よごがは 山城の淀川なり。○いかにせよとかはる、淀川を隠せり。

一首の意は、山邊に住み居れば、只さへ氣のふさぐものを、どうせよといふ事か、白雲がかゝつて、晴るゝ時が無いワイとなり。

(四六一)

(評)いかにせよとかの辭様、既に、万葉集にその例を見る。

(四六三)

かたの

たゞみね

夏草のうへは茂れる沼水の行くかたのあきわがこゝろかな

(釋)かたの 河内交野郡の交野なり。○沼水の 沼水の如くの意。○行くかたのなさわが心 心の行くは、心の満足すること、交野を隠せり。

一首の意は、夏草が、うへには一面に茂つて居る沼の水の、流れて行くところの無いやうに、行きやうの無い、自分の心であることとなり。

(評)沼池などの水は、滯留して流れざるを本としたる序歌なり、初二句は、たゞ、沼水の修飾にて、うへは夏草の茂れるといふべきを倒装したり。さてこれを、わが身の、世に埋れて人に知られぬに引當てたる、譬喩と見るべからず。又、かなの助辭の打合をおもふに、行く方もあるが妥當なるべし。果然、六帖には、もとあり。交野の物名に拘はりて、枉げたるならむ。

かつらのみや

源ほごこす

あきくれご月のかつらのみやはなる光を花と散らすばかりを

(釋)かつらのみや 今昔物語に「五條西洞院に、桂の宮と申す人おはします。其の前に大なる桂の木ある故に、名づけまゐらせたるなり。云々。」とある、これなるべし。○月のかつらのみやは

なる 實やは結るの意、月の桂のことは、秋部上に釋けり、桂の宮を隠せり。○花と散らすばかりを 花とは、花の如く、花としてなどの意。をは嘆辭。

一首の意は、すべての草木は、秋は實る物なるが、秋が來たりとて、月の中の桂の實が結るか、いや結りはせぬ、たゞ、常よりさやかに、月の光を、花のやうに散らすばかりの事となり。

(評)月華といひ、桂花の乱れ、桂葉の翻るといへるは、漢詩に多く散見せり。たゞ、この新案は、桂の實に思ひ到れるにあり。

百和香

よみ人あらず

花毎にあかず散らし、風なればいくそばくわがうしこかは思ふ

(釋)百和香 和名鈔に「神傳云、淮南王張錦繡之帳、婦百和香、漢武內傳云、武帝好長生之術、求道、七月七日帝宮掖之内、設座殿上、紫羅席、庭、燭百和香、云々。」とあり。契沖は、五月五日に百草を取りて合はする香なりといへり。○いくそばくわがうし 幾何我が憂しなり。百和香を隠せり。

一首の意は、花といふ花をば、皆残り多に、散らしたる風であるから、どれ程、自分が、あの風奴の仕打を、憂いと思つたる事か、並大抵に、憂いと思つたる事では無いとなり。

すみながし

あげはる

春がすみなしかよひぢなかりせば秋くる雁は歸らざらまし

(四六三)

(四六四)

(釋) すみながし 墨流しなり。墨汁を水の上に流して、乱れたる状を、紙に寫し取りたる物、今もある物なり。○春がすみなかし 春霞中しなり。しは強辭。墨流しを隠せり。

一首の意は、春霞の一面に立ち塞つてある中にサ、通ひ路が無いものであつたならば、何時も秋來る雁は、この春に歸らなからうものを、霞の中に路があるかして、雁が歸つて行くが、残念なりとなり。

(評) 秋くるを春霞に對へたり。秋こし雁といふべきを、秋くると現在にいへるは、調をいたはれるなり、といへる説もあれど、いかゞ。秋くるは、何時も秋には來るより、形容に置ける詞にして、過去の實事を云へるにはあらず。霞の通路は、白雲の道、雲路、空の通路など、同じ着想なり。なかしの一語、贅瘤なれど、物名なればいかゞはせむ。

おき火

みやこのよしか

流れいつるかただに見えぬ涙川 おきひむ時や底はあられむ

(釋) おき火 和名鈔に「熾、於岐比、猛火也」とあり。おこり火の意なるべし。○涙川 涙を比喻したるにて、川の名にはあらず。○おきひむ 沖干むなり。熾火を隠せり。

一首の意は、流出す方角さへ見えぬ涙川なれば、底の深さも猶更知れぬが、沖の深みまで、水の干やうとする時があつたらば、底の深さも知られうかとなり。

(評) 景樹が、愁思の竭きむ時、自然、涙も盡きて流れざらむの意を、河になしていへるなりと、説

けるか如し。

ちまさ

大江千里

のちまさのおくれておふる苗なれど仇にはならぬたのみとぞ聞く

(釋) ちまさ 和名鈔に「糶亦作糶、和名知萬木、以三菰葉裹米、以灰汁煮之、令爛熟也、五月五日啖之」とあり。漢土の例に倣ひてせし事なり。○のちまさ 後蒔なり。粽を隠せり。○たのみ 田の實に頼みをかけたり。田の實は、實れる稻をいふ。

一首の意は、遅蒔の種にて、外のよりは後れて生える苗であるけれども、萬更、むだにもならず、秋はやはり實つて、頼みある田の稻であること、聞くワイとなり。

(評) 諷諭なり。晩年よりの學問なれども、あながち、遅蒔とて放棄すべきにあらずと、希望に光明ある由を述べたり。或は、出世などの、人に後れたる身なれども、末には頼みあれば、落膽すべきにあらずの意を、比喩したりともいはるべし。作者の人柄よりいへば、いづれにても通用すべし。

はをはじめ、るをはてにて、ながめをかけて、時の歌よめと、人のいひければよめる、僧正聖寶

はなのなかめにあくやとて分行けば心ぞ共に散りぬへらなる

(四六五)

(四六六)

(釋)はをはじめ云々 はの字と、るの字と、歌の終始に置き、ながめの三字をいひかけて、さて、當季の歌を詠めとなり。ながめは長雨の約。○はなのなかめにわくや 長雨を隠せり。

一首の意は、花の咲ける中を、目に見飽くかと思つて、分けて行けば、花に目が移つて、自分の心がサ、花と一所に、あちこちと散つて行きさうな、心持がするとなり。

(評)春の霖雨のつれづれに、眞言秘密の大和上を弄びて、難題をいひかけたものと覺し。和尚、生憎に、この雕技あり。綺語罪過を犯し、文字魔を作す。

この部の歌は、まひて、精評を加へず。そは、作者の目的の、彼れにあらすして、是れにあるを思へばあり。必ず、歌として論せば、その本意に背くこと、多からまし。

古今和歌集第十一

戀歌一

題あらず

よみ人あらず

ほこぎすなくやさ月のあやめ草あやめもあらぬ戀もする哉

(釋)戀歌 男女間の戀愛を歌へるを、この部に收む。万葉集には、男女親子兄弟朋友の思ふをも、

一つに收めて、相聞の部を立てたり。この集に、始めて、殊に、戀部を立て、後來の勅選

集の爲に、先例を開きたり、○なくや やは間投の嘆辭。○あやめ草 菖蒲なり。花を賞する

物とは別なり。○あやめも知らぬ 俗にいふ、途方に暮るゝ意なり。あやめは衣の文目より起

りて、何事にも、分別なきを、あやめなしとも、あやめを知らぬともいふ。

一首の意は、郭公の鳴くまゝ、五月のあやめ草の名の、あやめ目も分らぬ、途方に暮れたる戀

をまわ、自分はそのことよとなり。

(評)戀は情の火なり。その燃ゆるや、多く、一時的の性質を帯び、その熾なるや、實に、一三昧な

り。あやめも知らぬ戀にして、始めて、人を戀すといふべきなり。三句までは、万葉集十八家

持の歌に、

(四六七)

郭公きなく五月の、あやめ草蓬かつらき、云々、
とあるを、序詞に轉用して、あやめもの語を喚び起せり。この同音の反覆、既に、諧調たるうへに、全首語々圓健にして、氣勢流活の妙あり。戀もするかなの結句、集中數多見ゆ。この口氣、我れと我が行爲を怪訝して、語はぬ趣あり。是れ、智力と感情との衝突を意味するものにして、その如何に、煩々悶々たるかを表彰す。この感觸をつよく發展し、深く、透入せしめむが爲に、概ね、上句を序さまたるが如し。この種の叙法は、既に、奈良朝歌人の發明たりし所にして、万葉集、

高くらの三笠の山になく鳥の止めば繼がる、戀もするかも (卷三、赤人)

女郎花さきさはおふる花かつみかつても知らぬ戀もする鴨 (卷四、中臣女郎)

かは鳥の間なくえばなく春の野の草根のまげき戀もするかも (卷十)

言にいでて云はゆゆしみ朝顔のほには開き出す戀もする鴨 (卷十一)

この山の峰に近しとわが見つる月の空なる戀もするかも (同)

君がさる三笠の山邊居る雲の立ちては繼げる戀もするかも (同)

庭淨みおき邊漕出づる海士舟の執る梶間なき戀もするかも (同)

の類、皆、同型の先規なり。平安朝歌人は、遂に、奈良朝歌人の窩套を渾脱すること能はざるか。

素性法師

音にのみさくの白露よるはおきて晝は思ひにあへずけぬべし

(釋) ○音にのみさく 噂にのみ聞くに菊をかけたなり。 ○よるはおきて 置きてに起きてをかけたなり。 ○思ひ 日を寄せたり。 ○けぬ けは消えの約。

一首の意は、風聞にばかり聞いて、未だ見たる事も無き人 pensando、夜は寐られねば、聞くといふ名のある菊に、白露の置くといふと同じく、起きて居て思ひ明し、さて、晝になれば、又、日影にその露のえ堪へずに消ゆるやうに、戀じさにえ堪へずに、この命が消えてままひさうちワイとなり。

(評) 寐るべき夜は、終宵、懊殺せられて、漏刻の遲きを怨み、起き居るべき晝は、終日、愁絶せられて、普騰として相思病を成す。この意を後に、大中臣能宣は、

御垣守衛士のたく火のよるはもえひるは消えつゝ物をこそ思へ

と再演したり。晝夜の對照は、夙く、奈良時代にいひあらしたる言にて、

晝はもうらさび暮し、よるはも思づき明し、

の類、枚擧に遑あらず。細心巧筆は、時に、可あらざるにあらねども、譬喩、餘に、粘密に過ぎて、弄語の巧は、却りて、人をして厭惡の感を起さしむる嫌あり。

結句、六帖に、たへず消ぬべし、新撰和歌に、けぬべきものをとあり。

紀貫之

よし野がは岩波たゝく行く水のはやくぞ人をおもひそめてし

(四七〇)

(釋)〇岩波 岩に激する波をいふ。平安時代の新熟語とおぼし。〇行く水の 行水の如くの意。一首の意は、吉野川の岩根に、波が高う立つて流れて行く水は、早いことであるが、その早いといふ如くに、疾くの昔に、人を思ひ初めて居つたワイとあり。

(評)三句までは序なり。想ふに、其の人の許に詠みて贈れる歌ならむ。長き年月を思ひ包みて、遂に、包みあへずなれる、戀の奴が、慇懃の意を通じて、情の露の一年の、かゝらむことを待つらむが、哀なり。一氣轉折、風韻高し。以下、人といふ語、對手の意中人を指せること多かり。

藤原勝臣

白浪のあこなきかたに行く舟も風ぞたよりの志るべなりける

(釋)一首の意は、白浪のうへの、道の跡も無い方へ行く舟でさへも、思ふ方へ行くには、風といふ物がサ、便りの手引であつたワイとなり。

(評)三句のもの助辭、強き意義に用ゐられたる事、意釋の如し。さて、わが戀ふ人に、便りの志るべたるべき風、乃ち、良媒の無き事を、啣ち怨めるあり。諷諭の運意深山にして、幽婉の味ひに富み、唱歎に値するものあり。

在原元方

おとは山おとに聞きつゝあふ坂の關のこなたに年をふるかな

(釋)〇おとは山 山城の京の清水寺のある音羽山にて、逢坂の關の西南につゞきたる山科にあり。旁ら、下の、音といふ同音の語を喚ひ起せる序なり。

一首の意は、音羽山の名の音といふやうに、其の人の事を音に聞きつゝしては居ながら、逢坂には關がある爲、其の關の名のやうに、逢ふ事もせず、越えられぬ關の此方で、年月を経ることよとなり。

(評)早く、逢坂の關を越えたり、即ち、思ふ人に逢ひたしの餘意あり。躬恒の歌に、

春雨に君をやりてば逢坂の關のこなたに戀ひや渡らむ

同様の譬喩なり。只これは、序の音羽山を取合せて、地理的に、關のこなたを利かせたるが、巧中に巧を求むる、作者の慣手なり。六帖には、作者を貫之とせり。

○
たちかへりあはれとぞ思ふよそにても人に心をおきつゝあら浪

(釋)〇あはれ 哀の意に用ゐたり。この歌にては、面白しの義によるべからず。〇心をおきつゝあら浪 心をおくに沖つ白浪をかけたなり。

一首の意は、思ふ人に言寄る仕方が無さに、このやうに、餘所に離れて居てまあ、かの人の上に心を掛けて置くので、うの置くいふ沖の白浪の、跡からく打掛けくするやうに、立返り思へば、哀に悲しいとぞ思ふとあり。

(四七一)

(評)剪裁彫琢は、時に喜ぶべしと雖も、久しうすれば、人をして嫌厭の情を生せしむ。乃祖業平朝臣の見ば、いかに、この凡骨を悲しむらむよ。この歌は、只、心を沖つ白浪といひ捨てたる語調に、嗟歎の味ひあるを、可とするのみ。

(四七二)

つらゆき

世の中はかくこそありけれふく風の目に見ぬ人も戀しかりけり

(釋)○ふく風の 風如くの意にて、目に見ぬといはむ序あり。○目に見ぬ 風の方よりは、目に見えぬといふべきを、重き意の方に就きて、通はせて、見ぬといへり。

一首の意は、世の中は、皆斯うしたる、タワイもない物であつたワイ、吹く風の目に見えぬやうに、まだ一目見た事も無い人さへも、このやうに戀しうあつたワイとなり。

(評)我ごわが戀のわやしきを冷笑せり。蓋し、煩悶の餘に出でたるもの。三句を、契沖、眞淵等の、吹く風の音にのみ聞きて、まだ見ぬ人を戀ふるといへるは、過ぎたり。只、目に見ぬといはむ序のみ。夙く、万葉集に「ふく風の見えぬが如く」と所々に詠めるがあれば、昔よりいひなれたる詞なるが如し。坤雅に「人不見風」など云へり。和漢想を同じうするものか。

右近のうまばのひをりの日むかひに立てたりける車の下
すだれより女の顔のほのかに見えければ、よみてつかはし

ける。

在原業平朝臣

見ずもあらず見もせぬ人の戀しくばあやあくけふや詠め暮さむ

(釋)右近のうまば云々 袖中抄に、右近の馬場は、一條より大宮の方をいふ、それより東の方は、

左近の馬場なりとあり。拾芥抄には、一條京極の末とあり。ひをりの日は、古來の集詠なり。

袖中抄には、引折の日の意として、五月三日左近の荒手詰、四日右近の荒手詰、五日左近の眞手詰、六日右近の眞手詰にして、この六日の右近の眞手詰の日は、紅の下の袴、織物の指貫に、括りをあげずして、そばを挟みて、裾の尾を膝より前さまに引たをりて、前に決めり、され

ば、この眞手詰の日を、ひをり日といふことあり。眞、宣長は、五月の五六日、武徳殿に幸して騎射をみそきはし給ふ御定なれば、右近の馬場に騎射ある事は、他日なる事明けしと難じたり。されど、世々に、その式行はれしことの、史に載せられたるが、いと稀なるをもて思へ

ば、その日、内裡にて式行はれざる時は、左右の近衛の馬場にて、代に行はるゝ例あるべく、今昔物語にも、「右近の馬場に、五月六日弓行はれけるに云々」とあり。ひをりを、眞淵は、引

柵又は、標柵の意あらむといひ、近藤芳樹は、褻の衣は萎えばみ、晴の衣はこはく折目正し、このこはきを引折といふ、台記は、皇后御請經結願の件に「右大将衣冠出紅引折」春日詣の件に「着引折」などある、やがて、晴の衣あり、されば、衣の地厚くて、引折るやうに強き義よりつけたる名にて、また、如木と云へりといひ、伴信友は、右近のうまばの日と讀み切りて、

(四七三)

(四七四)

柵の日向ひに立てたりける車と、解したり。車の下すだれば、西宮記に「婦人之車傍也」とありて、車簾の下に、帷幕の如くして掛けたる物なり。

一首の意は、一向に見ぬにもあらず、又たしかに見たるにもあらぬ人が、心にかゝるが、このやうに戀しく思ふからは、何の詮もなく、今日は一日、辛氣に思うて暮さうことかどあり。

(評) されば、其の人と、定かに知らまほしき心を惻察せられて、名告り聞かせ給への餘意あり。伊勢物語にも、今昔物語にも、「中將なりける男」とありて、作者が、近衛司にて、右近の馬場に行向へる由を云へり。物見車の出衣、翻れ出でたる袖口ごもの艶なるには、天が下の好き者と聞えたる渠れ、いかで、心ごきめさせざるべき。まして、下すだれより、夕月のはの見えけむをや。公用も何も、あつたものにあらず。

かへし

よみ人あらず

よるあらぬ何かあやなくわきていはむ思のみこそあるべなりけれ

(釋) ○わきて 分けての古言。

一首の意は、見知るの見知らぬのと、詮も無いことを差別を立て、何でいはうぞ、言はずともことのである、戀といふものは、たゞ一筋の思ばかりがサ、其の成就する手引であつたツイとなり。

(評) 只深く思ひ給へ、さま給はば、その思こそ、案内者となりて、逢ふやうにはなるべけれの意なり。

れば、女にも、その心ありげに見えたり。果して、伊勢物語には「後には誰れど知りにけり」と書けり。兩點の深心眷戀を含める、當座の状況、顧ふに、艶たるものありしるべし。贈歌の主意は、下句にあるを、これは、初二の句を捉へて、見る見ぬに拘はれるは、淺はかなる心のやうにもどきたり。人を射るに、先づ、馬を射る筆法は、返歌の秘訣なり。

かすが野のまつりにまかれりける時に、物見にいでたりける女のもとに、家をたづねてつかはしける、

みふのたゞみね

春日野の雪間をわけておひ出くる草のはつかに見えし君はも

(釋) かすが野のまつり云々 一本、春日の祭とありて、野の字無し。春日の祭は、大和國の春日神社の祭祀なり。延喜式に、「春二月、冬十二月、井上申日祭之」とあり。貞觀の頃に、朝廷の式祭に加へられしもの、如し。物見は今の見物なり。○おひ出くる 生ひ出で来るなり。○草のはつかに 草の如くはつかにの意。はつかは僅かの古言。○はも 嘆辭。

一首の意は、この春日野の雪の消え間を分けて、生えて出て来る草の、チラリと見ゆるやうに、今日一寸、姿の見えたるお方の、戀しい事はまあとなり。

(評) 頃は二月の祭と見ゆ。作者は、藤氏のある公卿の隨身などにて、出立てるか。春日野雪消の澤

(四七五)

のあたり、萌出でし草の、未だ短くて」はつかある眼前の光景を、序の材料として、祭の行粧見物の衣被ぎの女に詠みて贈れるなり。その家を探ねて贈れるに至りては、熱心の程驚くに堪へたり。女は奈良の里人ならむ。作者は右衛門の府生風情の男、先づ、程々の懸想といふべし。景樹が、物見を物見車なるべく思ひとりたるは、いかゞ。詞書のやうは、さる物々しさきは人の、立舞ひたる趣にあらず。事實の上にも、慥はざる事あり。萬葉集十一、初瀬川早み早瀬をむすびあげて飽かずや妹とこひし君はも

の風體をまねび得たるもの。

結句、六帖に、君かもとあり。詠嘆の餘味に乏し。

人の花摘あけるところにまかりて、そこな^{差取也}けりる人のもこに、のちによみてつかはしける、つらゆき

評 山櫻かすみの間よりほのかにも見てし人こそこひしかりけれ

釋 花摘 春部下に釋けり。詞書のやうは、評語を見合せて、心得べし。

一首の意は、山の櫻を霞の間から見るやうに、餘所ながら、ほのかに見た事であつた人が、戀しうあつたツ、とあり。

評 或人の、佛の供華の料にとて、木の花など摘み合へる所に、さるべき筋ありて、作者の行向へるに、殊更に、羞澁の嬌態を作して、木の蔭物の隈に這ひ隠たりけむ女の許に、後に、この歌を

贈りて、挿掬せしにやあらむ。見てし人、この強き語調、この意を扶けて、いよ／＼面白し。山櫻霞の間よりは、その花摘しける野の光景なるを、捉へて、譬喩の材料としたり。想ふに、その人、花の如き艶なる人なりけむ。

下句、家集に、見しばかりにや戀しかるらむとあり。

題 志らず

も ごと か た

たよりにもあらぬ思のあやしきは心を人につくるなりけり

釋 花より 消息や小包やうの物を配達する、飛脚をいふ。もと、人の往來の便りに言傳てしより

出でたる名。○つくる 送附の意。

一首の意は、便りをする者こそ、物を人の許に届け附くるが、便りをする者でも無いこの思が、不思議なる事は、自分の心を、かの人の許に、届け附くるのであつたワイとあり。

評 始めて、人に思ひ着きたる時の作るべし。如何なる便が、この心を人の許に持行きけむと見れば、豈に料らむや、わがこの思なりけり。怪しとも怪しかし。元來、思と心とは、體用の差ありあれ、一つ物なるを、姑く、名の二つに別れたるまゝに、別物に巧み做したること、雜部に、身をすてゝいにやまにけむ思ふより外ある物は心寄りけり

と詠めると同じ。戀歌は幽婉を尙ふことはあれども、かかる繊細の構想は、感哀に乏しく、氣味索く。

後撰集に再出したるは、詞書に「はつかに人を見て遣はしけるとありて、作者は貫之なり。後撰の頃、風く、元方の名の脱ちたる本どもありて、上の歌に列ねて、貫之の作と思ひしより、姑く、異説を存する爲に、貫之の名にて、再撰せしならむか。詞書は、前後の歌、皆、はつかに見聞したる戀を序でたる例を追ひしのみ。歌にはつかの意更にあし。もしは、部立のたがへるか。さらすは、後撰の如く詞書あるべきあり。

(四七八)

凡河内躬恒

はつ雁のはつかに聲をき、しより中空にのみ物おもふかな

(釋)○中空にのみ物思ふ、たゞ、空にのみ物思ふといふとは、やゝ殊にて、何方ともつかず、物思ふをいふ。

一首の意は、初雁の聲を、はつ／＼に聞ひたる時から、又鳴くかと、空にのみ心をつけて、氣を揉むことよ、その如く、人の聲を、はつ／＼に一寸聞ひたる時から、思ふ心を言ひ出しもえず、さりとて、斷念めも出來ず、宙にばかり迷うて、物を思ふことよとあり。

(評)初二句は、初雁の聲をはつかにといひ下すべきを、はつの同音を折返して、諧調たらしむる必要上、成るべく、間近く連続せしめむが爲に、倒置したるあり。さて、意解は、全體を諷諭の作と見て釋きたるが、若し、下句を軽く聞く時は、初句の初雁のは、序詞となるなり。いづれか。

つらゆき

逢ふことは雲居はるかにある神の音にき、つゝ戀ひ渡るかな

(釋)○雲居はるかに、空遙にての意。これを三句に引續け、遙にあらるといふに、鳴神のを兼けたりあざいはむは、無下なり。○鳴神の音に聞くといふに係る序詞。鳴神は雷あり。

一首の意は、これ程思へども、その人に逢ふことは遠い事にて、只、うの遙なる雲の中にて鳴る、雷の音を聞くやうに、噂に聞き／＼して、戀しう思うて月日を経ることよとあり。

(評)遠しといふことを雲居はるかど轉義して、序詞の鳴神に寄せあらしめたり。巧あること、蜘蛛の巣を結ぶが如し。氣短く、味ひ薄きが如し。

結句、六帖、及び、家集に、戀ひや渡らむとあり。景樹、がこの方を宜しといへるは、當れり。

よみ人あらず

片糸をこゝたかなたによりかけてあはずは何を玉の緒にせむ

(釋)○片糸、より合せぬ一筋の糸をいふ。○あはずは、ばと濁るべし。○玉の緒、玉を貫く緒あり。緒は長く續く物をすていふ。鳥獸の尾、年の緒、息の緒といひ、さて、命をも魂の緒といひて、玉の緒に通はせたり。

一首の意は、一筋づゝ糸を取つて、あちらこちらに、緒を掛けて合はすれば、必ず、玉の緒にあるが、若しそれが、一つに合はぬなら、何を玉の緒にせうぞい、自分の戀もその如く、このやうに、いろ／＼と心を碎き、あちらこちらへと手を盡して見ても、若し逢はれずば、何を

(四七九)

命にして生きて居られうぞとなり。

(評)譬喩、例の巧に傷く。片糸の玉の緒は、夙々、奈良朝歌人の用ゐたりし材料にて、「片糸もち貫きたる玉の緒を弱み」玉の緒を片緒に縊りて、あせ見えたり。この歌、是則集に出でたるは、誤あり。以下悉く、詠者不詳の歌を輯む。風調體格を以て推すに、弘仁以降、元慶の頃はひままでの作、入交りたるべし。

(四八〇)

ゆふぐれは雲のはたてに物ぢ思ふあまつ空なる人を戀ふとて

(釋)○雲のはたてに 万葉集卷一、「渡津海の豊旗雲に入日さし今宵の月夜清み明くこそ、又、懷風藻、大津皇子の詩に、「雲旗張^ハ嶺前^ニなど見えて、旗の靡ける如く、亂れて棚引きたる雲を、旗雲とも、雲の旗ともいふ。手は名詞に添へていふ語にて、面手^{オモテ}、裏手^{ウラテ}、喉^{ノド}、或は、火の手、水の手など用ゐる。されば、雲の旗手にの意なり。にはの如くの意の辭にて、古事記に、「秋津羽に句へる妹、と見えたるにと同じ。

一首の意は、夕方には、雲の旗の手が亂れて見ゆるが、自分は、夕方にあれば、そのやうに亂れて、物をサ思ふワイ、自分より遙高い身分の人を、戀慕ふと云うてサとなり。

(評)譬喩の雲の旗手の縁によりて 身分高がるの意を天つ空なると轉義したり。景樹は、上句を、夕暮は雲の悲しき景色に物思ふと釋きたる、さては、旗手の語いたづらあり、又、天つ空を

る人を、舊註はすべて、遠方ある人の意に釋けり。捨つべきにはあらねど、戀に上下の隔なし。かけても及び難き人を戀へりさせむ方、面白かりぬべくや。拾遺集、

雲井なる人をはるかに思ふにはわが心さへ空にこそなれ

の趣を、併せ味ふべし。夕暮はたいなるすら、悲觀の催し易き時あれば、戀する身は、いよゝ、亂れて、物を思ふらむかし。

初句、六帖、新撰和歌には、夕されば、顯注の一本には、夕ぐれのとあり。結句、袖中抄、奥儀抄には、人こふる身はとあり。

かりごもの思ひ亂れてわが戀ふと妹あるらめや人し告げずば

(釋)○かりごもの 思ひを隔て、亂れてへかけたる枕詞。斯りたる蔭は、亂れ混ぶ物あれば續けたり。蔭は眞孤^{マコ}あり。○妹 廣き意味にては、男より婦人をさして、すべて、妹といひき。狹き意にては、妻或は情人をいへり。

一首の意は、斯蔭の乱るゝやうに、いろくと思ひ亂れて、自分が戀ひ慕ふと云ふことを、妹は知るであらうか、いや、知りはずまい、人がサ云ひ聞かさずばとなり。

(評)情天礙あり。空床輾轉の思に耐へず。意中の人は、かくとも知でやあらむ。いかで、その同情を惹くべく、殷勤の意を取傳へむ人もがあと希へるなり。古調にして、風骨凡ならず。

(四八一)

つれもなき人をやねたく白露のおくとは嘆きぬこはまのばむ

(釋)○人をや やは反動の辭。○ねたく 悔しくの意。○白露の おくといはむ枕詞。露の置くに起くをかけたり。○ぬ 寝ぬの意。○まのばむ 思はむなり。慕ふこと。

一首の意は、あの無情なるつれなき人を、このやうに口惜しう、朝晩に、起くると云うては嘆き、寝ると云うては慕はうことか、今からは、もう歎きも慕ひもすまいとなり。

(評)断念めたりといふは、断念めぬ人の言なり。畢竟、熱情の餘りに、三冬暖氣無きの人の無情を恨める、激語のみ。この情致、歌としての無窮の妙諦を具ふ。業平の「世の中にたえて櫻の無かりせばと詠めるも、この筆法なり。朝に晩にの意を、おくとは、ぬとはと轉義し、嘆き思はむの句を断ち切りて、上下に接排して、四五に對句を作るに、語調、たのづから強まりて、常住嘆き思ひ居ける意、強く表出せらる。

①

ちはやぶるかもの社のゆふだすき一日も君をかけぬ日はなし

(釋)ちはやぶる 秋部下に釋けり。○かもの社 山城國の加茂明神の社なり。○ゆふだすき 木綿の襟にて、社人の、神に仕へ奉るとて、する物なり。木綿は、古語拾遺に、穀の木を木綿なり

と註し、豊後風土記に、「速水郡楠宮郷云々、此郷中栲樹多生、常取栲皮、以造木綿、因曰楠宮郷」と見ゆ。

一首の意は、加茂の社の社人が、神に仕へまつるとて、毎日、木綿襦を掛くるが、その如く、私も一日たりとも、貴方の事を心に掛けて、思はぬ日といふは無いツイとなり。

(評)三句までは、一日もかけぬといはむ序なり。あながちに、加茂の社の木綿を掛けたるは、或は、京人の、加茂の御社に詣でて、この戀を祈れるならむ。さて、かく詠みて、かの人の憐を乞ふべく、贈れるならし。日といふ語の重疊、意調のうへに、多少の趣味を添へたり、語路暢達にして、風韻悠揚、諷すべく、誦すべし。

二句、顯註、かみの社とあり。景樹曰く、この方、事ひろくてよし、枕草子に、加茂臨時祭の條に、「千早ぶる加茂の社の木綿だすきと歌ひたる云々」とあり。これはもと、神の社のある歌なるを、かの祭に用ひられし時、加茂の社のご謠ひ變へしが、一説となりて、今の本には入れるあるべし、といへり。されど、事弘きがよきにも限らず。評語の如く見れば、却りて、事狭さが面白く聞ゆるならずや。又、結句、新撰和歌に、日をなきとあり。

○

わが戀はむなしき空にみちぬらし思ひやれども行く方もあし

(釋)○思ひやれども 思ひ遣るは思を遣り失ふあり。晴くなり。遣問、排辭の義。想像の意にも、

轉じて用ゐらる。

一首の意は、自分の戀は、虚空一杯に、満ち／＼たるらしい、心の思を餘所へ逐ひ遣つて見ても、何處へも、思の行く處が無いワイとなり。

(評) 纏綿の情懷、奇愁を催して、如何ともすべからざる人の作なり。戀を説いて、虚空に瀰漫したりの嬌語を放つに至りて、始めて詩歌の三昧に入るを得。體裁、やゝ疎漫なるが如くにして、實は、縝密あり。上句下句の終字、同音の韻を踏みたるを知れ。

○

駿河なる田子の浦波立たぬ日はあれども君を戀ひぬ日はあじ

(釋) ○駿河なる田子の浦波 駿河國庵原郡清見が崎より東へ行けば、今、薩埵峠の山下の渚に、昔の道ありて、其處より向ひの伊豆の山の麓までの海、田子の浦なりといふ。

一首の意は、この駿河にある田子の浦波は、風の烈しき所故、何時にても立つものゝ、たま／＼には、この浦波も、立たぬ日がありはするけれども、私が貴方を戀しう思はぬ日と云うては、一日も無いワイとなり。

(評) 駿河の國人の詠めるか。比興の作面白し。但、萬葉集十一、

唐泊能巨の浦波立たぬ日はあれども家に戀ひぬ日はなし。

を、些ばかり改竄したるに止まれるは、くちをし。

○

夕づく夜さすや岡への松の葉のいつともわかぬ戀もするかな

(釋) ○夕づく夜さすや岡へ 夕づく夜は、夕就く夜の意なること、既にいへり。月夜の義にあらず。されば、さすやといはれぬ事なり。一本に、夕づく日とあるをよろしき。元久時代には、既に、兩様の傳ありけると見えて、千五百番歌合に、公經の歌「夕づく日さすや岡への松の雪折、季經判に、萬葉には、夕づく日と侍り、古今の歌を思ひて松を詠まば、夕づく夜とぞ侍るべき、云々。公經は、夕づく日とある本に據りて詠み、季經は、夕づく夜とある本に就きて判じたるなり。夕づく日は、夕暮近く傾ける日をいふ。その日影の刺す岡邊の意。やは間投の嘆辭。○松の葉の 松の葉の如くの意。

一首の意は、あの夕就く日の刺す、岡のあたりの松の葉は、四季共に同じ色にて、何時と云ふ別ちも無いが、丁度その如く、自分は、何時と云ふ別ちも無い、一通りからぬ戀をまあする。とよとなり。

(評) 落ちたる夕影の、岡邊の松の裏葉を照すは、誰が眼にも着く、面白き景趣なるべし。則ち、これを、捉へ來りて、序の材料としたり。古へは、日影の刺すを以て、崇高なる觀念を興ふる、無上の形容語として、或は内日刺す宮といひ、或は、朝日の日照る宮、夕日の日陰る宮など續けたり。萬葉集十六に、

夕づく日指すや河邊につくる屋の形をよろしみるべぞよりくる
も同じ意なり。さて、この初二句を、これは、岡邊の松に轉用したるが、只、眼前の景氣を述
べたるに止まりたれば、れのづから、もとの用例と變れり。然れども、松の葉の修飾、餘に、
花やかに立派に過ぎたる爲に、下に、如何やうにも面白き意思の、出来ぬべく覺えたるを、い
つともわかぬの譬喩にのみ用ゐたるが、案外なるよりは、寧ろ、不調和あり。又、語調を案す
るに、上句太く遅しく、二句殊に力量あり。爲にや、下句との權衡を失したるが如し。
六帖には、「朝日子がさすや岡邊の松が枝のいつともわかぬ戀もする哉」とあり。

あしひきの山下水のこがくれてたぎつ心をせきぞかねつる

(釋)○山下水の 山蔭の水の如くの意。○こがくれて 木隠れてあり。○たぎつ心 涌き返りて沸
る心あり。

一首の意は、山蔭の川水は、茂れる樹木に隠れて、餘所からは見えぬけれど、あのやうに、せ
わしう瀧つて落つる物であるが、自分の戀も丁度その如く、餘所からは見えぬで、只一人、胸
の内に涌き返る心を、水を堰くといふやうに、堰き止めうと思つて見ても、なかく、堰いて
サ止めかねたワイとあり。

(評)人知れず思ふ心の忍び難きを、さて如何にせむと、打たびたるなり。万葉集に、

歎きせば人知りぬべみ山川のたぎつこゝろをせかへたる鴨(卷七)

言にいでていはゆるしみ山川の瀧つ心を堰きあへにけり(卷十一)

の類型あれど、これは、一層巧緻なり。木隠れて瀧つまでは譬喩なるも、堰きぞかねつるは、只
水の縁語にて云へるのみ。されば、その意を下に及ぼして、山下水の、堰き止めらるゝ物なら
ぬ如く、瀧つ心を堰き兼ねたり、とやうに、譬喩として釋ける諸説は、穿鑿なり。万葉の歌の
結句を参照せば、この意、いよ、明らかなるべし。

三句、新撰和歌に、うづもれて、結句、新撰和歌、及び、新朗詠集に、かねぬるとあり。まか
も、作者を六帖には、源のよしの朝臣とし、新朗詠には伊勢とし、後撰集戀四に再出したるに
は、能宣朝臣として、詞書を「女の許に遣はしける」と加へたり。

吉野川い はきりこほし行く水のおごには立てじ戀はるぬとも

(釋)○いはきりとほし 岩切通しなり。○まぬとも 爲去ともあり。舊註、死ぬとも、意は見たる
は、誤なり。

一首の意は、吉野川は早川にて、岩をも横切り通して行く水が、劇しく音を立つるが、自分は
假令、この切なき戀をするとしても、その吉野川の水の如くに、音に立て、泣きなどして、人に
は知られまいワイとあり。

(評) 忍び餘れる人の作なり。音には、立てじの序、万葉集十一に、

高山の岩本たぎち行く水の音には立てじ戀ひて死ぬとも

の同想の先型あり。戀ひて死ぬとも、音に立て、名には顯さじと、命をかけて包み忍べる、胸裏の苦悶、そも如何ばかりぞ。これは、只、戀寫たりとて、音に立てじといふに止まりて、愛の高潮を説くに於て、や、遺憾あり。二句は、さる山川の急流激湍を、よく形容し得たり。原作に勝れるは、この點のみ。四五の倒装、調を諧へむが爲なり。

初句、六帖に、三吉野のこあり。

瀧つ瀬のなかにも淀はありてふをなごわが戀の淵瀬ともなき

(釋) ○淀 淵の靜ある所をいふ。淵は水の深き所、瀬は淺き處なり。

一首の意は、山川のたぎり落つる瀬は、早き物なれど、ろの中にも、淵になつて水の淀む所はあるといふ事であるものを、それにまゐ、何故に、自分の戀は、淵の瀬のといふ別ちも無く、何時も、心苦しい事であるぞとなり。

(評) 比興の作、幽遠にして、怨旨いよく深し。佳作。廣蔭曰く、

ありてふをといへるが面白し。ものをといひても聞ゆるなれど、てふといへるは、この作者深窓の婦人にて、未だ、實際の瀧津瀬を知らず。たゞ淀ありと聞及びて詠めるに、いたく味

あり。ものをといふ時は、瀧のやうをも知りていふやうに聞ゆ。

と云へるは、拍案の快説にして、その肯綮を得たり。淵瀬ともなきは、頻り弛むことの無きの意を、瀧つ、瀬の縁にていへる、轉義なり。

山高みまたゆく水のまたにのみ流れて戀ひむ戀はあぬとも

(釋) ○またゆく水 山下の谷を流るゝ水あり。○流れて 水の流れてに、命の存在をかけたなり。存在してはながらへての約。

一首の意は、山が高き故に、あの下の方にはかり、流れて行く水のやうに、自分も切なき戀をするに云うても、表面には顯さず、何時までも、心の内ではかり、戀ひ慕うて居らうとなり。

(評) 上の「吉野川の歌の條に擧げたる、万葉の、高山の岩本たぎち行く水の云々の類型なり。また、及び戀といふ語の重言、聲調宜しく、四五倒装したり。

契沖云ふ、以上四首、寄水戀の類なり、これより下、この卷の中に、忍ぶ意を詠めるは、戀ふる人みづから忍ぶなり、後の卷なるは、世人に忍ぶなりと。

思ひいつるときはの山の岩躑躅いはねばこそあれ戀しき物を

(四九〇)

(釋)〇思ひいづるときはの山 夏部に釋けり。〇岩躑躅 いはねばの語を喚び起す序。和名鈔に、「羊躑躅、和名以波豆々之、一云毛知豆々之」とあり。和名本草に、「羊躑躅、和名以波都々之又之、呂都々之又、毛知都々之」とあり。されば、花の色白き躑躅か。景樹が、今の方言に據りて、紫の花咲くをいふなるべしと云へるは、いかいなり。

一首の意は、思ひ出す時には、常磐山の岩躑躅の名のやうに、口へ出していはすにこそ居れ、それはく、戀しいものをサとなり。

(評)些は察して下されと、うの同情を希へるなり。素より、打出でたるにあらねば、人は知るべくもあらぬを、猶、この没道理の言を爲すは、蓋し、戀の窮竟なり。面白し。體格古調を失はず。弘仁前後の作なるべし。いはつ、いはねばの重言、例の聲調に任せたる序にして、譬喩にあらず。万葉集十二、

何故か思はずあらむ紐の緒のこゝろに入りて戀しきものを
なごより胚胎したる作か。

人あれず思へば苦しけれなるの末つむ花のいろに出でなむ

(釋)〇くれあゐの末つむ花の くれなるは吳藍なり。和名鈔に、「紅藍、久禮乃阿井、吳藍、同上、本朝式云、紅花、俗用之、和名本草に、「紅藍花、和名久禮乃阿爲」とあり。秋分に實をおふし、

春に至りて、莖延び立ちて、高さ三五尺に至る。夏月、枝の末毎に花咲く。もと吳國より渡り來し故にいふあるべし。末つむ花は、其の花紅くなりたる時、衣類などを染むる料に、末を摘み採る故にいふ。宣長は、万葉集ある末摘花を、ウレツムハナと訓めり。末摘花のは末摘花の如くの意。

一首の意は、人に知られず、心の内にて思うて居れば、酷く苦しいワイ、これでは慥はぬ程に、いつその事、あの紅の末摘む花の色に出るやうに、素振に出して知らせやうとなり。

(評)人の目に着くべく、色に出でむか、げに羞かしき限あり。忍び思はむか、心の苦みに堪へぬを如何にせむ。とつ追ひつ、煩々悶々の末、猶、色に出でむか、むかしも思ひありぬるは、いかに、切なる戀ありけむ。况や、作者が、織手紅花を摘む婦人あらむをや。但、万葉集十、

よそにのみ見つゝを戀ひむ紅のうれつむ花の色に出ですとも
とあると、同喩にして、意を表裏に取做したり、創作とはいひ難からむも、出ですともは、無言なり。出でなむは、心火の切掠に耐すへして、その餘餘を吐かせむとする趣見えて、感哀深し、調も流麗にして、阻滯の跡なし。

秋の野の尾花にまじり咲く花の色にや戀ひむ逢ふよしをなみ

(釋)〇咲く花の 咲く花の如くの意。

(四九一)

一首の意は、このやうに、心の内にはかり思つて居やうよりは、秋の野の尾花に交つて咲く草花の、色に出たるやうに、いつその事、包まず打出して見やうか、餘り、逢はれさうなる様子が無いによつてサとなり。

(四九二)

(評)色に出でて戀ひなば、或は、逢はるゝ事もあらむかと、はかなき事を憑みとせり。上と同想同趣にて、上句は序あり。長立ち高き尾花隠れに、野菊桔梗などの咲けらむを、まじるといへるは、げに、妥當の抽象的の語なるべし。

わが園のうめのほつえに鶯のねに鳴きぬべき戀もするかな

(釋)○ほつえ 秀つ枝の義。上枝なり。○ねに鳴きぬ 音に鳴くは音に立てゝ鳴くをいふ。單に、鳴くといふとは異なり。

一首の意は、あれ、わが庭の植込の梅の木の高い枝に、鶯が聲を立てゝ鳴くが、自分も、あの鶯のやうに、聲にあらはして泣きもまさうなる、切ない戀もすることあり。

(評)思慕の情を慰むと欲して、頭を擡げて前庭を見れば、生憎の鶯や、音に立てゝ鳴き頻る。乃ち、忍びに忍び、堪へに堪へし憶涙、恨涙、相和して、聲を上げて泣かれぬべき、序詞としたり。抑も。音に泣くは、人の視聽をも憚らざる、絶對の戀にして、その情の切なること知られたり。二三の移り、叙法、聊か、不完全なる心地す。

あしひきの山郭公わがごとや君に戀ひつゝいねがてにする

(釋)一首の意は、貴方の戀しさに、思に焦れて、夜も寝られぬまゝに聞けば、ひたすら、山郭公が鳴くが、あれも、貴方に逢ひたうて、戀慕ひくして、寝られ難さうにするのであらうかとなり。

(評)秋部上、敏行、

秋の夜のあくるも知らず鳴く虫はわがごと物や悲しかるらむ

と同型なり。只、秋思の虫と、相思の郭公との差あるのみ。いつれか先に詠まれたりけむ。詠人不知の歌も、敏行以後に及べりと見ゆれば、俄に判じ難し。さはいへ、郭公の君に戀すの想像は、詩趣に富める警策からずや。叙法、節短く勢峻しき所あり。猶、「秋の夜の歌の評を参照すべし。」

六帖に、「わが如く君に戀ふれや郭公この夜すがらをいねがてにする」とあるは、この歌の二様に傳はれるものならむ。

夏なればやごにふすぶる蚊遣火のいつまでわが身下もえにせむ

(釋)○ふすぶる 燻すに同じ。○蚊遣火 万葉集には、蚊火とも詠めり。

(四九三)

一首の意は、この節は夏なれば、家の前にて燻べ立てる蚊遣火の、燃え上がらずに、何時までもくすくすと、下にはかり燻つて居るが、そのやうに、自分の身も、思ふことを人に言はずに、内証で、胸を焦して居るが、何時まで下燃えにして居やうぞ、いつぞ、表面へ顯さうと思ふごあり。

(評)庭前の蚊火の下燃えに燻るは、見るから、いふせく感せらるゝに、わか下燃えの苦悶に、端なく想ひ到りて、寧ろ、快活的に炎を出でむといふ。上の「末摘む花の色にいでなむ」「咲く花の色にや戀ひむなどの倚にして、忍び餘れる情懷をいへり。恰當の比興。但、万葉集十一、足引の山田もるをちがおく蚊火の下こがれのみわが戀をらくを粉本として、表裏に云へるのみ。六帖、

難波瀉すく藻たく火の打忍び下もえにてや世をばつくさむ

は、「わが戀をらくの意を、さながら承けたり。いつまでの下、反動の辭のかを添へて、その意を綜ぬべし。

初句、六帖に、夏くれば、新撰和歌に、夕さればとあり。

○

戀せじこみたらし川にせしみそぎ神はうけすぞなりにけらしも

(釋)○みたらし川 いづれの神社にもいへど、これは、加茂の御手洗川なめり。神山より流れいで

て、加茂の御社、貴船、片岡の森の内より通れる小川なり。○みそぎ 身洗にて、水もて身を洗ひ清むるをいふ。さて、^{ハツ}禊除するなり。○うけす うけは請なり。納受あり。

一首の意は、わが戀の思ふに任せぬことの切なさに、ごうが、戀をまはすまいと思つて、御手洗川にてまたりし身洗を、神は、存外に、御諾けなされずにサ、なつてままうたさうなワイとなり。

(評)ありしよりけに戀しきは、さてく、爲む方もかき事と嘆きたるなり。戀すれど人に疎まれ、戀せじと願へば神に見放さる。蓋し、愛の高潮を歌へる眞摯の作にして、失戀失望の極は、恐らくは、それ狂せむとすらむ。あはれや。おなじ事ながら、万葉集に見えたるは、おのづから、その時代の風調をそなへて、

いかにして忘るゝ物ぞあめつちの神を祈れどわが思ます(卷十三)

天地の神をも我は祈りてき戀といふものはすべてやますけり(同上)

など詠みたれど、いづれも、叙法露骨にして、このうけすぞなりにけらしもの、婉曲にして、蘊含の妙味深きに及かざること遠し。六帖に、

つらき人忘れなむとてはらふればみそぐかひなく戀こそ増れ

模倣の作、この好處を没了したり。鈍漢といふべし。

四五の句、伊勢物語には、うけすもなりにける哉とあり。本行のは、聲調、やこはくしきふしわれど、意は優りぬべくや。又、四句、一本に、うけすもとあり。

あはれてふことだになくば何をかは戀のみだれの束ね緒にせむ

(釋)○あはれてふこと あはれといふ言なり。あはれは歎辭、あゝと同じ。愛憐の義にあらず。○束ね緒 物を把ぬる芋なり。

一首の意は、思が胸に迫つて、心の亂れたる時は、聲を擧げて、ア、ハレと溜息を吐けば、少しは、心も靜まるが、そのア、ハレと云ふ言葉なりとも無くば、何をまあ、自分の戀の心の亂れを靜むる沙、即ち亂れたる物を引把ぬる、束ね緒にはせうぞとなり。

(評)戀の亂れといへるより、心を靜むる機會を束ね緒と轉義して云へり。ほど吐く息は、おのづから、嗟嘆の聲を洩らすらむ戀の奴の、呻吟の聲なり。意釋の一説は、人の、あはれとだにも言はずば、何をか、亂れたる戀の束ね緒にせむの意とせり。まかも聞ゆれど、前後の部立のやうを思ふに、差へるが如し。三句、新撰和歌に、何をかもとあるは、聲響弱くして、思入淺く聞ゆ。

思ふにはまのぶる事ぞまけにける色には出でじと思ひしものを

(釋)一首の意は、人を思ふ心と、うれを懐へ忍ぶ心と、自分の胸の内にて争うたるが、懐へ忍ぶ方がサ負けてまきうたワイ、それで、つい思ふ色目を、人に見られたさうな、エ、いつまでも、色目には出しはすまいと思つたものをとたり。

(評)糾紛せる胸中の苦悶を描き出して、餘蘊なし。思ふと忍ぶとの兩者の格闘、いかによく堪へ、いかに強く戀ひけるあらむ。下句の如きは、誰れもいふべし。既に、平兼盛も、「忍ぶれど色に出にけりと詠めり。上句の落想に到りては、所謂、天外よりせるものか。面白き擬人なり。疎宕にして奇氣あるの作。雅嘉が、まのぶるを、世に忍ぶる意と釋けるは、蓋し、當らざるべし。

わが戀は人知るらめやまきたへの枕のみこそ知らば知るらめ

(釋)○まきたへの 枕といはむ枕詞。まきたへは、下に藉きて寝る布をいふ。袖、袂、衣手、床なぞいふ語へもかけて、枕詞とす。

一首の意は、自分の戀は、きつう忍び居れば、このやうに思ふことを、かの人を知るであらうか、とても知りはずまいワイ、まかし、この間の枕ばかりはサ、若し、知るあらば知るであらうとあり。

(評)それとても知りはずまじきかの餘意あり。結句の語調は、春部上「けふこそ櫻折らば折りてめと同じ。参照すべし。知るの語、ふと見ては、無意味に、重複したるやうなれど、然らず。短歌の體製を案するに、三四五は、初二の反覆なり。形に於て、調子に於て、同じかるべきが定律なり。故に、初二と同意同語を、三句以下に於て、同調に折返すこと、珍しからず。時に或は、意を表裏にし、叙法を順逆にして、姿致を取ることあるも、猶、同語同調を追ふこと、こ

の歌の如きもあり。辨ふべし。想は、後茶、人の踏襲する所となりて、新硯を發するが細くならす。

初二句、六帖に、わが戀を人知らめやもとあり。これ、古調なり。下句、新撰和歌には、枕はかりぞ知らば知るもとあり。

○ 浅ぢふの小野の篠原まのぶとも人知るらめやいふ人あしに

(釋)○浅ぢふの小野の篠原 浅ぢふは茅のまばらに生ひたる所にて、淺茅生ふの略、茅はつばななり。野の枕詞に用ゐたり。小野は、只、野といふことにて、をば美稱、小なき野の義にあらず。又地名にも非ず。篠原は小竹の生ひたる原なり。下なる、同音のしのぶといふ語を喚び起したり。

一首の意は、このやうに、懐へ〜て忍んで思ふとまあ、先の人を知るであらうか、知りはずまいワイ、誰れも云ひて聞かす人無しにはサとなり。

(評)初二句の餘勢によりて、まのぶとも〜といはむばかりに、強く聞做さるゝこと、序歌の例なり。篠次のさまに従ひて、かく忍戀の意に解したれど、初二句の語勢によれば、三句を、よしや心に思ふどもの意に見るが、妥當あるが如し。格調蒼古なり。四句、一本に、妹まらめやとあり。人を親み思へる意顯はれて、宜しくや。且、語を易へた

る方、兩者の差別も明らかなり。六帖には、妹はまらじなとあり。新撰和歌には、初句、夕されば、三句、忍ぶれどとあり。

○ 人あれぬ思やなぞいあし垣のま近けれども逢ふよしのなき

(釋)○なぞと などは何ぞなり。どの辞下に續かすして。聞え難し。顯昭、真淵の、詞の助けに置きたるなりといへるは、妄なり。千秋いふ、このとは字形の似たるより、必ずしもを寫し誤りて傳へたるにて、もとはなぞもにてずありけむ、などもは、古歌に例多く見ゆ、近くは、この巻の中にも、「かゝり火にあらぬわが身のなぞもかく云々」とありと云へり。既に、この集の一本に、なぞもとあり。従ふべし。山田常典は、本の儘にて、下に、思ふまでといふ詞を補ひて聞くべき由いへれど、まか補ひもて行かば、いつれの詞か聞えざらむ。○あし垣の ま近といはむ枕詞なり。芦もて造れる垣は、ないがしろなる苟且の物なれば、垣の彼方此方の間近きを續けたり。顯昭は、芦の細さをこまかに組み、ひま無ければいふといへり。萬葉集に、岩橋の間近きとも續けたる例を推せば、前の説可なるべし。

一首の意は、思ふ人に知られぬ内証の思は、何たる事ぞまあ、ほんの芦垣一重の間近き所に住み居れども、逢ふ仕方が無いワイとなり。

(評)隣あたりに住める人を、只一人思ひ焦れても、何の手答へもなきま、懊惱の極、この人知れ

ぬ思ひやなぞもど、わが思ふことの甲斐なきを怨嗟したり。廣蔭が、先の人に、この思を知らせなば、逢ふ由もあらむとまで、餘意を説きたるは、過ぎたり。二句、六帖に、思やなにぞとあり。これは、意明らかなり。二句にて切るべき證とすべし。

○ 思ふとも戀ふとも逢はむ物なれやゆふ手もたゆく解くる下紐

(釋) ○逢はむ物なれや やは反動の辭として見るべし。上の「秋の野におく白露は玉なれや、又、西行の「津の國の難波の春は夢なれやのやは、これとは別なり。○ゆふ手もたゆく 結ふ手も弛くの意。○下紐 下裳の紐あり。

一首の意は、如何に思ふとも戀慕ふとも、その人に逢はれうものか、とても逢はるゝものではない、それに、その人が自分を思つて呉るゝかのやうに、結ふ手もだるい程に、何返も、下紐が自然に解くるワイ、昔から、人に戀ひらるゝ時は、下紐が解くるこいひ習はしてはあられる、自分はさうでも無いものをととなり。

(評) 奥儀抄に、人に戀ひらるゝ人は、下紐解くるといふことのあるなりと云へり。いにしへ、さる諺のありけること決し。万葉集十一、

君に戀ひうらふれをれば惟しくも我が下紐のゆふ手倦しも

さては、思ふ人に逢はむ前兆にてこそあらめと、悦べる意なり。これを表裏にして、思ひ戀ふ

とも逢はれむものかと、我が戀の就り難きを果敢なみたり。婦人の作なるべし。猶、万葉集十二に、

都へに君はいにしを誰れ解けか吾が紐の緒のゆふ手たゆきも

これも類型なり。二三の句、清輔、顯昭等の、思ひ戀ふとも我は逢ふまじきを、それも知らず戀ふるにやあらむと釋けるは、木強の言にして、更に、人情の眞諦にあらず。又、詩歌の本旨にあらず。こは、逢はれむのれの略かれたる一格なり。只、逢はむの意に見むは、いみじき誤ならむ。結句は、下紐解くるとあるべきを、倒装したり。調を諧へむ爲に。

○ いでわれを人なとがめそ大船のゆたのたゆたに物思ふころぞ

(釋) ○いで 允恭記には歴乞、万葉集には乞の字を訓めり。乞望むの意の嘆辭にして、發語にのみ用ゐる。後には轉じて、俗言のサア、イヤ、モウ、ドレヤなどの意に用ゐる。こゝも後の意なり。○とがめ 異むこと。○ゆたのたゆたに 万葉集七に、「吾が心ゆたにたゆたに浮きぬは邊にも沖にも寄りがてましを、とあるこれなり。ゆたは俗言のユツタリと同じ。これにたの接頭語を加へて、たゆたといふこと、靡くをた靡く、謀るをた謀るの例の如し。されば、ゆたにを重ねたる語にて、大やうに迫らぬ状あれば、ゆくら／＼と搖くにも云へり。

一層の意は、いやサ、自分の様子を、これ人達よ、必ず恠んで呉るゝな、自分は、大なる船の

浪に揺れて、ゆたくとする如く、どうせうかかうせうかと、落付かすに物思を去て居る、この節であるぞよとなり。

(評)いかにすれども、思の色の、ほに顯れて、治めあへざるより、まよよと、胆心を据ゑて、物や思ふど人の怪しまぬ先に、此方より打出でたり。是れ、冷靜の思慮に非ず。既に、戀の甘き香に酔ひたる人あり。狂したる人なり。さてなむ、この歌の面白きなるべき。意詞堂々として、雄渾の調なるが、中々にをかし。大船の譬喩は、萬葉集に「大船のはつる泊のたゆたひに」大船のたゆたひ見れば、など數多あり。結句、六帖に、物思ふ頃をどあり。

伊勢の海に釣するあまのうけなれや心ひみつを定めかねつる

(釋)〇うけ 和名鈔に「泛子、釣別名也、字介、」とあり。今、ウキといふ。鈎に附けて、その動靜によりて、魚の餌につけるを下す。

一首の意は、戀する自分の心は、この伊勢の海に釣をする漁師の使ふ、泛子であるかして、うかうかと浮かれて、どうせうかかうせうかと、この心一つを、いづれとも定めかねたワイとなり。

(評)浪に揺られて出頭没頭、打東打西す。嗚呼、この泛子の如き心、意緒百端なりや。云ひ出でむか、羞しかるべし。思ひ切らむか、苦しかるべし。羞しきもはた苦しきも、共に、耐ふる所にならむ。

あらず。これ、云ひも出でず、思ひも切らずして、懊惱する所以、乃ち、定めかねつる所以なり。伊勢の海をしも云へるは、この作者、伊勢詣せし都人ならむ。もとよりの伊勢人ならむには、まか断らでもあるべし。又、都わたりに近き海にて、御贄の魚なども多く奉れば、といへる説もあれど、この叙述の趣によるも、譬喩の上よりするも、眼前に、泛子の浮沈するを見たる状ならずば、をかしからず。萬葉集十一、住のえの津守網引の浮笑緒のうかれや行かむ戀つ、あらずはよりは、譬喩、一層巧妙にして、妥當なり。さるは、直喩によらずして、隱喩を用ゐたるが故ならむ。

伊勢の海のおまの釣繩うちはへてくるしこのみや思ひ渡らむ

(釋)〇釣繩 海中遠く數多の鈎を附けたる枝繩を、一條の元繩を延ばしおきて、よき頃それを繰り寄せて、食ひたる魚を捉る。これを長繩といふ。伊勢尾張にては、ながの釣(長繩の釣の訛れるならむ)といひ、淡路にては、へ繩ともいへり。これ釣繩なり。〇うちはへてくるし 打延へて繰るに、苦しをかけたなり。

一首の意は、この伊勢の海のおまの釣繩は、長う延ばして置いては、又繰り上げるが、自分は、戀故に、その釣繩の長う延へたやうに、長い月日を、それを繰ると云ふやうに苦しむ事よ、と

(五〇四)

ばかり思うて經過てやうか、思ふ人には云ひ出さずしてサとなり。
(評)上の二首は、ゆたのたゆたに物思ひ、心一つを定めかねたるを、これは、一方に、心一つに思ひ忍ぶべく定めたり。如何に、はかなき戀なりけむ。釣繩の序、これは、いよく目のあたり、海士の爲業を見ての作なる事決し。釣繩、一本、栲繩カウナヒとあり。楮の皮にて縛ひたる繩なり。網あごの綱に用ゐる。
四句、六帖に、こひしとのみやとあり。

なみだ川なになかみを尋ねけむ物思ふ時のわが身ありけり

(釋)〇なみだ川 伊勢國に在りといへり。それに、涙の川を寄せたり。

一首の意は、涙川といふ川の水上を、何處であらうと、何で尋ねたることであらう、その水上は、戀故に物を思ふ時の自分の身であつたワイ、涙がこれこの通り、身から出るはサとなり。

(評)涙の莫大に流るゝを涙川に擬へて、この水源は、悉く、わが身あることを、打驚きたる趣なり。さて、水上を尋ねる事は、例の張鷯が、河源を窮めて天に到りし故事を思へるなり。二句の辭樣など面白けれど、構想奇巧を弄びて、漸く、真情に遠ざかれるが如し。

種しあれば岩にも松は生ひにけり戀をし戀ひば逢はざらめやは

(釋)〇戀をし。をは資格所屬の助辭、景樹が、見てを渡らむの嘆辭のをと同義と見たるは、妄なり。しは、種しのしと同じき強辭。

一首の意は、種がサあれば、生えさうにも無い岩の上にも、松は存外に生わたワイ、されば、假令出来にくい戀でも、一生懸命に、この戀をサ戀ひ通さうから、逢はれぬ事があらうか、いや、逢はれぬと云ふ事はあるまいとあり。

(評)蟻の思も天、戀を戀として、その最後に到達するまで、戀ひて後己まむとす。その間、或は、無窮の障碍あらむ。或は、献身的の活動を要する事もあらむ。嘗て辭せざるなり。この高潮の情熱ありて、始めて、愛の神聖を語るべし。上句と下句とは、合拍せしめたるものにして、初句の字餘りは、四句の強き語調に均當して、平衡を得たり。比興も奇警にして、古樸の味を帯び、叙法又平凡ならず。佳作。

○

朝あゝ立つ河霧の空にのみうきておもひのある世ありけり

(釋)〇河霧の如くの意。

一首の意は、人を戀慕へば、毎朝立つあの川霧の、宙にばかり浮いてあるやうに、何時も、心が有頂天になつて、さまざまに落着かぬ思のある、世であつたワイとなり。

(五〇五)

(評)上句は、空にうきてといはむ序にて、川沿の宿の當前の實景ならむ。六帖、及び、新古今集に、山口女王、

塩がまの前にうきたる浮島のうきて思のある世なりけり

下句のさま、この女王の頃の風體にあらず。萬葉を見知る人知るべし。されば、鹽釜の作は、この歌より後の物にて、この下句を揃へるならし。

忘らるゝ時しあければあしたづの思ひ亂れて音をのみぞなく

(釋)○あしたづの あしたづの如くの意、あしたづは芦鶴なり。鶴は芦邊に住めるよりの名なり。

或は、芦の花の色に據れりといひ、或は、求食鶴の約なりと云へる説は、采らず。

一首の意は、戀しさを忘らるゝ時がサ無いから、昔鶴の飛び亂れて鳴くやうに、いろくと思ふ心が亂れて、聲に立て、泣いてばかりサ居るワイとなり。

(評)芦鶴は、亂れてなくといはむ序なり。鶴に乱るゝ由を云ふは、萬葉集に、赤人、朝霧にたづは亂れて夕霧に蛙は騒ぐ」など詠みたり。さて、同集三、金明軍の、大伴旅人の墓を悼みて詠める、

君に戀ひいたもすへきみ芦鶴の音のみし泣か朝よひにして

同想の同喩、暗合か。模倣か。原作の結句の具體的なる、感哀あり。これに優れる事萬々なり。

からごろもひもゆふくれにある時は返すくぞ人は戀しき

(釋)○からごろもひもゆふくれ 韓衣紐結ふに、日も夕暮どかけたり。

一首の意は、着物の紐を結ふと云ふやうに、日も夕暮になる時は、何やら寂しくなつて来て、衣を返すと云ふやうに、返すくサ、かの人が思ひ出されて戀しいワイとなり。

(評)何時とても戀しからぬにはあらねど、わきて、夕暮は、さる感哀のすゝむ頃ほひあり。この意を萬葉集十一、

何時はしも戀ひぬ時とはあらねども夕方まけて戀はすべなし

と詠めり。只これは、韓衣を入れて、縁語をもて鎖り續けたり。萬葉集のはこはくしくて理路に落ち、これは小巧を弄して氣短し。殊に、初二句のいひかけ、こちたく卑しげなり。拾遺集、貫之、

忘らるゝ時しあければ春の田をかへすくぞ人は戀しき

この下句と、上の歌の上句を取合せて、序詞を春の田に換へたるものゝ如し。

よひくゝに枕定めむかたもあしいかに寢し夜か夢に見えけむ

(釋)一首の意は、この頃は、毎晩く物思に責められて、あちらへこちらへと寝返りまて見ても、

眠られぬ故、どちら向に去たら眠られうやら、枕の定めうやうも無いワイ、あの何時ぞや、そのやうにして寝た事であつた晩か、よく眠られて、思ふ人が夢に見えたのであらうとあり。

(評) 始めの間こ、夢に見るばかり、打寝る餘裕もありけれ、今は、いよ／＼思ひに暮りて、夜もすがら臥しも定めず、毛詩にいはゆる、

窈窕淑女、寤寐求之、求之不得、輾轉思服、悠哉悠哉、輾轉反側、

と、同一の境遇を現するに至れるなり。萬葉集十一、

敷妙の枕うそきてよるも寝ず思ふ人には後もあはむもの

敷妙の枕うそきていねらえず物念ふ此宵ははやも明けぬかも

また同想なり。而して、この歌、風調といひ、語調といひ、節奏といひ、遙に、萬葉のに勝れず。洗煉の作なり。いかに寝し夜かの疑問、一番弄巧の處なれども、まかも、織俗からず。又、夢に見えけむは眠られけむの意を、一段婉曲に轉義きたるなり。詞の上へのみ拘泥して、必ず、夢に見むとて、枕定めむとする意とのみ、解すべからず。全体の大意を見知らむことを要す。

初句、六帖には、夕されば、新撰和歌には、戀ひく／＼とあり。

戀しきに命をかふる物ならば志にはやすくぞあるべかりける

(釋) ○まに 死ぬの連用言をいひ据ゑたる體言。

一首の意は、この戀しき苦みに、命を換へらるゝ物であるならば、死ぬといふことは、造作無きことです、ありさうな事であるワイとなり。

(評) まかし、命が思ふまゝにならぬ故、口惜しの餘意あり。萬葉集十二、

あか／＼に死なばやすけむ出づる日の入わき知らぬ我し苦しも

と同想同型なるが、これは、言盡して餘韻に乏し。

○

人の身もならはし物をあはずしていざ試みむ戀ひや死ぬると

(釋) ○ならはし物 慣し柄の物といふに同じ。

一首の意は、人の身といふものも、すべて、慣し柄のものであるものを、戀しい人に逢はずに居て、それが習はしにあつて、逢はずに済むか、それとも亦、こたへられずに、焦れ死にに死んでままうか、さうかと、これ試して見やうとあり。

(評) 逢ひたくする心の暮るを抑へむ爲に、一工夫を案じたり。所謂、出来ぬ相談にて、試みねほせむことあるべくもなし。さるをも、思ひ寄せて、千々に心を碎くが、戀の情なるべし。誹諧部に。ありぬやと心みがてら相見ねばたはむれ難きまでぞ戀しき

これは、既に試みて、悶々の苦を嘗めたる趣なり。對へて、意得べし。初句のもの辭、如何に、

廻護して見るも、安當ならず。

(五二〇)

忍ぶれば苦しきものを人知れず思ふてふこと誰れにかたらむ

(釋)一首の意は、色目に見せまいと、老つと怖へて居れば、いよく切ないものを、このやうに思つて居るといふことを、そつと人に知られずに、誰れかに話したいものであるが、誰れに話さうぞ、話さう人が無いとなり。

(評)大鏡に、「おぼしき事はぬは、げにぞ、腹ふくる、心地しける。かゝればこそ、昔の人は、物言はまほしくなれば、穴をほりてはいひ入れ侍りけめ。」と見え、上にも、あはれと打嘆くばかりにても、戀の乱れの束緒となること云へり。まして、思ふてふこと打語らむには、如何に、胸明く心地すらむ。されども、この胸裏の秘密を開くべき鎖鑰は、即ち、戀ひ焦るゝかの君の御手にあり。是れ、誰れに語らむと、打惑はるゝ所以なるべし。伊勢物語に、
思ふ事はぞたゞに止みぬべき我と等しき人しなれば
あごを思ひ合すべし。

①

こむ世にもはやありなむ目の前につれなき人を昔におもはむ

(釋)〇こむ世 未來の世あり

一首の意は、いつそこの世を、來世にありとも、早うあつてまゐつて貰ひたいワイ、そして思ふに任せぬつれない人を目の前に置きながらに、それを知らぬ先の世の事と思はうワイとなり。

(評)構想を佛經の三世流轉説に采りたり。前世の事は隔生の如しと説きて、一向に聞知する所なき由を云へるに據りて、早く來世となりて、人のつれあさを目の前に潔く忘れはてむことを希へるなり。來世たらむことは、先づ死してのうへの事なれど、さる分別を離れたる痴愚の想、これ戀の爲に血迷へる人の状態なり。この歌の妙味は、全くこゝに存す。廣蔭が、人を戀ひて焦れ死にすべく思はるゝ故、同じ死ぬ程ならば、來む世にも早なれかし、と釋けるは、戀せぬ人の理窟なり。又、景樹が、來む世は今經て行かむ世にて、年經たらむ後をいふとて、佛説の來世の意とするを否認したるは、好んで樹てたる異説にして、まひ言なり。

①

つれもなき人を戀ふとて山彦のこたへするまで歎きつるかあ

(釋)〇山彦 衍あり。或説に、ひこはひゞきの急語、萬葉集九に、足日本乃山響令動と見ゆと云へり。こは義訓ならむ。夏部に釋けるを見よ。〇歎き、長息の動詞とされる語、溜息吐くこと。一首の意は、つれない酷い人を戀慕ふと云うて、衍の應へて響く程にまで、さてもく、大きな聲を擧げて、嘆いた事よとなり。

(評)山近きわたりなどに住める人の作か。諸註の、山中ならば衍の響く程にと譯せるは、詞の上に

(五二一)

見えの事。山彦の應ふるまでは、歎聲の甚しきを誇張したるものぞ。無情の山彦の應へたるは、則ち、有情の人の、却りて、手答なき無情を反映するものにして、この誇張の程度の高ければ尚き程、面白き對照を成すべし。景樹が、餘り仰山にて、眞實の歌ならず、只讀み上げたる調のみよきなりとて、新撰萬葉集に、山彦の音のするまでとあるを采りて、この山彦は、音といふ枕なり、これは面白しなど云へるは、更に、この間に於ける、微妙の消息を曉り得ざる論あり。天彦の音羽山などいへるを一つにして、山彦を枕と思へるも釋し。萬葉集十、時鳥の歌、山彦の答へするまでほど、さす妻戀すらし小夜中に鳴く
これを藍本とはえたれど、おのづから別趣あり。

新撰萬葉集には、二句待つとて、四句音のするまで、寛平歌合には、四句を答ふるまでとあり。

行く水にかずかくよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり

(釋)○かすかく 歎書くなり。一つ二つ幾つと書付くるをいふ。

一首の意は、流れて逝く水に、一二三を書留むるは、書くそばから消えて、はかないものあるが、それよりもまだ、まさつてはかさいのは、此方を思つても呉れぬ人を、此方からばかり、思ふのであつたワイとなり。

(評)我が戀は、即ち、その最もはかなき物なる事を暗示したり。上句は、既に、萬葉集十一に、

水の上に數書く如き吾が命妹に逢はむどうけびつるかも

とあり。只、この比喩を轉用して、對比に云へるが、特徴あるのみ。但、萬葉のは、更にまた出處あり。涅槃經に、

是身無常、念々不住、猶電光暴水幻炎、亦如畫水、隨畫隨合、

來歴を吟味して、その異同に注意を拂ふ時は、亦、多少の趣味なきにあらず。下句、思はぬ、思ふと、同語を反對の意に掛合せて、曲折を作り、姿致を取れり。意旨幽怨にして、語路聲調、兩つながら、流朗なり。

○

人を思ふ心はわれにあらねばや身のまどふだに知られざるらむ

(釋)○われにあらねばや 我が身に存在してあらねばやの意。諸註、我が物にあらねばやの意に解したるは、いかゞ。

一首の意は、人を戀しう思ふ心は、浮かれ出して、自分の身には無い故かして、大切なるこの自分の身の、うろたへ迷ふのさへも、知られさいのであらうとなり。

(評)戀は一種の精神病なり。或物に對してのみ發作する情狂なり。たまく、本性に反りたる時我れど我が行爲を訝り、我が心を疑ふ。この撞着が、乃ち、この歌の成る所以あり。好處は、上句にあり。

思ひやるさかひはるかになりやすまるまごふ夢路に逢ふ人のなき

(釋)○思ひやる 排悶の意が本義なれど、こゝは一轉して、想像する意に用ゐたり。

一首の意は、戀しい人のことを常住思ひ遣つて居るまゝに、その思ひ遣る道も、段々深入りして、場所が遠う遙になりもするのやら、あちこちと思ひ感ふ夢の路には、一向に出逢ふ人が無いツイとなり。

(評)夢にも思ふ人に逢はざる由なり。夢を夢路といふことあるより、遠き野山に感ひありきたる旅路には、行逢ふ人も無きを聯想して、夢路に人の子一人にも逢はぬは、餘り思ひ遣り過として、さる途方も無き遠境に行感ひたるにやと、怪訝したり。想ふに、實は、その夢だも結ばぬなるべし。構想、尖奇。

○

夢のうち逢ひ見むことを頼みつゝ暮せる宵はねむ方もなし

(釋)○宵 夜といふと同じ。

一首の意は、せめては、夢のうち戀しい人に逢はうことを、晝の内から、ひたすら頼みにしゝて、待兼ねて、やう／＼日を暮したる宵は、却つて心が澄んで、さうして見ても、寐やう仕方も無いツイなり。

(評)暮せると云へる、如何に、心待ちに楽しみとまたりけむ。生憎や、目はさゆる、心は焦燥る、

輾轉反側、寐付かれざるを如何にせむ。朝疾く起くべく早く寐たる宵など、かゝる事、常にありなり。宵はと差別を立てたるに、常は快く打寐たりし趣反映せられて、面白し。かく些少の潤色こそあれ、通篇一氣呵成の渾體あり。韓偓の詩に、「夢狂翻惜夜、同想といふべくや。さて、廣蔭が、人のつれなくて現には逢はれぬまゝにと、餘意をいひ添へたるは、蛇足なり。景樹が、夢を見るに、さまざまの修法などして、暮るゝとやがて聞に入りしあるべし、淫佛の弊なり、と云へるもいかい。この時代にはありける事と見ゆれど、修法の事は、この歌を釋かむには、無用の贅説なり。

○

戀死ねとする業ならしうば玉のよるはすがらに夢に見えつゝ

(釋)○よるはすがら 夜は夜通しの意。

一首の意は、これはまあ、必ず、戀焦れて死んでまへと云ふ心で、思ふ人のする爲業であるらしい、何故あれば、夜は夜通しに、思ふ人が夢に見え／＼して、現實には、更に逢うても呉れぬツイとなり。

(評)戀の爲に、神經昂進して、非常に、鋭敏となれる人の作ならむ。人のつれなきより、動もすれば、邪推も起りて、我れを惡みて戀死ねとにやなど、人の上をのみ、怨みがましく咎めたるが

妙あり。されど、この句、萬葉集十一に、

戀死かは戀ひも死ねとや玉銚の道行き人にことも告げなき

戀死なば戀ひも死ねとや吾妹子が吾家の門を過ぎて行くらむ

などありて、夙く、古人の、道破を経たるものあり。奇警にして、目につき易きより、亦、後

人の陷襲する所とありて、六帖にも、

戀死ねとする業ならし玉章のたよりも見えず成行く見れば

とあり。よるはすがらに云々は、晝は日ねもす思ひ暮せるに、對照したる語法あり。されば、

比較的、省筆の必要尠き、詩形の尨大なる長歌の如きは、皆、聯對して叙したり。萬葉に見え

たる、

「ぬば玉のよるはすがらに、赤羅引く日も暮るゝまで、」赤根さす晝はまみらに、ぬば玉のよ

るはすがらに、「茜さす晝はまめらに、ぬば玉のよるはすがらに、

の類是あり。

○

涙川枕なかるゝうきねには夢もさだかに見えすぢありける

(釋)○うきね 浮宿なり。水上に泊るをいふ。さて、憂きをかけたなり。

一首の意は、涙が川なして、それが爲に枕が流るゝ、かう云ふ憂いつらい浮宿では、寝入り

兼ねて、夢もまかとは見られ無い事であつたワイとなり。

(評)涙の多量なるを誇張して、川に譬喩し、さて、枕流るゝ浮寝と續けたり。水上の假泊、夢も結

び難き習ひを、下に思へるにて、其の見むと希へる夢は、そも何ならむ。かの人の上なり。思

ふ君の事なり。萬葉集四、

まきたへの枕をくゝる涙にぞ浮宿をしける戀のまげきに

この藍本なり。かやうの想は、寧ろ、誇大に過ぐるを面白しとす。枕を潜るよりは、枕を流す

涙川、水嵩増れり。但、下句平凡なり。

○

戀すればわが身は影となりけりさりこそ人に添はぬもの故

(釋)○影となりけり 影となるは、瘦衰へて、日にうつりて見ゆる、影法師の如くになれるをいふ。

但、朝夕の日影ふさはしかるべし。細長く地に影を引けばなり。故に、萬葉集には、朝影にな

る由をのみ詠めり。○ものゆゑ 早く解けば、ものながらの意、

一首の意は、戀に打込んで居れば、自分の身は、このやうに瘦せ衰へて、影法師のやうになつ

てままたたワイ、さうかと云うて、思ふ人に添ひもせぬもの故、何の詮も無い事よ、影ならば、

人に立添ひさうなるものとなり。

(評)影の一語に就いて、一理窟を試みたり。只、この影が、實在の影ならぬが故に、沙上の堂舎、理

路に陥らざる所以なり。上句は、奈良時代に、まはく縦返されたる想にして、萬葉集に、

朝影に吾が身はなりぬかきろひのほかに見えて行きし子故に(十一)

朝影に吾が身はなりぬから衣すそのあはずて久しくあれば(同)

夕づく夜あかき闇の朝影に吾が身はなりぬ汝を念ひかねに(同)

年もへず歸りきなむと朝影に待つらむ妹が面影に見ゆ(十二)

などあり。されば、下句のみが、この生面なり。愁來瘦去、人それ老いむとすめり。あはれや。

二三の句、新撰萬葉に、吾が身を影となりにけることあり。

○ かゝり火にあらぬわが身のなぞもかく涙の川にうきてもゆらむ

(釋) ○かゝり火 和名鈔に、「夜篝火、師説云比乎加々利邇須、今案、漁者以鉞作篝火、水者名之、此類乎、」とあり。魚を漁する者、篝火を焚きて水面を照射し、魚の寄來るを待ちて捉ふ。川にも海にもすることなり。

一首の意は、篝火こそ、水の上に浮いて燃ゆる物なれ、その篝火でも無い自分の身が、なせにまあ、このやうに、涙の川に浮いて焦れ燃ゆるのであらうとなり。

(評) 人に戀焦れて、涙に身の浮くばかりあるより、浮きて燃ゆる漁火を聯想し來りて、涙の川を流しかけたり。涙の川のごとは、既に、上に云へるが如し。構想、ますく、尖奇に走れり。

結句、諸註、思ひの火の燃ゆると解きたるは、似て非あり。これは、身の燃ゆると續くにて、別に、思ひと云ふ物の、燃ゆといへるにはあらず。

後撰集戀四に再出したるには、「女につかはしける」と、詞書ありて、二三の句、あらぬ思のいかなればとあり。六帖には、二句、あらぬ物から、結句、浮きて見ゆらむとあり。

○ かゝり火の影となる身の侘しきはながれて下にもゆるなりけり

(釋) ○かかれて 流れてに存在れてをかけたなり。存在れてのごとは、上の「山高み下行く水の下にのみ流れてこひむの條に釋けり。

一首の意は、篝火の映りたる影は、水の下にて燃ゆるが、丁度そのやうに、戀に瘦衰へて影ののやうになる自身の、難義に思はるゝごとは、死にもせず生き長らへて、心の内ではかり思うて、胸の燃ゆるのであつたワイとなり。

(評) 同じ材料を用ゐても、この頃のは修飾多く、眞摯の點に欠けるところあり。是れ、萬葉の後に
出でて、更に、生面を開かむとせし結果なり。上に擧げたる萬葉の朝影と、この集の影とを比較して、その風調の變化を味ふべし。歌は、上のご同調同体同巧なり。

○ 早き瀬にみるめおひせばわが袖のなみだの川に植ゑましものを

(釋)○みるめ 和名鈔、「海松云々、水松、状如松而無葉、和名美流、」とあり。布は昆布、荒布など、

(五二〇)

海藻につけて呼ぶ稱。さて、海松布に見る目をかけたり。

一首の意は、海中に生ゆる海松布が、川の迅い瀬に生えて育ちもするものならば、戀しい人を相見ることの無いのを嘆く爲に、早瀬になつて流るゝ、自分の袖の涙の川に植ゑやうものを、さすれば、海松布の名の如く、戀しい人を見る目もあらうと思ふに、生憎、海松布は、早瀬に生ゆる物ならねば、致し方もなしとなり。

(評)濁ける者は水を擇ばず、戀する者は手段を問はず。はかなき物種に就けても、せめては、かくもあれかしと希ひて、多少の慰藉を得むことを求む。海松布の稱によれる構想、ようせずば、織細に流れて、偽飾に陥るべきを、これの希望の不合理なるが、大に詩味ありて、怨嗟の意、殊に深げに聞ゆ。さるを、海松は海にこそ生ずれ、河にはいかでなごいはむは、無下なり。六帖には、作者を貫之とし、結句、植ゑて見ましをどあり。語勢、やゝ弱し。この歌の趣にては、この句、強く力あるをよしとす。本行のに従ふべし。

○

おきへにも寄らぬ玉藻の浪のうへに乱れてのみや戀渡りあむ

(釋)○おきへにも 沖にも邊にもなり。沖は海の遠き奥をいふ。邊は海端をいふ。○玉藻 玉は美稱、藻は海草のすべてを云ふ。

一首の意は、自分の戀は、沖の方へも海端へも寄らずに、玉藻が浪の上で乱れてあるやうに、思ふ人に之云ひ出しもせず、又思ひ切ることもえせず、ごちへも就かすに、心が乱れてばかり居て、月日を経つる事であらうかとあり。

(評)わが國は海國なり。神代の歴史は海の歴史なり。かゝれば、沖つ藻、邊つ藻の、歌詠に上ること久しかり。天孫の御歌、その始をなし給ひ、奈良時代の歌詠に至りては、枚舉に追わらず、人麿の句に、

香青ある玉藻沖つ藻、朝羽ふる風こそ寄せめ、夕はふる浪こそ來よれ、浪のむたかよりかくより、玉藻なす寄り寐し妹を、

と見え、祝詞には、

沖つ藻は、邊つ藻は、

と連ねたり。さて、この玉藻の譬喩を借りて、わが紛糾せる情緒を陳べたり。巧緻。

○

芦鴨のさわぐ入江のまら浪のまらずや人をかく戀ひむとは

(釋)○芦鴨 芦鴨の語例と同じ。上に釋けり。○まらずや やを假に歎辭と解したり。

一首の意は、芦鴨の騒ぐ入江の白浪の、まらと云ふやうに、知らぬことよ、人をこのやうに戀しう思はうとはとあり。

(五二二)

(評)上句は、白浪のまらすの同音を疊みたる序あり。青き中にちりりくさ波の白く見ゆる景色面白しと、景樹は云へり。但、萬葉集十一、

芦鶴のさわぐ入江の白菅のまられむ爲とちたかるかも

の序詞を拘へるのみ。まらすやは、上來の語勢を味ふに、他にかけて見べき語なり。やは疑辭たるべきなり。さては、結句の語意に打合ひ難きをや。意釋は、舊説のまらに、假に施したるのみ。酷だ、妥當を欠く。

六帖には、下句、まらすや君はわが戀ふらくをどあり。意明らかにして、思ひ入りたる趣見え、高古の風ありて、倒装の語調、いかにも強く、よき歌なり。萬葉の下句に優れり。本行のは、或は、これを誤り傳へたるにはあらしか。入丸集には、二句、入りて鳴く音の、結句、まらすや妹をどあり。

人知れぬ思をつねにする河なる富士の山こそわが身なりけれ

(釋)○思をつねにする河なる 思を常に爲るに、駿河をかけたなり。

一首の意は、戀しいかの人に知られぬ思を、いつもくするこの自分の身に、譬ふる物は外には無い、下の火は餘所に見えずに、常住烟が立つて燃ゆる、あの駿河に在る富士の山がサ、即ち、自分の身であつたワイとなり。

(評)「富士の山の烟も立たずなり」と、序文中に見えたるが、都良馨の富士山記には、

其頂中央窪下、體如炊飯、云々、其飯中、常有氣蒸出、其色純青、窺其瓶底、如湯沸騰、其在遠望者、常見烟火、

とあれば、この歌も、貞觀頃の作なるべし、富士の火の、下にのみ燃えて、餘所に見えぬを、わが心火の燃えながら、思ふ人に知られぬに想到して、普通ならば、譬喩の叙法を采るべきを、直に、富士の山はわが身なりと斷言せたるか、この奇處、峻麗、はた、好處とやいはむ。

こぶ鳥の聲もきこえぬおく山のふかきころを人は知らなむ

(釋)○おく山 深山をいふ。秋部下に釋けり。○ふかき心 一方ならず思ふ心をいふ。

一首の意は、飛ぶ鳥の聲さへも聞えぬ程の、深い山のやうなる、深い思入つたる心を、かの人、は、ごうぞ、知つて貰ひたいワイとなり。

(評)奥山のまでは序、深山の形容を悉せり。聲ものものは、例の強き意あり。

あふ坂のゆふつけ鳥もわが如く人や戀しき音のみ鳴くらむ

(釋)○ゆふつけ鳥 木綿附け鳥ならむ。鶏を云へるか。顯昭曰く、世の中騒しき時、君の御祈に、

四境の祭といふ稜あり、鶏に四手を附けて、陰陽師に凶しき事を祈りつけさせて、四境の間に

放さるゝなり、されば、木綿附け鳥といふ、逢坂は、この平安城にては、東方の關、四境の一也、と。猶、雜部下、「誰がみそぎゆふつけ鳥か云々の條に云ふべし。

一首の意は、逢坂の關に放してある、木綿附け鳥といふ難も、自分のやうに、人がサ戀しいのかして、自分と同じやうに、聲をばかり擧げて鳴くのであらうぞとあり。

(評)上に、「足曳の山時鳥わが如や云々と詠めると同想。そこに云へるを参照すべし。戀しきは上のやの係辭の結びなるが、連體言なる爲に、直に、音といふ體言にいひ續けたり。藕斷之絲絶えざる語法。

あふさかの關に流るゝいはる水いはで心におもひこそすれ

(釋)○いはる水 岩間の清水をいふ。逢坂の關の清水を云へるならむ。

一首の意は、逢坂の關に流るゝ、岩清水の岩といふやうに、口にはいはすに居て、心に深うてサ居るツイとあり。

(評)上句は、岩清水いはずと、同音を疊みたる序なり。譬喩にはあらず。されば、廣陰の、岩清水の滿ちこぼるゝ如くに胸に餘れども、口にはいはすしてと釋けるは、非なり。聲調流麗、齒牙に碍らず。

下句、六帖に、いはでしもこそ戀しかりけれとあり。

うき草のうへは茂れる淵あれや深きこゝろを知る人のあき

(釋)○うき草 和名鈔、「萍、和名宇木久佐、無根浮水上者也、」とあり。

一首の意は、うへへに出して見せぬ自分の心は、浮草が水の上には茂つて、底の見えぬ淵であればかして、この深い心底を知つて呉るゝ人が無いツイとあり。

(評)初二句、うへはうき草のこゝろあるべきを、調に任せて、倒装したり。比興巧にして、感哀等閑ならず、語勢又毫釐の弛みなし。深き心を知る人のなき、かるが故に、戀する人は、意中の人の同情なきに煩悶し、世を憂ふる人は、黙してそれ已まむとすらむ。但、部立に依れば、戀の意とのみ見るべし。

うちわびてよばはむ聲に山彦のこたへぬ山はあらじこそ思ふ

(釋)一首の意は、胸に迫つてせむ方あくて、大聲に喚ばらう聲に、衍の響いて答へぬ山は、あるまいとサ思ふツイ、然らば、これ程に深く思ふ事あれば、彼方からも、少しは思うて呉れさうなものごとあり。

(評)有情の山を以て、無情の人に對したる諷諭なれば、山彦の答へぬの擬人、いよゝゝ、諷誡の意を深めて妙なり。結句の字餘り、春部上、「鶯の鳴かぬ限はあらじとぞ思ふと同じくて、語調

強く、ひとへに、怨めしく思ひ入りたる態見ゆめり。
後撰集戀五に再出したるには、「返しせぬ人に遣しけると、詞書を添へたり。六帖には、山は
を空はとあり。」

(五二〇)

心かへするものたもが片戀はくるしきものこ人にあらせむ

(釋)〇するものたもががは希望の辞、がなど同じ。〇片戀 片思と同じ。

一首の意は、互に人の心が取換へらるゝ物であら、あつてはしいワイ、さらば、自分の思ふ
心と、かの人の思はぬ心と入れ換へて、片思は苦しい物といふことを、つれないかの人に思ひ
知らせうワイとなり。

(評)心かへは面白き落想ながら、あながち、斬新にもあらざるか。さるは、天武紀に、「是日爲天
皇招魂」といふこと見え、職員令鎮魂の義解に、「謂鎮安也、人陽氣曰魂、々運也、言招
魂遊之運魂、鎮身體之中府、故曰鎮魂」とあり。又、延喜式に、鎮魂祭の祝詞あり。魂魄の遊
離を信ずることは、其時代の通想なれば、從ひて、反魂の際、謬りて、甲乙の身體を取違へて
入換はりなごしたる、俗説もありしなるべし。これを戀に取合せて、人に我が苦を知らせむと
希へるが、この特想あり。列子に見えたる、扁鵲が、公扈齊嬰二人の心肝を入れ換へしを典故
とするは、非ならむ。到底不可能の事をも、その萬一に望を繋ぎて、千々に心を碎くはかなさが、

即ち、戀の真情なるべし。人に知らせむとある、怨恨の意殊に深し。ものといふ語の重複、不
用意に出でたるが如し。白壁の瑕疵なり。

結句、頭本に、思ひ知られむとあり。怨んで怒らざる趣は、この方にあり。

よそにして戀ふれば苦しいれ紐のおまじ心にいざむすびてむ

(釋)〇いれ紐のおまじ心に云々 顯昭曰く、入紐は、雄紐雌紐ふたつを取合せてさすものなれば、

同じ心に結ばむとは詠めりといへり。中身を心といへば、通はせて用ゐたり。

一首の意は、このやうに、隔ちて餘所に居て戀慕へば、苦しいワイ、されば、入紐の兩方の紐
を一所に結び合はすやうに、これからは、かの人と同じ心に得心して、ドレヤ、一所に昵んで
居ることにせうとあり。

(評)男女いづれか、相手の心の、未だ諾はれぬ所ありて、隔たり居たる者の、相住せむことを希
へるならむ。さて、云ひ遣れるならむ。素より、十の七八は、結ばるゝ望の無きを、いざ結び
てむと云へるが、思ひ迫れる情の、横溢したる態見えて面白し。入紐の譬喩は、萬葉集十二、
何故か思はずあらむ紐の緒のこゝろに入りて戀しき物を

の先鞭あれども、想の殊なれば、何かはあるべき。漢詩に、荇に、同心結を詠じたるも、同じ
事なり。同じ心を、宣長は、同じ所の誤寫ならむといひ、景樹は、下句聞えず、さりとて、所

(五二七)

にては結びてむの語をどまらさずと云へり。されど、こは誤解なり。意釋に云へる如く見ば、何事もなきをや。

(五二八)

春たてばきゆる氷の残りなく君がこ、ろはわれにとけなむ

(釋)○氷の 氷の如くの意。

一首の意は、春になれば消ゆる氷のやうに、貴方の心は、さうぞサツパリと、自分に打解けて貰ひたいワイとなり。

(評)平凡の譬喩なり。序歌にはあらず。

あけたてば蟬のをりはへ鳴きくらしよるは螢の燃えことを渡れ

(釋)○あけたてば 萬葉集に、「明立たば松のさ枝に、夕去らば月に向ひて、とある。明立たば」と同語。夜の引明ければの意。○蟬の、螢の、のはの如くの意。○をりはへ 時延あり。夏部に

釋けり。

一首の意は、この頃は、夜が明くれば、晝は蟬のやうに一日泣いて暮し、さて日が暮るれば、

夜は螢のやうに思に胸が燃えてサ、夜を明すワイとなり。

(評)二六時中、思に燃えて泣く由あり。それを晝夜に引分けて、蟬と螢とをやとひ來りて、意を對偶せ

しめ、合掌の句法を取りたり。委しくは、あけたてば晝は蟬の、暮るれば夜は螢の、といふべきを、譲り合せて詞を省きたり。さて、かやうに、一つくんに、分解的に叙ぶるが、総合的にいふよりも、感觸を與ふる点に於て、強きことを聞知るべし。

夏虫の身をいたづらになす事も一つおもひによりてなりけり

(釋)○夏虫 夏季の虫をば、すべて云ふべきなれど、こゝは、火取虫を云へり。○一つおもひ一つ心と語例同じ。おもひは戀の思あり。火をかけたなり。

一首の意は、夏の虫が、身をむだにして捨て、まゝ事も、何かと思へば、火を取らうと云ふ、一つの思に因つての事であつたワイ、自分が、かの人の事を思つて、其の思の火に身を燃やして、つら、わが身をくづをらしてまゝのも構はぬと、同じ事よとあり。

(評)六度集經第八、

以火爲色、人爲飛蛾、蛾貪火、色身燒煮、

と、同じ感想あり。恐らくは、これを再演せしものあらむ。但、經文は理を拆くに忙しくして、この譬喩の、蘊含の味あるが如くならず。細く枯びたる風體、戀歌の姿として、元久時代の歌人の希ひしところあり。

(五二九)

夕さればいとゞひがたきわが袖に秋の露さへおきそはりつゝ

(釋)一首の意は、夕暮になれば、人の戀しさが増して、涙がこぼれて、酷く、乾きにくき自分の心に、時節柄さて、秋の露までが置添ひくして、いよく乾かぬ故、難儀なりとあり。

(評)夕暮はさびしさに、いとゞ、人の戀らるゝ時、又、露のおく時なり。則ち取合せて、袖の涙を秋の露と、誇大にいひなせり。楚調、凄然たるものあるが如し。宣長が、初句を三句に續けて解けるは誤なり。

○
いつとても戀しからずはあらねども秋の夕はあやしかりけり

(釋)一首の意は、何時と云うても、戀しくあひ時は無いけれども、格別に、秋の夕方は戀しくて、合點の行かぬ事であつたツイとあり。

(評)樂天の詩、
大抵四時心惣苦。就中腸斷是秋天。

の意に加ふるに、一日の中の、殊に、悲涼ある夕暮を以てしたり。さて、この秋の夕に戀の意を取合することは、萬葉集二十、

我がせこが宿なる萩の花咲かむ秋のゆふべはわれをしぬばせ

の先例あり。されど、なあがち、如上の詩歌を撮合して、わが物としたるにはあらず。かやう

の感想は、誰れも思ひ寄ることなれば。秋部上、

いつはとは時はわかねど秋の夜ぞ物思ふ事のかぎりありける

は、全く、この歌より胚胎せしものあらむ。

下句、小町集に、あやしかりけり秋の夕暮となり。

○
秋の田のほにこそ人を戀ひざらめなごか心にわすれしもせむ

(釋)○ほにこそ、ほは秀にて、表面に顯はつゝを云ふ。秋の田の穂とかけたり。

一首の意は、この節の秋の田の穂に用るやうに、さうとあらはにす、かの人を戀ひもせぬであらうが、まかし、何として、心には忘れもせうぞ、決して忘れはすまいとなり。

(評)結句の語調、やゝ、纖弱なるが如し。こは、打任せたる上にて云ふのみ。情況に依りては、或は、可あしむ。

○
秋の田の穂のうへを照らす稻妻の光のまにもわれや忘るゝ

(釋)一首の意は、この節の秋の田の稲の穂の上を照らす電の、ピカリと光る程の一寸の間も、私はサ、貴方の事を忘るゝか、いや、それ程の間も忘れはせぬとなり。

(評)我はかばかりに思へども、君はさ程までにはと、覺束なみたり。これ、結句の意調に因りて生

する餘意にて、かく詠みて、其の人の許に贈りけるならし。稻妻の光のまを、少時にいひ做す
ことは、佛説より來れる想と覺し。所謂、電光石火の譬喩是れなり。
結句、六帖に、君を戀しきとあり。

(五三三)

人めもるわれかはあやな花薄なごかほに出で戀ひずしもあらむ

(釋)○人めもるわれかはあやな 人めもるは人目をはかりまもる義、即ち、人目を憚ることなり。

あやなは、春部下、「山吹はあやなを咲きその條に釋けり。

一首の意は、今は人目を憚る我が身かまあ、何もこのやうに、人目を憚る身にもあいつい、
わい、分別無い事よ、されば、何として、花薄の穂に出るやうに、現して戀ひずにさまあ居や
うぞ、いざ表立つて戀せうとあり。

(評)わながち、打出ても、人の咎めを負はざるべき、間柄と見えたり。されども、猶、羞澁、相思
の意を通じあへざるが、戀の弱みなるべし。さるを、驕然、意を決して打出でむとあり。

あわ雪のたまればがてに碎けつゝわが物おもひのちげき頃哉

(釋)○あわ雪 和名鈔に、「沫雪、阿和由岐、其弱如「水沫」と見えて、弱くて、水沫の如く消易
き故の名なり。後世、淡雪と心得て、春降るをのみいふと思へるは差へり。○たまればがてに

溜り難なまにの意。

一首の意は、木の枝などに、泡雪の溜るかと思れば溜りかねて、落ちて碎けしむるやうに、
自分の胸がいろくりに碎けて、さてく、物思の數々ある、この頃なることよとなり。

(評)初二は序あり。溜り難くして碎くるは、地上の雪の状にあらず。木の枝おごに降るを云へるな
るべし。

おく山の菅の根まのぎふる雪のけぬこかいはむ戀のちげきに

(釋)○菅の根まのぎ 菅は麥門冬、篋菅の類をすべて云ふ。麥門冬にも、大葉小葉の二種あり。小
野博云ふ、大葉のは藪蘭、小葉のはジャワガヒゲといふと云へり。さて、菅の根は、菅の葉の
誤あるべし。まのぎは押靡かして降り徹る意なれば、根にては相應せず。萬葉集には、菅の葉
まのぎとあり。

一首の意は、奥山の菅の葉を押付けて降る雪の、消えてままうと云ふやうに、自分はもう、消
えて死んでままうと云うて遣らうか、かう思が繁くしては、如何にも溜らぬによつてサとなり。

(評)三句までは序なり。萬葉集八、

高山の菅の葉まのぎふる雪のけぬこかいはも戀のちげけく

とあるを、二三、耳遠と詞を、この時代の改めて傳へたるのみ。菅の葉をしも思ひ寄れるは、

(五三三)

菅葎など、常に取馴らされ、其の實は染料にも用ゐれば、おのづから、人目に親しければあらむ。さて、けぬごかいはいはむは、只、歎息の餘に發したる、心中の希望なり。必ず、云ひやらむとするにはあらず。情景兼ね到りて、風調高邁あり。詞は、すべて、萬葉を以て優れりとする。高山は、殊に、菅の葉凌ぎ零る雪に、恰當の場處あるを思へ。

(五三四)

古今和歌集第十二

戀歌二

題あらず

小野 小町

思ひつゝぬればや人の見えつらむ夢ご知りせば覺めざらましを

(釋)一首の意は、思ひくして寝たる故に、戀しい人が、夢に見えたのであらうか、ニ、その時に、夢ご知りもまたるならば、覺めずに居やうものを、残念の事をまたりとなり。

(評)萬葉集十五、

小町(小町)をあしきり(せむら考の説)

思ひつゝぬればかもしなぬば玉の一夜もおちすいめにし見ゆる

の意を上句に約めて、更に、一層の趣向を立てたり。素より、肺腑の語にして、徒に、語言の巧を弄するものと、その趣を殊にす。夜來の好夢を覺醒して、眉山暗淡、殘粧を試むるに備へ、几帳の蔭、艶にゆかしきものあり。

うたゝ寢に戀しき人を見てしより夢てふものは頼みそめてき

(五三五)

(釋)うたゝ寝 假睡なり。

一首の意は、ホンの假寝に、戀しい人を夢に見たりし時から、はかまい夢と云ふ物は、なかくよい物と、頼みにまはじめて來たワイとなり。

(評)夢幻と運ねて、はかなき例に引かれたる夢も、頼もしき所あるを、意外と感じたる趣、夢てふものはと云へる語調に見はる。戀の情に耐へざる折の作。

○

いとせめて戀しき時はうば玉のよるの衣をかへしてぞさる

(釋)いとせめて 最^{いと}迫りての意。○よるの衣 寝巻をいふ。

一首の意は、衣を返して着て寝る時は、思ふ人を夢に見ると云へば、自分も、酷くさし追つて戀しい時は、せめて、夢になりとも見て慰まむと思つて、寝巻を裏返しにして寝るワイとあり。

(評)さる俚諺の夙くよりありしなるべし。萬葉集には、

吾妹兒に戀ひてすべなみ白妙の袖かへましは夢に見えさや(十一)

吾背子が袖反す夜の夢ならしまことも君に逢へりしが如(十二)

白妙の袖をかへし戀ふればか妹がすがたの夢にし見ゆる(十二)

あぞ、皆、袖を反すと云へり。契沖が、衣を反さざれば袖も反らざれば、袖反すは衣反すに同じと論へるは、強ひたり。かやうの言は、時代の推移に従ひて、少々の變化あることなり。只、奈

良時代には袖を反し、平安朝になりては衣を反して寝れば、人を夢に見ると云ひ慣へるのみ。さて、せめての慰安を得べく、さるはかなき業をも爲て見むとするが、戀の哀なる情なるべし。

素性法師

あき風の身に寒ければつれもなき人をぞたのむ暮るゝ夜毎に

(釋)一首の意は、秋風が身に入みて寒い故に、日頃つれない人をサ、若し、物の哀さを知るやうになつて來て呉るゝ事もあらうかと、頼みにすることよ、日が暮れて夜になる度毎にサとなり。

(評)秋風の寒く吹く夜は、つれなき人の心もや弱ると、纒に、一縷の望を繋ぎて、下待つらむ心よ。それも、わが秋風に對する感觸を本としたるなれば、いよく、覺束なき憑みなるぞ哀なる。女に代りて詠める作か。

あもつづも寺に人のわざあける日、あんせい法師の、だう

しにていへりけることばを歌によみて、をのゝこまちがも

こに遣しける、 あべのきよゆきの朝臣

つゝめども袖にたまらぬ白玉は人を見ぬめのなみだありけり

(釋)つゝめつづも寺云々 あつめつづも寺は、和名鈔に「山城國愛宕郡出雲以都毛、在上下」と